

行く姿はハッキリとまぼろしに見えました。青い／＼、廣い／＼、大空か海かわかりませぬ清らかな、美しいものが、お互ひに血をはきながらもシツカリと一ツに抱き合つてゐる、あなた様と私の身體を吸ひ込まうとして、はるかの向ふにピカ／＼と光りながら待つてゐるのが見えました。さうしてあなた様と私とがズン／＼と其の方に吸ひ寄せられて行きますのが、何とも言へませず氣持ちよく思はれました。

けれども、そのまぼろしが消えますと、私は一生懸命の思ひで、やつと氣を取り直ししました。さうして息も絶え／＼の思ひを致しながら、血のあとを包み消しまして人力車に乗つて、此の北里先生の療養院に参りましたが、もう私の生命は無いものと存じまして、無理をしてはならぬといふ係りのお醫者様のお言葉をお受けはしながら、此の紙と鉛筆をソツト寢床の下へ忍ばせまして、看護婦さんの隙を見てはお手紙を書いて居るので御座います。

この手紙をおしまひまで、お讀みになりますれば貴方様は、すぐにあるタツタ一つの事を、お思ひ出しになるに違ひないと思ひます。それはあなた様に取りますして何でも無いほどに、よくおわかりになつてゐることかと思ひますが、それをお思ひ出しになりさへすれば、すべての祕密を何の苦もなく解いておしまひになることゝ信じて居ります。

いづれに致しましても、あなた様と私との間にまつはつて居ります不思議な運命の謎を解いて頂けますお方は、此廣い世の中に、あなた様お一人しかおいでにならないので御座います。

私は唯、そのたつた一つの事を、あなた様にお尋ね致し度くてたまらぬ思ひに責められながら、さうした勇氣を出し得ませぬまゝに、今日まで生き永らへて居つたやうなもので御座います。

とは思ひながら、何から先に申し上げてよいやらわかりませぬ。この惱ましさをどう致しませう。あせつても／＼進みませぬ此筆のもどかしさをどう致しませう。

あゝ。私は、あなた様の、あの熱い涙のお言葉と、お口づけを一生の思ひ出として彼の世に旅立つてはわるいので御座いませうか。

私は此頃毎晩のやうに彼の押繪の夢ばかり見るので御座います。あの芳流閣の一番頂上の眞青な屋根瓦の上に跨つて、銀色の刀を振り上げて居ります犬塚信乃の凜々しい姿や、嚴めしい島山重忠の前で琴を弾いて居ります阿古屋の、色のさめたしをらしい姿を、繰返しく／＼夢に見るの御座います。それにつれて私のお父様の顔や、お母様の顔や、または生れてから十二年の間に住まつて居りました故郷の家の有様なぞが、幻燈のやうに美しく、千切れ／＼に見えて参ります。さうして眼が醒めますと、ちやうど其の頃の子供心に立ち歸りましたやうな、甘いやうな、なつかしいやうな涙が、いつまでも／＼流れまして致しやうが無いので御座います。それは熱の爲めばかりでは無いやうに存じます。おほかた私の生命が、もう残りすくなにな



つてゐるせゐで御座いませう……とさう思ひますと貴方様のお顔が一入おなつかしく、又は悲しく思ひ出されまして胸が一パイになるので御座います。

私の生家は福岡市の真中を流れて、博多灣に注いで居ります那珂川の口の三角洲の上に在りました。

その三角洲は東中洲と申しまして、博多織で名高い博多の町と、黒田様の御城下になつて居ります福岡の町との間に挟まれて居りますので、兩方の町から幾つもの橋が架かつて居りますが、その博多側の一番南の端にかゝつて居ります水車橋の袂の飢人地藏様といふ名高いお地藏様の横にありますが、私の生家で御座いました。その家は只今でも昔の形のまゝの杉の垣根に圍まれて、十七銀行のテニスコートの横に地藏様と並んで居りますから、どなたでもお出でになればすぐわかります。

尤も今から二十年ほど前に私たちが居りました頃の東中洲は、只今のやうに繁華な處でなく、ずつと西北の海岸際と、南の端の川が二つに別れてゐる近くに一並び宛しか家がありませんでしたので、私たちの家だけは、いつもその中間の博多側の川ぶちに、茶種の花や、カボチャの花や、青い麥などに取り圍まれた一軒家になつて居りましたことを、古いお方は御存じで御座いませう。

私の家は黒田藩のお馬廻り五百石の家柄で、お父様は御養子でしたが、昔氣質の頑固一徹とよく物の本やお話にあります、あの通りのお方で、近まはりの若い人たちに漢學を教へておいでになりました。それに生れつきお酒がお嫌ひで、大の甘黨でおいでになりましたので、私が十歳にもなりました時は、よほど胃のお都合がわるく、保養の爲めと云つてよく畑ぢりをしておいでになりましたが、そのせゐかお顔の色が大變黒くて、眉毛の太い、お眼の切れ目の深い、お口の大きい、武士らしい怖い顔のお方で御座いました。

それに引きかへて私のお母様は世にも美しい、さうして不思議なお方でした。

私のお母様は、只、生きる爲めにしか、お食事をなされぬやうに見えました。よくまああれでお身體が保つもの、子供心にも思はせられました位小食でした。又お母様は

「あの一軒家に居りながら、何時の間に見て御座るのか」

と知り合ひの人が感心して居りましたたくらる髪などもチャンと流行風に結つて、白いものなぞをチョツとかけて居られました、それが又、飾り氣がないまゝに譬へやうもなく美しく見えました。そのお母様を育てました乳母で、オセキといふ元氣な婆さんは、そのころ大きな段々重ねの桐の箱を背負うて、田舎まはりの小間物屋をして居りましたが、お母様はその婆さんから折々油や元結などをお買ひになるほかは何一つ贅澤なものを手にお取りになるでもなく、却つてそのオセキ婆さんの方が、お母様のお作りになつた絞りの横掛けや、金らゝのお守り袋々ぞを頂いて



田舎で賣つて儲けてみたとの事でした。夏などは御自分でお染めになつた紺絞りの單衣を着てをられるのが、ツキヌクほど白のお顔の色や、襟足や、お身體の色とうつり合つてホントにお上品に見えました。ある時私に、おまんぢうを焼いて上げようと仰言つて、手拭をチョット姉さん冠りにして火鉢の前にお坐りになつた、そのお姿のよかつたこと、今に眼について居ります。「あなたのお母様は繪のやうだと申し上げ度いが、繪よりもズットくお美しい」とある人は申しました。

「女でさへ惚れくする」

と云つて昆布賣りの女が見かへりく出て行つたこともあります。嘘か本當か存じませぬが、その頃の福岡の流行り歌に「みなさんく、福岡博多で、釣り合ひとれぬが何ぢやいな。トコトンヤレくナ。あれは井ノ口旦那と奥さん。中洲に（泣かずに）仲よく、暮すが不思議ぢや無いかいな。トコトンヤレくナア」

と云ふのがあつたと誰からか聞いておぼえて居りますが、教へた人は忘れてしまひました。けれどもお母様のホントの不思議と申しますのは、そんな事ではありませんでした。

「あなたのお母様は私と同じ指を持つてお出でになるのに、どうしてあのやうに不思議なお仕事がお出でになるのでせう」と云ふのは、うちに來られる人のみんなが皆言ふ事でした。私のお母様は、そんなにまで人

が不思議がる程、指先のお仕事がお上手なものでした。

私が八歳の冬まで生きておいでになりましたお祖母様や、オセキ婆さんや、人様のお話によりますと、お母様は井ノ口家のたつた一粒種で御座いましたが、七歳の時に御自分の初のお節句にお貰ひになつた押繪の人形をこはして見て、それを又作り直してひとり手に押繪の作り方をお覺えになつたのださうです。夫から後、お手習ひが済みますと、人形の顔形や花もやうなぞを鼻紙や草紙の端に描いて、いつまでもく遊んでお出でになりましたさうで、お友達なども先方から遊びに來られなければ、こちらからは進んでお出でになるやうなことはありませんでした。さうして十歳位になられた時に、遊び事に作られた押繪の人形が評判になつて賣れて行きましたので、私のお祖父様やお祖母様がビックリなすつたさうです。

お母様はそれから十一になられますと、博多の小山といふ所の母方の御親戚に當るお婆さんの處へ行つて、機織、裁ち縫ひなぞをお習ひになりましたが、そのお婆さんが名高い八釜し屋のお師匠さんでしたのに、お母様ばかりは何も云はれませんでさうで、十四歳の時には、もうお師匠様と變らぬ位にお出来になりました。刺繡なども其頃から遊びごとに作られたのが、大人のそれよりも綺麗でシツカリして居たといふ事で御座います。

私のお父様が月川家から御養子にお出でになりましたのは、お母様の十五の年で、お父様のお



年はたしか二十四歳でした。

それから、これはお母様の事ですが、お母様が御婚禮なすつたあくる年の十六のお正月に、お仕事のお師匠様の處へ御年始にお出でになりました節、御親戚の事とお師匠様はお雑煮を出すからと用意をされました。その時にある人が板のやうな厚い博多織の男帯を持つて來まして、これは今上方から博多に來てゐる力士の帯で、わざ／＼博多へ注文して織らせて上方で仕立てさせたものだけれど、何だか結び目が工合が悪くて氣に入らないから、又仕立て直さしたけれども矢張りいけない。博多織を扱ひつけて居られる此方のお師匠さんよりほかに仕立て直して頂く處が無くなりましたから持つて來ましたと申しました。するとお師匠さんのお婆さんが、それはよい處へ見えました。今ちやうど何でもお出來になる福岡一の美しい奥さんが見えてゐるから、と云つてお母様に押しつけて仕舞はれました。

お母様は怖い、意地の悪いお師匠様のお言葉を背きもならず、その上に私のお父様が何でも負ける事がお嫌ひなのを、よく御存じでしたので、もし、お断りしてお雑煮も頂かずに逃げて歸つたことが、あとでわかつては大變とお思ひになりました、泣く／＼お引き受けになりましたが、何度も仕立て直したもので、その縫ひにくい苦しさと切なさ。涙が出たとお話で御座いました。けれども、ともかくも、お雑煮が出来るまでに仕上げ、早速持たせてお送りになりました。ところが大變にそれが氣に入りましたらしく、すぐに澤山の仕立て代を持たせてよこしたのを

お母様はキツパリとお断りになりましたさうです。さうしたらその角力取りは、そのあくる日に澤山の縮緬とか緞子とかを臺に載せて、自分で抱へて人力車に乗つてお母様の處へお禮に來ましたので、そんな譯を御存じないお父様は大層お驚きになりました。さうして御自分で玄關へ出て來て、

「うちの家内はお前達のやうな者に近づきは持たぬ」

と仰言つたのを、あとから出てお出でになつたお母様がお引き止めになつたので、やつと品物をお受け取りになりましたが、角力取りはお玄關で追ひ返されてしまひました。

「あれはお前を見に來たのに違ひ無い。これから角力取のものなぞ縫ふことはならんぞ」と、お父様はあとで大層お母様をお叱りになつたさうです。

それから今一つ、お母様が十八の年の二月に博多一番と云はれて居ります大金持ちの柴忠（本當は柴田忠兵衛）さんと云ふ人が自身でお父様に會ひに來られまして、こんな事を云ひ出されま

した。「今日お伺ひ致しましたのは、私の家の娘の初の節句に是非ともこちら様の奥様の押繪を飾らして頂き度いと存じまして、其事をお願ひに參りましたので御座います。それにつきましては、もう四五日しますと東京の千兩役者で中村半太夫（あなた様のお父様で御座います。失禮な言葉づ



かひを何卒おゆるし下さいませ」といふのが博多に参りまして瓢箪座で十日間芝居を致します。そのお目見得芝居の藝題は阿古屋の琴責めで、半太夫が阿古屋をつとめる事になつて居りますから、其の舞臺を御覽になつて、その通りの場面を五人組みに作つて頂けますまいか。其の爲めには正面の一番よい棧敷を初日から千秋樂まで買ひ切つて置きますが、どうぞ充分に御覽下さいませ。下地の錦繪は此處に持つて参りました。此の三枚續きですが芝居を御覽になりました上でどんなにお作りかへになりましたも構ひませぬ。又衣裳が御覽になり度ければ樂屋へお出でになつて手に取つて御覽になつても構ひませぬ。私が御案内を致します。まことに不躰では御座います。すが費用も手数も一切いとひませぬから、どうぞ奥様の一世一代のお積りで後の世に傳へるものを頂戴致しまして、私の娘にあやからせて頂き度う御座いますが、如何で御座いませうか」と、まごころ籠めてのお頼みでした。

しかし、嚴格なお父様はなかくお許しになりませんでしたさうです。阿古屋の琴責めといふ芝居は、どんな筋のものかとお尋ねになつたり、樂屋は男でも這入つて行けるものか、なぞといろいろお尋ねになりましたので、柴忠さんが説明をされまして、芝居といふものは辻學問と云つて仁義道德の教を籠めたものとか、役者は河原者と云ふけれど東京の俳優はさうばかりではなく、よい役者になると禮儀の正しい立派な人間ばかりで、角力取りや何かとは格式の違ふものとか、いろ／＼に言葉を盡しましたので、やつと

「それでは見に行かう」と仰言つたさうです。

それからお芝居が始まりますと、小間物賣りのオセキ婆さんと呼んで留守番をさせて、お祖母様とお父様とお母様と三人お揃ひで三日の間瓢箪座お出でになりましたが、その最初の日は中村半太夫といふ方が羽織袴を召して、お父様たちの御見物の席に見えて御挨拶をされました。さうして

「私の舞臺姿が福岡で名高い奥様のお手にかゝるとは一生の譽れで御座います。何とぞよろしく……」

と仰言つて、お祖母様にはお茶器を、お父様にはお煙草盆を、又、お母様には紙入れを、それぞれお土産に下さつたさうですが、それにはいづれも私の家の定紋の輪ちがひの模様か金と銀とで入つて居りましたので、お父様はビックリなすつたさうです。さうして半太夫といふ方の御人品に大さう感心をされまして「武士ならば千石取りぢや」と人にお話しになりましたさうです。

けれども、それから四五日目になりますとお父様は「俺はもう頭が痛くなりさうぢや。お母様も最早お倦ぎになつたさうぢやから、俺はお母様と二人で留守番をする。許すからお前はオセキ婆と二人で見に来て。柴忠の折角の頼みぢやから」と仰言つたさうで、それでもお母様は御遠慮をなすつたのを、お迎へに来た柴忠さんから無理



にすゝめられて、あと三日ほど御覽になつたさうです。さうして五日目を御覽になつた時にザツと下繪を描いて、六日目に今一度芝居を見て細かい處をお直しになつてから、お仕事にかゝられました。それが、それから一週間にはもう阿古屋の琴責めの五人組の人形が立派に出来上りましたさうです。その押繪人形は、阿古屋の髪の毛を一本々々に黒縞子をほごして植ゑてあるばかりでなく、眼の球にはお母様の工夫で膠を塗つて光るやうにし、緋縮緬の着物に、白と絞りの牡丹を少しばかり浮かし、其上に飛ぶ金銀の蝶々を花簪に使ふ針金で浮かしてヒラ／＼と動くやうにして、帯の唐草模様を繪劔り込みにした、錦繪とも舞臺面ともまるで違つた眼も眩しい美しさの中に、阿古屋の似顔が、さながら生き／＼とさしうつゐてゐるのでした。それを、瓢樂座で日延べの二の替りを打つてお出でになりました貴方のお父様が御覽になりました時

「これは驚いた。自分が一番苦心をしてゐる昔の遊女の身體のこなしを、どうしてこんなに細かく見て取られたものであらう。この遊女の姿態ばかりは現在居る一番の錦繪描きでも描けないので、私の家の藝の中でも一番むづかしい祕密の傳授になつてゐるものを……あの奥さんは不識な人だ」

と云つて舌を捲かれたといふ事が、今でも博多の人の噂に残つてゐるさうで御座います。

その阿古屋の琴責めの五人組の人形が、柴忠さんの家の小さな本檜舞臺に飾られました時の見物と云つたら、それはそれは大變だつたさうで御座います。申すまでもなく其時はお父様も、お母様も柴忠さんの處へおよばれになつて、大層な御馳走が出ましたさうですが、その押繪を見る爲めに態々遠方から見えた御親戚や、お知り合ひのお節句客の應對だけでも柴忠さんは眼がまはるほど、お忙がしかつたさうで御座います。さうしてそんなお客が、お節句を過ぎてまでも、なか／＼絶えさうに見ませんでしたので、しまひには柴忠さんも笑ひながら、こんな事を云ひ出されたさうです。

「これはたまらぬ、いくら娘の祝ひだと云ふても、こんなに京大阪の旅人まで聞き傳へて見に来るやうでは、今に身代限りになりさうだ。こんな高價く付いた押繪があるものぢや無い。何にしてもこれは井ノ口の奥さんが一世一代の精魂を打ち込まれた物だから、いつその事、娘の名前で氏神様に上げてしまつた方がよからう」

といふ事になりました。それで其の押繪を立派なビイドロ張りの額縁に納めて、その上から今一つ金網で包んだ丈夫なものにして、櫛田神社の繪馬堂に上げられました。その額ぶちの中には、やはり本檜の指物細工で舞臺が浮き出させてありまして、建具までも本物の通り手数をかけた雛形が使つてありましたので、その重たかつたこと、四人とか五人とかで小半日かかつて、やつと釣り上げる事が出来たさうで御座います。

そのやうなことで、お母様の評判が前にも倍して高くなりましたして、それにつれて頼んで来るお仕事が又、前の倍ももつと上も来るやうになりました事も申すまでもありません。けれども、お



母様はそれから間もなく、その年の暮近くに私をお生みになる事がおわかりになりました爲めに、八月から後に來た注文はピタ／＼と斷つておしまひになつたさうです。

私が使われます前後のお祖母様や御両親たちのお騒ぎになりやうといふものは、はたから見ても、とても可笑しくてたまらぬ位だつたさうで御座います。

「美人は子を生まず」とか「氣嵩の女には子種がすくない」とかよく云ふやうで御座いますが、私のお母様は兩方を兼ねてお出でになりましたので、お祖母様も此事ばかりを御心配なすつてよくそんな愚痴を仰言つたさうです。もつともお父様はそんな事に就いては黙つてお出でになりましたが、「三年子なければ去る」と云ひ慣はしが福岡にもありましたのに、かんじんのお母様がお家付きで、お父様の方が御養子でお出でになるので、お祖母様は、どうなさる事も出來なかつたのでせう。

それでもお祖母様は、どんなにか初孫の顔を御覽になり度くてお出でになつたでせう。

お祖母様は、ですから時々御自分から進んでお母様をお連れになつては、お地藏様だの、觀音様だの、御神木などを拜みにお出でになつたり、御符や御神水などを取り寄せて、お母様にお戴かせになつたり、色々と御苦心をなすつたさうです。「お前、けふは觀音様の日だよ」とか「明日はお地藏様の何々だよ」とか仰言つては、月に二三度づつお母様をお出しになつたさうですが、

その時はお母様も、どんなにお仕事がお忙がしくとも「ハイ」と云つてお出かけになりましたさうです。お父様も朝晩神様や佛様に手をお合はせになるほかに、お祖母様がおすゝめになる御符や神水なども、すなほにおいたゞきになりましたさうで、決して迷信なぞとは仰言らなかつたさうです。

そんなにして家中が子供を欲しがつてお出でになりましたところへ、私といふものが出來ましたので、そのお喜びはどんなだつたでせう。

今まで黙つてお出でになりましたお父様は、いよ／＼その年の八月に六月目の岩田帯をお母様がなさるやうになりますと、胎教といふのをお初めになりましたさうです。それについては、どこのやうな故事がありましたものか、よく存じませぬけれども、やはり漢學の方で支那から傳はつた事で御座います。今までお父様とお座敷にお寝みになつたお母様を、お臺所の廣い板の間の横に在るお茶の間に、たつた一人でお休ませになつて、お父様だけがお座敷にお残りになり、又、お祖母様はお支關の横の御自分の室に、今までの通りにお寝みになるのです。さうして、そのお母様がお寝みになるお茶の間の四方には、歴史で名高い人や、勇ましい出來事の繪などを一ぱいに貼りつけたり、額にして架けたりしてありますので、そんな繪や字などを、お母様が朝晩に見ておいでになりますと、お腹に居る子供が、さうしたお母様の氣持ちから感化を受けまして立派な子供になりますのださうで、それが胎教といふのださうで御座います。そんな繪や字



は、私が大きくなりましたして後も、煤けたまゝお茶の間の四方に並んで居りましたので、楠正成の討死とか、白虎隊の少年の切腹とか、上野の彰義隊の戦争とか、日本武尊が熊襲を退治して居られる處とか云ふやうな、勇ましい中にも、むごたらしい様な石版繪が、西郷様の肖像とか、高山彦九郎の書いた忠の字とか云ふものと一緒に並んでゐるのでしたが、そんな繪や字を見まはして居りますと、お父様は私を、まだ生れないうちから男の兒ときめておいでになつたらしいことが、よくわかるので御座いました。

それから、いよく私が生れる時が近づきますと、前に申しましたオセキ婆さんが泊り込みでお臺所の板の間に床を取つて寝ました。この婆さんは、私が五つか六つの頃まで生きて居りましたが、大變に元氣者の慾張り婆さんで、お父様はあまりお好きにならなかつたさうですが、十人近くも子供を生んだ經驗がありましたので、此時ばかりはお父様は何も仰有らずにお母様の介抱をお許しになつたさうです。今でもよくおぼえて居ります、眼の玉のギョロ／＼する、肥つた色の黒い女で、お母様のお話が出るたんびに

「私が育てたんぢやもの……ナア御隠居さん」

と云つては大きな口を開いて男のやうに笑ふのでしたが、其頃の婆さんには珍らしくオハゲロをつけてゐなかつた事をよくおぼえてゐます。人の噂によりますと柳町（遊廓）に奉公をしてゐたこともあるさうですが、其婆さんがやつて來まして、お母様のお腹を一ト目見ますと、

「これは大きい。よつほど大きな男のお子さんに違ひ無い。日數もいくらか延びてお生れになるでせう」

と申しましたので、お父様は大變にお喜びになつたさうです。けれども此婆さんの豫言は當りませんで、生れた私は普通の大きさの女の子でした。只日數が一週間ばかり延びただけでしたさうですが、それでもお祖母様や、お父様は不平にお思ひになるどころか、オセキ婆さんに手を合はせて

「あゝ。お蔭で安堵した」

と仰有つて涙をお流しになつた位ださうです。

私が生れましたのは明治十三年の十二月二十九日、大變に雪の降る朝だつたさうですが、ちやうどお祖母様もお父様も、もう生れるか／＼といふやうな御心配のために疲れ切つておいでになりましたので「いよく生れる時まで待つておいでなさい」とオセキ婆さんが申しますまゝに、お座敷のお炬燵に當りながらウト／＼しておいでになる間に生れたのださうで、夜が明けてから子供の泣き聲をお聞になるとお二人ともビックリなすつたさうです。けれどもオセキ婆さんは氣の強い女で、急いで私を見にお出でになつたお父様を

「アツチへお出でなさい。今抱かして上げます。殿方は産所へお這入りになるものではありません」



と叱りつけましたので、お父様は又慌て、お炬燵へお這入りになつて、頭から蒲團をお冠りに  
なりました。その爲めに炬燵の櫓が半分丸出しになつて、その左右に、お父様の黒いおみ足がニ  
ユツと二本つき出て居りましたさうで

「その御やうすの可笑しかつたこと……」

とオセキ婆さんがよく人に話しては笑つたといふ事を、ずつと後になつて聞きました。

私が生れましたあと先の事で、後になつて聞きましたことはまだいろいろあります。  
その中でも何より先に申上げなければなりません、私が生まれてから間もなく流行り出  
しました手鞠歌で、今でも福岡の子守女は唄つてゐるさうで御座います。

「イツチヨはじまり一キリカンジヨ……」

一本棒で暮すは大塚どんよ。(杖術の先生のこと)

二ヨ一ボで暮すは井ノ口どんよ。

三寶で暮すが長澤どんよ。(櫛田神社の神主様のこと)

四わんぼうで暮すが寺倉(金貸)どんよ。

五めんなされよアラ六つかしや。

七ッなんでも焼きもち焼いて。

丸めん十めんなさらばなされ。

眼ひき袖引きや妾のまゝよ。

孩兒が出来ても妾の腹よ。

あなたのお腹は借りまいものよ。

主は誰ともおしやらばおしやれ。

生んだその子にシルシは無いが。

思つたお方にチヨト生きうつし。

あらイツコく上がつた」

と申しますのですが、私が、このやうなことを申しますのは如何かと存じますけれども、こ  
れはやはりお父様とお母様と、それから私のことを目當てにして當てこすつたもので、お母様  
が帯を縫つてお遣りになつた力士の名前や、押繪にお作りになつた、あなたのお父様の事などを  
輪に輪をかけて噂したものでせう。私のお父様は前にも申しますやうに色の黒い逞ましいお方  
で、どちらかと申せば醜男でお出でになつたのに、お母様の方はまるでウラハラで、世にも珍ら  
しく美しい方でしたので、いろくな事を人が申しましたのも無理は無いと思はれます。

お父様は、そんな歌が流行り出してからと云ふもの、毎日のお墓参りや、方々の神様や佛様へ



の安産の御願ほどこきや、お禮参りのほかは、お母様を一步も外へお出しにならなかつたさうです。もつとも、お父様は平生から冗談口一つ仰言らぬ眞面目なお方でしたから、こゝやうな歌のウラに隠してある本當の意味はおわかりにならなかつたでせう。只、御自分の事が云つてあるので、お氣に障つたものらしく、そんな歌を意地悪く家の表に来て歌ふ子守女たちを、お父様がキチガヒのやうになつて、お叱りになる聲が川向うのお琴のお師匠さんの處までよく聞えたさうです。

又、その頃の私の家の暮し向きは、僅かばかり来る作米と漢學のお禮のほかは、お母様の押し繪や針仕事で立てゝ居られましたので、私が生れますと先は御両親とも随分お辛い事が多かつたらうと思ひますが、そんな意味の事も、この手鞠歌に唄ひ込んでありますやうで、誰が作つたものか存じませぬが、ほんとに憎らしくて／＼思ひ出す度に胸が一パイになります。けれどもそのせめかして、お母様は鳥目になると云つておセキ婆さんが止めるのも聞かずに、普通の人よりも早く髪を洗つたり、針仕事を始めたりなすつたさうです。お父様も亦それから後といふものは人が笑ふのも構はずに、朝夕のお買物までも御自分でお出ましになりましたさうで、お母様は家にデツとしてお仕事をしておいでになりさへすれば、お父様の御機嫌がよいので、お祖母様は大層お困りになつたさうで、

しかし、今になつてよく考へてみますと、さうしたお父様のお心持が私にはよくわかるやうに思ひます。

親の事をとやかく申しますのは心苦しい事で御座いますけれども、此事はハッキリと申上げて置きませぬと、これから先のお話が、おわかりにならぬと思ひますから、包まずに認めますが、私のお父様は、さうした美しいお母様を一生懸命に働かせて、お金をお貯めになる樂しみと、お母様を可愛がつて、大切になさるお心持ちとを穿きちがへた様なお心持ちから、そんな風にしてお出でになることが、物心ついてから後の私の眼にも、よくわかつてゐたやうに思ひます。ですからお父様は、お母様が家に居て、夜の眼も寝ずにお働らきになる姿を御覽になるのが何よりも樂しく、嬉しくておいでになるので、その爲めに御機嫌もよかつたものと思ひます。

とは申せ、又一方から考へますと私のお母様のお仕事好きが、其頃はもう普通の意味のお仕事好きを通り越してゐたことも否まれなと思ひます。たとひお父様の無慈悲な嫉妬深いお心が、お母様をどんなにか無理に押へつけて働かせて居りましたにしても、又お母様が、どのやうにお仕事好きでお出でになつたにしまして、私が生れた後のお母様のお仕事ぶりは、とても人間業では無いと人々が申して居りましたさうです。

此事は只今の私から考へてみますと、さうしたお母様のお心持ちがよくわかるやうに思ひますので、つまりを申しますとお母様のお心は、私をお生みになりましたからといふもの人間世界を



お離れになつて、唯、お仕事の一つに注ぎ込んで、ほかの事（それが何でありましたかと云ふ事は誰にもわからなかつたらうと思ひますが）を忘れよう／＼としてお出でになつたのでは無いかと思はれるので御座います。

何を申しましたも私が生れましたのが阿古屋の琴責めの人形が出来ました年の新の師走も押し詰まつた日で御座いましたのに、それから一箇月半ほど経つた新の二月の中旬を過ぎますと、もう家の事はもとより、舊正月の仕事として外から頼んで来る裁縫や袱紗の刺繡、縫紋、こま／＼した押繪の人形など、どんなにお忙がしくともお断りにならなかつたさうです。これは私が物心ついてから後も同じ事で、羽織、袴、婚禮の晴着と急ぎの頼みを、夜の眼も寝ずにお作りになるほかに、お父様の漢學のお稽古のあとで、近いあたりの娘さんが十人ばかりもお稽古に來られます。それを教へながらお母様は家内四人（お祖母様のも）の着物まで縫はれますので、そのまめなことゝ熱心なことは、子供心にも感心する位で御座いました。夏の暑い夜、蚊に責められてもお構ひにならず、冬の寒い日に手足をお温めになる暇も無い位セツセとお仕事を勵まれました。その頃町つゞきの博多福岡では大變に押繪が流行致しましたので、町の大家などは、女の兒が生れますと初のお節句にはみんな柴忠さんのやうに、お芝居の小さな舞臺を作りまして、その中に押繪の人形を立てますので、三人組なれば三圓、五人組なれば五圓と、向うから高價い値段をきめて頼みに來ました。お母様は、そんなにお金をかけては出來がわるいと云はれましても、先

方で聞き入れません。それにお父様が「出来る丈けの加勢は俺がして遣る」なぞと仰言つて、斷るのをお好きになりませんでしたので、お母様は泣く／＼引き受けて居られました。その頃はお米が一升十錢より下で御座いましたらうか。

「米が十錢すれあサツコラサノサ」といふ歌が流行つて居りました位で御座いますが、そんなお金の事などは一切お父様がなすつて、けふはいくら、明日はいくらと驛遞局（その頃はもう郵便局と云つて居りましたが、お父様は矢張りこんな風に昔の名前を云つて居られました）にお預けになるので、お母様はほんとうにお仕事の地獄に落ちてお出でになるやうで御座いました。

けれども、それではお母様のお仕事は、ほかの處のより念が入つて居りました。

頭の毛は極く安いもので無いかぎり黒繻子の糸をほごして一本一本に植ゑて、小さな指先まで綿をく／＼めて爪を植ゑて、着物もそれ／＼の恰好にふくら味を持たせた上に、色々の模様を切りつけたものですが、その模様も一つ／＼織り目が合はせてあります爲めに織り出したもの／＼やうに手際よく見えるのでした。お正月の羽子板も大きなのになりますと板ばかりでなく、張り抜きにした上の方を割り抜いて、戸障子や手水鉢、石燈籠、植ゑ込みなぞいふ舞臺の仕掛けものや、書き割りなどの模様を提灯の繪描きに頼むのですが、お母様はそれを御自分の押繪に合ふやう



に、お椽側に持ち出して、いろ／＼な胡粉で塗つたり乾かしたりしてお描きになりました。それから押繪の下繪は、お母様が錦繪を二十枚ばかり持つてお出でになるのと、お弟子から借りてお寫しになつた澤山の下書きの中から生れて來るのでしたが、優しいのや嚴めしいのが見てゐるうちに出來てくる其の面白さ……。又は大きな／＼袱紗に、金や銀や五色の絲で縫ひ込まれた奇妙な形の花や蝶々が、だんだんと一つにつながり合つた模様になつて行くその美しくさ……。お父様は、そのやうなお母様のお仕事を、丸い桐洞の火鉢の向うから私と一緒に御覽になるのが何よりのお楽しみなのやうに見えました。時々押繪の足につける竹などを削つて御加勢なされるそのお優しさ。

私はまたおとなしい方で御座いましたのか、あまり泣いたりなぞしたおほえはありませんねやうで、六つか七つにもなりますと、お母様から小切を頂いて頭の丸いお人形を作つたり、お母様が美濃紙にお寫しになつた下繪をくり返し／＼見たりして餘念もなく遊ぶのでした。その中でも、お母様の押繪のお仕事を見るのが何よりの楽しみで、お父様が畑のお仕事をなされながら、お母様をお呼びになるのが恨めしい位に思はれました。

ことに又、その中にも、お母様が押繪のお人形の眼鼻口をお描きになる時にはきつと私を呼んで御自分の前に坐らせて「右を向いて御覽」とか「左を向いて御覽」とか仰言つて私の眼や、鼻や、口もとをシゲ／＼と御覽になつては細長い筆の穂先を嘗めて、火鉢のふちに幾つも並べてあ

る人形の顔に書き入れてお出でになるのでした。その顔はいろ／＼で、私に似てゐるのは一つもある筈は御座いませんでしたが、それでも毎日々々見て居りますうちに、私は子供心にその中から自分に似た眼や鼻や口をやす／＼と選りだすことが出来るやうになりました。それである時、お父様が畠へお出でになつたあとで。

「これはあたしの眼よ。この口も……。この鼻も、眉毛も……」  
と申しますとお母様は、

「よくわかるね。お前の顔は役者のやうに綺麗だから、お手本にしてゐるのだよ」とおつしやつて、お笑ひになりましたが、そのあとでお母様は急にうつむいて悲しさうな顔になられますと、涙をポトポトと火鉢の灰の中へお落しになりましたので、私も何だか悲しくなりまして、その後は一度もそんな事を申しませんでした。ハッキリとは、おほえませぬが、お母様の鏡臺を御自分の前にお据ゑになつて、御自分の顔を御覽になつたり、私の顔をお覗きになつたりして、私の眼鼻立ちと御自分のとを一緒にして押し繪のメンモクになすつたのは、それから後の事だつたやうに思ひます。

かうしてお母様はお正月のお人形をお済ましになりますと、もうそろ／＼三月三日のお節句のお人形にお取りかゝりになるのでした。



博多の店に二三軒中等物の約束があり、又田舎からも極安ものを二百でも三百でも出来るだけドツサリ頼んで参ります。又二月になりますと、上物を好みく／＼にわけて店から頼んで参りますので、二月も末になりますと、お母様のお忙がしさは眼に餘るやうで、徹夜もなさる事も珍らしくありませんでしたので、私はいつの間にかお父様のふところに抱かれて寝てゐる事が多いのでした。

三月になつて、やつと安心してお母様に抱かれることが出来ると思ひます間もなく、梅雨の間に機織り、夜具の洗濯、一年中の晴れ着の始末をなさるのですが、其の間にも裁縫や刺繍を頼んで参りました。さうして六月に入るとポツ／＼八月のお節句の人形に取りかゝられます。福岡の習慣として三月過ぎに生まれた女の子は八月に祝ふのですけれど、何となくハズミがつきませぬので、お母様はさほどお忙がしくなかつたやうです。

八月になりますと、もうお正月の押繪の用意ですが、其頃は今のやうにボール紙がありませんので、お母様は屑屋に頼んで反古紙を澤山に買つて合はせ紙といふのをお作りになるのです。が、それが又大變で、秋日のさすお庭から畠から、お椽側まで一パイに干してあることがよくありました。そんな時にお父様は、その頃まであつた緞につないだお金をお座敷に並べたり、又緞につなぎ直したりなさりながら、「せめて其加勢でも俺に出来るとなア」

とよく云はれました。お父様の手は畠仕事で荒れて居りますので、糊の付いた紙をお扱ひになるとおきに引つかゝつたり、まつわり付いたりして、お母様がお一人でなさるよりも却つて手間取るのでした。

私もお母様のお忙がしさをを見るにつけて、お手傳ひをして差し上げたいのは山々でしたが、どうしたわけか同じ指を持ちながら、お母様のやうな縫ひ針やお洗濯が一つも出来ず、たゞ、字を書くと、お琴を弾くことが人並外れて好きだけでした。さうして毎日川向うの賑やかな川端筋にあるお琴の先生の處へ學校の歸りにお稽古に寄るのでしたが、そのお温習をうちへ歸つて、お父様とお母様の前でするのが又、何よりも楽しみで御座いました。お二人とも私を喰べてしまひ度いほど可愛がつておいでになりましたので、私が弾くたんびにお賞めになつては、いろ／＼なお菓子をお褒美に下さるのでした。

「コヤツ（福岡の人は吾が兒のことをよくこんなに申します）は俺のお祖母様の血すぢを引いとるらしい。今にあの阿古屋のやうに琴の上手になるぢやらう。弾く手つきまでがああ押繪の通りぢや」

とお父様がよく仰言ひました。

けれども不思議なことに、お父様の其様な事を仰言るたんびに、お母様は、はかばかしく御返事をなさいませんでした。只「エム」とか「ハア」とか弱々しい返事をなすつて、あの淋しいや



うな悲しいやうな微笑をなされながら、針や繪筆を動かしてお出でになるのです。時々眼の中に涙を溜めておいでになる事さへありました。

けれどもお父様はそんな事を一度もお氣付きになりませんでしたやうです。たゞ私だけがとつくに氣が付いて居りまして、子供心にいつかはお母様にお尋ねしてみよう／＼と思ひながらツイそのまゝになつてしまひました。

そのうちに私は十二歳の春を迎へました。お父様が三十八で、お母様が二十九におなりになりましたが、このころはもう餘程うちの都合がよくなつて居りましたらしく、お父様は家の處々を修繕なすつたり、犬や猫が畠を荒らさぬやうに家のまはりの生垣を取拂つて、其頃流行り初めました赤い煉瓦の塀にしたりなすつたので、何もかも見ちがへるやうに立派になりました。その中を親子三人で見まはりながらお父様は、

「なぜコヤツの下（私の妹か弟の事）が生れぬのぢやろか。今一人か二人か居らんと家が廣過ぎるかなあ」

と云はれた事がありました。其時もお母様は何とも云へない暗いやうな冷たいやうな顔をなすつた事を、おぼえて居ります。

うちが此様に立派になりましたにつれて、お母様も前のやうに安いお仕事ばかりをお引き受け

にならぬやうになりました。お稽古に来る近所のお弟子にお教へになる外は、極く上等の押繪や刺繡のやうなものばかりを作つてお出でになりましたが、それでも中々澤山ある上に、手間の安い仕事の五倍も十倍もかゝる様な物ばかりなので、お忙がしくない様に見えて、なか／＼お骨が折れるのでした。その押繪のメンモクはやはり皆、私とお母様の眼鼻が入れ交つて居りますので、上等のものであればある程、お母様は私の眼鼻をよけいにお使ひになるので子供心にも不思議に思ひ思ひして居りました。

けれどもその中に、タツタ二度ほど、お父様のお顔をお使ひになつたことがあります。

それはどちらも私が十二歳になりました春の事で――初めの時は、大阪の或る店から外國の金持ちに賣るのだと申しまして、金の額ぶち入りの押繪を頼んで來たのでした。その時にお母様はいろ／＼工夫をなされまして、外國の事だから、日本の人物よりはと言ふので支那三國誌の關羽、張飛、玄徳の三人を極く念入りにお造りになりました。それについて其顔のお手本は錦繪の通りにしますと關羽が團十郎、張飛が左團次、玄徳が團藏（でしたと思ひます。違つてゐるかも知れませぬ）といふことになつて居りましたが、その錦繪はもうスツカリ鼠色にボヤケてしまつた昔の版でありました爲めに、お母様のお氣に入らなかつたのでせう。お父様に頼んで、火鉢の前に坐つて頂いて幾つ／＼顔を書きかへてお出でになりました。その時に、

「俺は貴様の押繪になつて外國へ行つて異人どもを睨み殺して呉れるのぢや。……かう云ふ風に



……」  
と云ひながらお父様が不意に立て膝をなすつて、ヒンガラ眼をしてお母様をお白眼みになりましたが、そのお顔の怖ろしかった事……私もお母様もハツとして飛びのいたほどで御座いました。さうして、そのあとで三人が笑ひこけました時の可笑しかったこと、私は死ぬかと思ひました。

「まあ、御覽なさい。筆が火鉢に落ちました」

と云ひながら、お母様が灰だらけの毛書き筆を火箸でお拾ひになりましたので、三人は又涙の出る程笑ひこけましたが、お母様がこんな心からお笑ひになるのを見ましたのは、後にも先にも此の時だけであつた様に思ひます。

かうして顔が出来上りますと、それに鬚や髪の毛を植ゑて、關羽と張飛は眉まで植ゑまして、お母様のお得意の浮き出し人形が出来上りますと其の嚴めしさと立派さは眼もさめる様で、ことに其の中でも張飛の眼は、お父様に生き寫しのやうに思はれました。それを聞き傳へ云ひ傳へしに見に来る人が又澤山にありましたが、その中にはあのお金持ちの柴忠さんも見えまして一生懸命に力むで感心をしながら、こんな事を云はれました。

「どうも奥さんのお手並には今更ながら感心しました。失禮ですが此前の阿古屋の琴責めの時よりもズント名人におなりになつたやうです。つきましては、お忙がしうも御座いますから今一つ

此通りのを作つて頂いて博多ツ子の氏神の櫛田神社にあの阿古屋の琴責めと並べて奉納致し度いと思ひますが如何でせうか。實を申しますと此前の阿古屋のお人形を家に置いておきますと、その爲めのお客がうるさくてたまりませんので、娘の名前で櫛田神社に奉納したのですが、其當時はあれを見に来る人の爲めに、お宮の賽銭が違つたと申す位で……イヤ、決してお世辭を云ふのでは御座いませぬ。流石に博多は諸藝の都だけあると皆、感心をして居りましたので……そこへちやうど私が櫛田様へ御願を立て、運動に取りかゝりました株式の取引所が、このごろ鰯町の私の地所に来る事になりましたので、その御願ほどの爲に奥様の押繪を上げましたならば神様もきつとお喜びになる事と思つて伺ひました次第です。よい錦繪が御入用なら何程でも取り寄せて差上げます。此頃は汽車といふものがありますから、東京へ電報を打てば十日足らずで着きますから」

といふやうなお話でした。

その時のお母様のお喜びになつた御様子は今でも眼に残つて居ります。手を揉み合せて顔を眞赤にして、さも心配に眼を潤ませて、お父様の御返事を待つてお出でになる物ごしが、まるで赤ん坊のやうにイヂラシク見えました。

お父様は直ぐにお許しになりました。しかも大乗氣の御様子で

「奥（お母様のこと）はわしの顔を手本にして此の三國誌の人形を作つたのでナ」



と其の時の模様を大自慢でお話しになりましたので、お母様は恥かしかつて眞赤になつたまま、お臺所の方へ逃げてお出でになりました。私もすぐにあとから追つかけて参りましたが不思議なことにお母様は、いつの間にか青い顔におなりになつて、臺所の上り口に腰をかけてシクシク泣いてお出でになりましたので私もビックリしました。さうしてどうなすつたのかと思つてお傍へ行つてお顔を覗き込みますと、お母様はもう大きくなつてゐる私の身體を赤ん坊のやうに抱き寄せて、私の鼻のお化粧を鼻紙でお直しになりながら、

「私は錦繪さへいたゞけばお金なんか要らんのに、お父様はいつまでも慾の深いことばかり仰言つて……」

と、さも口惜しさうに唇を噛んでホロ／＼と涙をお流しになりました。その時にお座敷の方から、お父様と柴忠さんの大きな笑ひ聲が聞こえて來ましたので、私も急に悲しくなりましてお母様と抱き合つて泣いたことを記憶えて居ります。

それから何日か経ちますと東京から大きなお菓子箱の箱みたやうなものが、お母様のお名前で送つて來ましたから、お父様が釘抜きと金槌で開いて御覽になるとどうでせう。その中には錦繪が一パイに詰まつてゐるのでは御座いませんか。

「まあ……これ……みんな繪ばかり……」

と仰言つて眞青になつたまま、口紅の處を押へてお出でになるお母様の小指がワナ／＼とふるへ

てゐたのを私はハッキリとおぼえて居ります。

その錦繪の美しかつたこと……さうして其の紙と繪の具の匂ひの何とも云へずなつかしう御座いましたこと……ちやうど夏になり口で十疊のお座敷のお縁が一パイに明け放してありましたが散り擴がつた錦繪の色と香ひで、そこいら中が明るくなつたやうに思ひました。まづお父様が御覽になつた繪を私が見てお母様にお渡しするのでした。三人共申し合はせた様に溜め息をしては賞め、ほめては溜め息をして居りますうちに、つひお晝の御飯をいたゞくのを忘れてしまつた位でした。

その中には關羽、張飛、玄徳の三枚續きの繪が二三通りありましたが、みんなお母様のお持ちのと違つて繪の具が眼の醒めるやうに美しく、金や銀の色がピカ／＼光つて居りました。これをお母様がお作りになつたらどんなにか綺麗だらうと思つて居りましたが、お母様は案外にも、そんな繪の中から八犬傳の中で犬塚信乃と犬飼現八と捕方三人を描いた五枚續きのお選り出しになりました。

「私はこれを作つて見度う御座います。さうして此屋根の瓦と、現八の前垂れを本物のやうにして見度う御座います」

とお父様に御相談をなさいました。

お父様もその時に一寸案外といふ顔をなすつたやうですが、



「ウン。それもよからう。どれ見せろ」  
 と仰言つて信乃と現八の顔をウツトリと見てお出でになりました。  
 けれどもその信乃の顔を横からのぞき込みました時の私の驚きはどんなで御座いましたらう。  
 その顔のすぐ横にある赤い小さな短冊の中には中村珊玉といふ四文字が書いてありましたの  
 で、あなたのお父様が御改名をなすつたことを存じませぬ私は、別の人かしらんとチョット思つ  
 たので御座いました。けれども、それでも彼の阿古屋の顔を左向きにして、男らしい長い眉をつ  
 けた丈で、ソツクリそのまゝ信乃の顔になることが子供心にすぐとわかりました。それと一緒に  
 に、お母様がその錦繪をお選みになつたホントのお心持が初めてわかつたやうな……けれどもま  
 だ、あからさまにはわからぬやうな……不思議なやうな恐ろしいやうな……さうして其のわけを  
 打ち明けて、お母様にお尋ねする事も出来ないやうな息苦しい氣もちに打たれて、私の小さな胸  
 がどんなにワク／＼と致しましたことせう。けれどもその時の私には、そんなにまで深く自分  
 の氣もちを考へてみるやうな力はありませんでした。たゞ何かしら悪い事をしたのを隠してゐる  
 やうな怖い／＼氣持ちになつて、お父様とお母様の顔を見上げる事も出来ないまゝに、お煙草盆の  
 頭を傾けながら一心に、信乃と現八の顔を見比べてゐたやうに思ひます。  
 もつとも其の時にもお父様は、何もお氣付きにならなかつたやうでしたが、おほかたそれは、  
 あなたのお父様のお名前がかはつてゐたせいで御座いましたらう。

「この瓦をどうして本物の通りにするか」  
 などとニコ／＼して、お母様に尋ねておいでになつたやうに思ひます。  
 お母様はその日から其の五枚續きの繪を雁皮紙に寫し取つて、合はせ紙に貼り付けたり切り抜  
 いたりして、お仕事にかかられまして五日目には立派に仕上つたのを楠の一枚板に貼り付けて  
 おしまひになりました。  
 その楠の板は木目が雲のやうになつて居りまして、その上に芳流閣の金の鯉鉾と青い瓦とが  
 本物のやうに切りつけられて居りました。その金の鯉の前に片膝をついて刀を振り上げてゐる信  
 乃の顔は、お母様が私の眼や鼻とソツクリ男のやうにお描きになりましたもので、それに向ひ合  
 つて身構へてゐる現八の顔にはお父様の眼と鼻が生き／＼と睨みかへつて居りました。わけても  
 その現八の前垂れの美しかつたこと……それはスツカリ本物の通りの刺繡をお入れになつたので  
 ……こればかりで一才四方いくらの値打ちがある。櫛田神社の繪馬堂に上げて盗まれぬやうに工  
 夫せねば……と見に来た柴忠さんが云つて居られたさうです。  
 その押繪は、その春の末、博多で名高い山笠のお祭りのある前に櫛田神社の繪馬堂にさがりま  
 した。その額はやはり柴忠さんの工夫で厚い硝子張りの箱に封じた上から唐金の網に入れて、繪  
 馬堂の東の正面に、阿古屋の琴責めの人形と並んで上がったのですが、檜の香氣の爲めに、何も  
 かも眞白になる程色が落ちてゐる阿古屋の人形と見比べますと、ホントに眼が醒めるやうで、一



時は繪馬堂が人で一パイになるくらの評判が立つたさう御座います。

すると其の評判をお聞きになつたものかどうか存じませぬが、お父様は、忘れもしませぬ明治二十四年の五月二十四日のお晝前に

「俺はちよつと其の見物人を見て来る」

と仰言つて新しい飛白の着物にいつもの小倉の角帯を締めてお出かけになりました。

その日は太陽がカン／＼照つて居りましたが、お父様は、

「雨になるかも知れぬ」

と云つて大きな白ケンチウ張りの洋傘を持つて、竹細工の山高帽を冠つて、中足高をお穿きになりました。

「人が大勢居ると危ないから又連れて行つて遣る。土産を買うて来てやるから待つとれ」

と云ひ棄て、川端を水車橋の方へお出でになりました。そのニコ／＼と歩いてお出でになつた横顔を、私は今でも眼の前に思ひ浮かめることが出来ます。

お父様をお見送りしますと私は、お床の間に立てかけてあつた琴を出して昨日習ひました葵の上の替の手を弾きはじめました。お母様はお臺所で髪を上げておいでになつた様ですが、私が葵の上を弾いて、「青柳」を弾いて、それから久しく弾かなかつた「亂」を弾きますと指が疲れ

ましたので、四角い爪をいぢりながら西向きのお庭の泉水に咲いてゐるお父様の御自慢の花菖蒲をボンヤリ見て居りましたが、今までカン／＼照つてゐたお日様に雲がかゝつたかしてフツと暗くなりました。お臺所の物音も止んでゐたやうに思ひます。

その時に玄關の格子戸を荒々しく開く音がして誰か這入つて来たやうでした。私は何故ともなくハツとして立ちかけると間もなく、お父様がツカ／＼と這入つてお出でになりましたので私は又ビツクリしまして

「お歸り遊ばせ」

と手を支へました。このやうな事は今までに一度もありませんでしたので、いつもお歸りの時には玄關にお立ちになつて

「おゝ……今歸つたぞ」

とお母様をお呼びになるのでした。

お父様の其聲のお顔はまるで病人か何ぞのやうに血の氣が無く、幽霊のやうにヒヨロ／＼しておいでになつたやうです。さうして平生のやうに私の頭を撫でようとなされずに、ドスン／＼と私の琴を跨ぎ越して、お床の間に置いてある鹿の角の刀掛の處にお出でになつて、そこに載せてある黒い長い刀の鞘を抜いてチョツと御覽になりました。

それを又元の處にお架けになると、今度は怖い／＼、今思ひ出しても身體の縮むやうな眼つき



をしてヂーッと私の顔を御覽になりましたが、やがて氣味のわるい笑みをお浮かべになりながら、ふるふる私をお抱き上げになつて、又お床の間の前に來てお坐りになりますと、やはり私の顔を見入つてお出でになりました口元が見る／＼うちに、わな／＼歪んでその大きな眼から涙をポロ／＼とお落しになりました。

私は泣くには泣かれずに、唯、怖いやうな悲しいやうな思ひで一パイになつて、お父様の顔ばかり見て居りました。すると、お父様は何とお思ひになりましたことか、突然に私を突き放しざま、私の左の頬を力一パイお打ちになりましたので、私は疊の上にひれ伏したまゝ、ワツと大きな聲を立て、泣き出しました。私がお父様に打たれましたのは後にも先にも、これが初めてのお終ひでした。

「まあ……あなた……何をなさいます」

といふ聲が臺所の方から聞えて、お母様が走つてお出でになる氣はひが致しました。それで私は起き上つてお母様の方へ行かうとしましたが、いつの間にか私はお父様から帶際を捉へられて居りまして、息が止まるほど強く疊の上に引き据ゑられました。その拍子に私は、あまりの恐ろしさの爲めから泣き止んでしまつた様に記憶えてゐます。

お母様は結び上げたばかりの艶々しい丸鬘に薄化粧をして、御自分にお染めになつた青い帷子を着てお出でになりました。さうして手を拭いて居られた紙を左手の袂に入れながらお座敷の入り口で三ツ指をついて

「お歸り遊ばせ……まあ……あなたは何故そのやうなお手荒いことを……」

と云ひながら私に近寄らうとなさいますと、私の背後から、お父様のお聲が大砲のやうにきこえました。

「……黙れツ。……そこへ坐れツ」

お母様はビツクリした顔をなされながら素直にお坐りになりました。さうして兩手を支へながら

「ハイ……」

と云ひ／＼私の打たれた頬と、お父様のお顔とを見比べてお出でになりました。けれどもまだ涙はお見せになりませんでした。

「もつと此方へ寄れツ」

とお父様は押しつけるやうに云はれました。

「ハイ……」

とお母様はしとやかにお進みになつて、丁度十疊のお座敷のまん中近くまで來て又、三ツ指をおつきになりました。

お父様は黙つてお母様の顔を睨んでお出でになるやうでしたが、私はお母様の方に向けられ



て足を投げ出したまゝ、帯際をしつかりと捉へられて居りましたので見えませんでした。  
お母様も一心に、お父様の顔を見ておいでになりましたが、その大きな美しい眼で二度ほどパチパチと瞬をされました。

「……キ……貴様は……ナ……中村半太夫と不義をした覚えがあらう」

と云ふお父様の聲が、間もよく私のうしろから雷のやうに響きました。私の帯を掴んで居られるお父様の手がブルブルとふるへました。

「あつ……まあ……」

とお母様は眼を大きくして驚きさま、うしろ手をつかまれましたが、たちまち膝の前に両袖を重ねてワツと泣き伏しておしまひになりました。

お父様は黙つて其の姿を見ておいでになる御様子でしたが、暫くして又今度は低い押しつけるやうな聲で、靜かに云はれました。

「おぼえが在らうの……」

「エ、ツ……ぞんじがけない……夢にも……マア」

とお母様は青白い顔と、紅くなつた眼をお上げになりました。

「黙れつ」

とお父様のお聲は又、雷のやうに私のうしろからはためきました。私の右の耳がジィー

ンと鳴る位でした。

「おぼえが無いとて證據があるぞツ」

お母様はさう云はれるお父様のお顔をヂツと御覽になりながら、飛白の前垂れの上に両手をチヤンと重ねて、無理に氣を落ちつけようとして居られるやうでしたが、その惱ましくも痛々しいお姿を私は死んでも忘れますまい。けれどもお母様のお聲はいつもと違つて、ふるへてカスレて居りました。

「……ど……どのやうな……」

「黙れ……ツ。どのやうなとは白々しい……あの櫛田神社の犬塚信乃の押繪の顔は誰に似せて作つたツ」

お母様は長い溜め息をホーツとなされました。靜かに私の顔を見ながら云はれました。

「そのトシ子に肖せて作りました」

「そのトシ子の……こやつ顔は誰に似てゐる」

と云ふなり、お父様は両手で私のお煙草盆に結つてゐる頭をガツシと掴んで、お母様の方へお向けになりました。

「エ、ツ……」

といふお母様の聲だけは聞こえましたが、私の左の眼に、お父様のどの指かど這入りまして、



ピク／＼と痛みましたので私は眼をあけることが出来なくなつて、お父様の手を掴まへて藻掻いて居りました。そのうちにお父様の聲は、なほも續きました。

「俺は今日がけふまで知らなんだ。けれども最前あの榎田神社の額を見ながら、人の尊をきいてゐるうちに、あの犬塚信乃の押し繪の顔が中村半太夫の舞臺に生き寫しであることがわかつた。そればかりで無い。貴様の作つた人形の顔が上物になればなる程、中村半太夫に似てゐることも、其處に居つた人の尊で初めて氣が付いた。コヤツ（私）の眼鼻立ちが中村半太夫と瓜二つになつてゐることは、近所の子守女まで知つて居ることも彼の繪馬堂で初めてきいた。……此年月貴様に子が生まれぬわけも今はじめてわかつた。……キ……貴様は、よくも／＼此の永い間俺に恥をかゝせ居つたナ」

かうした聲が響き渡るうちにお父様は片方の手を私の頭から離されましたので、私はやつと眼を開くことが出来ました。

お母様は疊の上に兩袖を重ねて突伏して居られました。さうして聲を押へて泣き續けてお出でになりましたが、不思議と一言も云ひ譯をしようとはなさいませんでした。

私は、いつもお父様がカンシヤクをお起しになつた時のやうに、お母様にすぐにお詫びになることゝばかり思つて居りましたけれども、お母様は此時ばかりはどうした譯か只お泣きになるばかりで、しまひには、その聲さへ包まずに心ゆくばかり泣いてお出でになつたやうです。

その聲をジツと聞いておいでになつたらしいお父様は、やがて武士らしい威嚴のある聲でかう云はれました。

「おれは覺悟した。貴様の返事一つでは、その場を立たせずに此の刀で成敗をして呉れる。先祖の位牌を汚した申譯にする積りだ。サア、返事をせぬか」

と云ひながらお父様は私の頭から手を放して、又帯際をお掴まへになりました。

その時にお母様はピツタリと泣き止んで靜かに顔をお上げになりました。うつむいた儘紺飛白の前垂れを靜かに解いて、叮嚀に疊んで横にお置きになつて、それから鼻紙でお顔の亂れを直して、ほ／＼けか／＼つた髪を丸櫛で掻き上げてから、やをら眼をあげてお父様を御覽になりましたが、その時のお母様の神々しかつたこと……悲しみも、驚きも、何もかも無くなつた、女神のやうな清淨なお方に見えました。

お母様はそれから兩手をチャんと、疊の上に揃へながらキツとお父様のお顔を見上げながら云はれました。

「申譯御座いませぬ……お疑ひは御尤もで御座います」

と云ふうちに新しい涙がキラ／＼と光つて長い睫から白い頬に傳はり落ちましたが、お母様はそのまゝ言葉をお續けになりました。

「どうぞ、お心のまゝに遊ばしませ。私は不義を致しましたおぼえは……」



「何ッ……何ッ……」  
 「不義を致しましたおぼえは毛頭御座いませぬが……此上のお宮仕へはいたし兼ねます」  
 「……」  
 「お名残り惜しうは御座いますが、あなたのお手にかゝりまして……」  
 「何ッ……何ぢやと……」  
 と云ひつゝお父様はグイ／＼と私を、おゆすぶりになりました。  
 お母様はハフリ落つる涙を鼻紙でお押へになりました。  
 「たゞ、そのトシ子だけは、おゆるし下さいますやうに……。それは正しくあなた様の……」  
 「何をッ……又してもぬけ／＼と……」  
 「イ、え……こればかりは正しく……」  
 「エ、ツ……まだ云ふかッ……」  
 「イエ……こればかりは……」  
 「黙れッ……ならぬッ」  
 とお父様が仰言る途端に私を、お突き放しになりましたので、私はバツタリと倒れて、お琴の上にひれ伏しました。それと一緒に琴柱が二つか三つたふれてパチン／＼と裂しい音がしたやうに思ひます。

私はこれから先の事を書くに忍びませぬ。  
 けれどもこれから先の事を書きませぬと、何もかも疑問のまゝになると思ひますから、記憶えて居ります通りに記し止めさせて頂きます。  
 私がやうやつと、お琴の上から起き直りました時には、疊の上に正座して、両手を膝の上に置いたまゝ、うなだれてお出でになるお母様と、それに向ひ合つて、突立つてお出でになるお父様のお姿が、暗いお庭を背景に見えましたが、その時にお父様は、右手に刀を掲げてお出でになつた筈でしたけれども、その刀はお父様の身體の蔭になつて、私の目には這入りませんでした。只、お母様のうしろの壁に、赤い花びらのやうな滴りが、五ツ六ツ、バラ／＼と飛びかゝつてゐるのが見えました。その時は何やらわかりませんでした。  
 そのうちにお母様の白い襟すぢから、赤いものがズーウと流れ出しました。……と思ふと左の肩の青いお召物の下から、深紅のかたまりがムラ／＼と湧き出して、生きた蟲のやうにお乳の下へ這ひ擴がつて行きました。お母様の左手にも赤いものが糸のやうに流れ出してゐたやうに思ひます。それと一緒に、その青いお召物の襟の處が三角に切れ離れて、バラリと垂れ落ちますと、血の網に包まれたやうな白いまん丸いお乳の片つ方が見えましたが、お母様は、うつ向いたまゝと両手を膝の上に重ねて坐つてお出でになりました。  
 私は其時に夢中になつて、お母様に飛びついて行つたやうに思ひます。それをお母様は、お



抱き寄せになつたやうにも思ひますがハッキリとは記憶致しませぬ。その時に、私の背中と胸へ、何か火のやうに熱いものが觸つたやうに思ひながら、お母様の上へ折り重なつて倒れたやうにも思ひますが、これとても夢中になつて居りましたのですから、どんな氣もちだつたかハッキリとは思ひ出し得ませぬ。どちらに致しましても私はそれ切り何もかもわからなくなりましたので、氣がつきました時にはどこかの病院の寢臺の上に寢かされて、白い着物を着た人達に取り巻かれて居りました。

お母様の肩を斬られたあとで、お母様と私と一緒に突き刺されたお父様の刀は、私の肺を避けて居りましたので、助かつたのださうで御座います。けれどもお母様は心臓を貫かれておいでになりましたので、その場で絶息しておいでになつたさうですが、それでも片手で、シツカリと私を抱き締めておいでになつたといふことで御座います。

又、お父様は、そのあとで、袴をお召しになつて、納戸のお佛壇の前で見事に切腹しておいでになつたさうですが詳しい事は存じません。

あと／＼の事は、何も彼も柴思さんが始末をして下すつたさうですが、其時の事を誰が尋ねましても、芝思さんは苦い顔をして返事をなさらぬとの事で御座いますから、私も氣をつけまして、芝思さんにだけは両親の事を尋ねない様に致して居りました。

私はお乳の下の傷が治りましてから後、丸三年の間、博多大濱の芝思さんのお宅にお厄介になつて居りました。そこから福岡の小學校へ通はして頂いたので御座いますが、その間の芝思さん御夫婦の御親切といふものは、それは／＼筆にも言葉にも盡されませんでした。わけても私のお母様が阿古屋の押繪人形を作つてお上げになつたお嬢様には、もう御養子がお見えになつて居りましたが、お二人とも私を親味の妹のやうに可愛がつて下さいました。

けれども私には十六年の春に高等小學校を卒業致しますと間もなく、思ひ切つて芝思さんにお暇を願つて、東京の音楽學校に入る決心を致しました。それは、ちやうど其の頃に、大濱から程近い市小路といふ町に在ります教會で、オルガンといふものを弾き習ひまして、西洋音楽といふものが面白くて／＼たまらなかつたからで御座いませうが、今一心には、もう此上にどんなに辛棒をしようと思ひましても、生れ故郷の福岡には居られないやうな氣持になつたからでも御座いました。

そのわけと申しますのは、ほかでも御座いませぬ。……あれが新聞に出た不義者の子よ……東京一の女形俳優と、福岡一の別嬪夫人の間に出来た謎の子よと、指さし眼ざしされて居りますことが、成長いたしますにつれてわかつて来たからで御座いました。

學校の修身の時間なぞに、先生が何の氣もなく貞女のお話などをして居られますうちに、私の顔を御覽になるとツイと妙な顔になつて、口を噤まれました時の心苦しさを切なさ。子供なが



らに級全體のお友達の視線が、私の身體に焼きついてゐるやうに思つて、うつむいて泣いて居りました時の情なさ。  
「こちらには中村半太夫の舞臺姿にソツクリの娘さんが居るさうですが、チョット見たいものですネエ」

といふお客の聲に對して柴忠さんが

「へエ。それは今お茶を持つて來ませうから、其時によ御覽なさいませ。ハ、ハ、ハ、」

と力なく笑はれる聲を、障子の外で聞きまして、そのまゝ、お納戸に隠れて泣き伏しました時の口惜しう御座いましたこと。

それから又、私はすこし大きくなりますと、身體の疵を人に見られるのが恥かしくしたまらな

いやうになりましたので、ソツと奥様にお願ひしまして、わざと夜中過ぎに、奥のお湯に入れて

いたゞいて居つたので御座いますが、或る冬の夜のこと、切り戸の外で

「見えやうが……」

「ウン。見えるく。恐ろしい大きな疵ばい。ナルホド……」

といふやうな下男たちの囁やきが聞こえたので、そのまゝ浴槽の中に首まで沈みながら、

お湯が冷たくなるまで我慢して居りました時の情なう御座いましたこと……あとでふるへながら、  
夜具の中にちぢかまつて、夜通し寝もやらずに泣いて泣いて泣き明かした事でございました。私

のお母様に限つて、そんな事をなさる筈が無い……と幾たび思ひ直さうとしましたが、私の眼鼻  
立ちが中村珊玉様の舞臺姿に似て居るといふ事實ばかりは、どうにも致しやうが無いのでした。  
そればかりでは御座いません。私が東京に行かうと決心致しましたに就きましては、私自身に

もわかりませぬ、もつともつと不思議なわけがあるので御座いました。

私はそんな風にして泣かされて居るには居りましたものゝ、それでも毎晩お仕舞湯に這入り

まして、お掃除を済ましたあとで、お湯殿の姿見鏡をのぞいて見ないことは御座いませんでした

が、其の中に、いつからともなく奇妙な事に気がつきはじめました。それは私の思ひなしか、

それとも其の日々の氣もちから來たことも御座いましたでせうか。そんな風にして柴忠さんの

お家中が寢静まられた後に、たつた一人でお湯殿の鏡に向ひ合つて居りますと、その中に映つて

居ります私の顔が、だん／＼とあなたのお父様に肖りますばかりでなく、あの櫛田神社の

繪馬堂の額になつて居ります犬塚信乃の顔と、阿古屋の顔と二つのうち、どちらか一つに似て來

ますので、それが又、日によりまして昨日は信乃の顔……今夜は阿古屋の顔といふ風に、まるで

感じが違つて居る事に気がついたので御座いました。

それは何とも申しやうの無い……たゞ私一人だけしか氣づいて居りませぬ不思議な出來事で  
私は毎晩々々それを見るのが、云ふに云はれぬ一つの祕密の樂しみにさへなつて來たので御座  
いました。何だか存じませぬがさうした事が、みじめにも短かい一生をお送りになつたお母様の、



人間世界に對する復讐ではないかとさへ思はれて來まして、われと自分のやはらかい、あたゝかい頬を押へながらツツと致しますことがよくありました。

私は普通の女の子では無い。お母様の此の世に残された思ひの固まりなのだ。……此上もなく美しく、又となくむごたらしい眼に遭ひながら、何も仰言らずにお果てになつたお母様のお心が、そのまゝに私の姿にあらはれてゐるのだ。私はさうしたお母様の怨みが盡きるまで生きて居ればそれでよいのだ。……あゝお母様……私はかうして達者に生きて居ります。……けれども……けれども……私はこれからどうしたらいいのでせうか。……あゝお母さん……。といふやうな氣持ちを鏡の中の自分の顔に問ひかけながら、涙を流したことも度々で御座いました。

さうかと思ひますと……お笑ひになるかも知れませんが……そんなにして泣きましたあとで、嬉しいのか悲しいのかわからぬ空つぽのやうな氣もちになりますと、鏡の中の自分の顔をあの唇を噛みしめて刀を振り上げてゐる勇ましい信乃の表情にしてみたり、琴を弾いてゐる阿古屋の惱ましい姿にしてみたりして遊んでは、たつた一人で氣持ちよくホ、と笑ふことさへありました。さうして、それがお母様の世間に對する腹癒せであるかのやうに思はれまして「不義者の子」といふ名前が、何とも云へず氣持ちよくさへ思はれて來るので御座いました。

こんな事まで申上げて、失禮とは存じませうけれどもこれは私の十二年から十四五歳になります間のこと、私が何となく、男の方の御親切を喜ばぬやうな性質になりましたのも、その頃

の事では無かつたかと思はれるので御座います。

けれども、そのうちに十四五にもなりますと、私の氣もちが又いくらかづつかはつて來たやうに思ひます。

今も申しましたやうにその頃までは毎晩家中寢靜まられましたから、たつた一人で湯殿の鏡臺の前に坐るのが、私の祕密の樂しみのやうになつて居りました。さうして毎夜々々そのやうな物思ひをくり返しては、泣いたり笑つたりしないことは御座いませんでしたが、そのうちにフト鏡の中の私の顔の輪廓が、どことなく亡くなられたお母様にも肖て來たのに氣がついてビツクリすることが度々あるやうになりました。それは前とちつとも變らぬ眼鼻立ちでありながら、心持ち面長になつて、頤や、襟すぢに、ほの白い青味がかゝつて参りますと、お白粉なぞはちつともつけないまゝに、そのあたりがお母様と生きうつしの恰好に見えて來るので御座いました。毎日々々見るたんびに、それがハツキリとわかつて参りまして、しまひには、あの犬塚信乃と阿古屋の眼鼻や唇をつけたお母様が、チャンと鏡の中に、御坐りになつて私を見ておいでになるとしか思へない位になつて参りました。

そのお母様のお姿は、又、奇妙にも、あのお父様からお斬られになるすこし前の、何とも云へない神々しい、清らかなお姿に見えて來てしようが無いので御座いました。さうして、そのお姿を一心に見つめて居りますと、そのうちに、その鏡の中のお母様の唇が、おのづと動き出しま



して、その間に仰言つたお言葉が凜々とすき透つて、私の耳に響いて来るのでした。  
 「私は、不義を致しましたおぼえは毛頭御座いませぬ……けれども、この上のお宮仕へはいたしかねます」

といふやうに……。

そのお聲をきくたびに、私はいつもハツとして、うしろを振り返らずには居られませんでした。さうして、そこいらに誰も居ないことをたしかめますと、今一度自分の口の中で、かうしたお母様の謎のやうなお言葉をくり返しながら、あの時にお母様がお流しになつた通りの涙を、口ホロと流さずには居られないのでございました。

私はそれから、だん／＼と鏡を見るのが怖くなつて來ました。鏡の中に映つて居ります私の顔が、世にも不思議な氣味のわるいものに思へたり、さうかと思ひますと此の上もなくつかしいものに見えたりしますので、その都度に鏡といふものが、世にも取り止めのない、馬鹿らしいやうな、恐ろしいやうな、又はたまらなく苛立たしい品物のやうに思はれてならないので御座いました。しまひには學校の行き歸りに、よその店の硝子窓を見てさへも悲しくて氣味わるくて、胸がドキ／＼するやうになりました。さうして何時からともなく、

……もうどんな事があつても鏡といふものを見まい。お化粧もしままい。髪も引き詰めてグルグル巻きにして置きませう。さうして、あのお母様の謎のやうなお言葉のホントウの意味がわ

かるまでは結婚といふものをしままい。

私は直ぐにも東京に上つて「中村珊玉様」にお眼にかゝつて「私は不義を致しましたおぼえは毛頭御座いませぬ……けれども此上のお宮仕へは致しかねます」とキツパリ仰言つたお母様のお言葉の意味を説き明かして頂きませう……さうして私がお母様の不義の子でないことをハツキリとたしかめるまでは、死んでも男の方の御親切を身に受けまい……

といふやうな、男のやうな氣もちになつてしまひました。

かうした決心を致しますと、私はある夕方ソツと柴忠さんの家を脱け出しまして博多築港の石垣の上に參りました。さうしてたつた一つ持つて居りました粗末な懷中鏡を帯の間から取り出しまして自分の顔とお別れを致しますと、青々と満ちて居ります汐水の中に投げ込みました。さうして其鏡が一丈ばかり深く、丸いゆるやかな波に揺られて、キラ／＼と光りながら底の方に見えなくなるまで見送つて居りました。

それが私の十六の年の春で御座いました。

柴忠さんは、このやうな私の勝手なお願ひを快よく聞き入れて下さいました。

「それは結構なことと思ひます。ちやうど東京の音楽學校の講師で、帝大の教授をやつてゐる岡澤といふのが私の幼友達ですから、それに紹介狀を書いて上げませう。氣心のいゝ夫婦者ですが



子供が無いのですから喜んでお引き上げするでせう。中洲のおやしきを賣つたお金は私がお預りして居りますから、御入用の時は何時でも云つてよこして下さい。それから、これは私の寸志ですが、これだけは盗まれぬやうにして肌身につけてお出でなさい。旅他國に行くと萬一の事が多いものですから……それにあなたはもう只今では、井ノ口家の一粒種になつて居られるのですからね……」

といふやうな何から何まで御親切なお言葉で、旅費のほかに、生れて初めて見ました百圓のお札を一枚と、紹介状を書いて下さいました。

その紹介状は開き封になつて居りまして、柴忠さんから是非一度讀んで置くやうに云はれました。それから別に岡澤先生に宛て、柴忠さんから出される郵便の中味も見せて頂きましたが、どちらにも私の事を死んだ友人の一人娘と書いてありまして、両親の事などはすこしも洩らしてありませんでしたので、ほつと安心したことで御座いました。

女のつまりませぬくり言を長々と書きつけまして嘸かしてお倦きになつたことで御座いませう。

けれども、その時の私は一生けんめいの思ひで御座いました。さうして其のせるか、門司から備後の尾の道まで乗りました汽船にも酔ひませずに、三日三夜かゝつて新橋に着きますと、岡澤先生御夫婦のお迎へを受けまして谷中の閑静なお宅に御厄介になりましたが、それから後とい

ふもの、今日は中村瑠玉様をお訪ねしようか、明日は歌舞伎座へ行かうかと思ひながらも、これといふ手蔓は愚か方角さへもわかりませぬ情なさ……と申して岡澤先生に、このやうなことをお打ち明けする譯にも参りませず、途方に暮るゝばかりで御座いました。それに東京のめまぐるしさと賑やかさと、とりあへず這入つて居りました上野の佛和女學校の學科の難かしさと、それからもう一つ、生れて初めて岡澤先生に教へて頂いたピアノの面白さに夢中になつてしまひまして一年ばかりは夢のやうに過ぎしてしまひました。

さうして間もなく翌年の春になりますと、或るお夕飯時のことで御座いました。奥様のお酌で盃を重ねて居られました岡澤先生が、思ひもかけずこんな事を云ひ出されました。

「トシ子さんは、まだ歌舞伎座を見たことが無かつたつねね」

私はその時に思はずハツとしまして、さう仰言つた岡澤先生のお顔を見上げながら眞赤になつてしまひました。私の心の奥の奥に隠して居ります祕密を云ひ當てられたやうな氣もちが致しますと一緒に、岡澤先生が何かしらそんな事について御存じで、それとない御親切からこんなことを仰言るのではないかと思ひまして……。

けれどもその横から何も御存じないらしい奥様が優しくお笑ひになりました。

「マア。ホントニ。トシ子さんはもうすっかり東京通と思つてゐたら、大切の大切の歌舞伎座を落つこととしてゐたわね。ホ、ホ、。何なら明日は日曜ですから連れてつて下さいませんか。私も



トシ子さんぐらゐ久し振りですか、……  
 すると岡澤先生も、何も御存じ無いらしくニコ／＼して二人の顔を御覽になりました。  
 「ウン。俺もさう思ふとつた處だ。歌舞伎座は田舎者が見るもの位に思つて居つたものぢやからツイ、ウツカリして忘れて居つた。ハ、ハ、ハ、ハ。しかし何ぼ何でも、そんな引つこき詰めのグルグル巻きの頭では不可んぞ。伊豆の大島に岡澤の親類があるやうに思はれては困るからの……」  
 「……まあ。あんな可哀相なことを……」

そんな御冗談のうちに先生御夫婦はいろ／＼と私に歌舞伎芝居のお話をしてお聞かせになりました。音楽と劇の關係とか拍子木の音楽的價値と舞臺表現の關係とか云ふやうな興味深いお話が、それからそれへと盡きませんでした。私はたゞもう上の空で、ともすれば出かゝる溜め息を押へ／＼御飯を口に運んで居りましたので、みんな忘れてしまひました。たゞその中で耳に止まりましたのは奥様から聞きましたお話で、明日の藝題の中心になつて居りますのが、これこそ不思議な因縁と申すもので御座いませう、あなた様のお家の藝となつて居ります阿古屋の琴責めにきまつて居りますこと。その阿古屋をおつとめになるのが私と同年で今年十七におなりになつたばかりの中村半次郎丈……外ならぬ貴方様で、そんなにお若くて立女形になられた俳優のお話は昔から一つも傳はつてゐないこと。そのお衣裳の重さが十三貫目もあるのを、そんなお若さで自由にお使ひになるのが又、大變な評判になつてゐること。さうして此度の歌舞伎座の興業

は昨年の春お亡くなりになつた貴方様のお父様、中村珊玉様のお追善のためであつたこと……なぞで御座いました。

私は其時に御飯を何杯頂きましたか、それとも一杯しか頂きませんでしたか、すこしもおぼえてゐないので御座います。たゞ夢心地で岡澤先生御夫婦のお給仕をしながら外の事ばかり考へて居りましたやうです。

岡澤先生は「ウツカリして私に歌舞伎座を見せるのを忘れてゐた」と云はれましたが、ホンタウは私こそウツカリして居りましたので、何の爲めに柴思さんの處からお暇を頂きましたか。さうして何の目的で東京に参りましたのか、其時までウツカリ忘れてゐたでは御座いませんか。さうしてウカ／＼と致して居りますうちに、お母様の大切な祕密を唯一人御存じの中村珊玉様がお亡くなりになつた事さへも氣付かずに居たでは御座いませんか。これが一年前でありましたならば、こんなよい折は願うても無い筈でしたのに……さうして井の口の娘と名乗つて中村珊玉様にお眼にかゝる機會が出来たかも知れないのに……私は、まあ何と云ふ不幸者であつたらうと思ひますと、思はず口惜し涙が出さうになりましたので、そのまゝお湯を取りに行くふりをしてお臺所の方へ行きました。

けれどもその御夕飯後になりますと先生の御用で、二三町先の荒物屋の前まで郵便を出しに参りましたので、其のついでに私は大急ぎで遠まはりをして、裏町の小さな文具屋兼業の雜



誌屋から、其の月の「歌舞伎時代」といふ雑誌を一冊買つて参りました。さうしてお二階の私の室に歸りますと夕明りのさす窓際に坐つて、怖いものでも見るやうにソツと開いて見ました。私は、それまで其のやうな雑誌に手を觸れたことすらありません。澤山に存じて居つたかも知れませぬけれども、それはお母様の錦繪について居りました古い古いお方の名前ばかりで、近頃のお方のお名前は一人も存じませんでした。まして中村珊玉様に男のお子さんがおありになる事だの、それが私とおない年でお出でになる貴方様で、中村半次郎様と仰言る事なぞ夢にも存じませんでしたので、さうと知りますと、もう不思議なおなつかしさが一パイになりました、まだ表紙を開きませぬから顔が熱くなる様に思ひました。

申すまでもなく、あなた様と、お父様の、お素顔の寫眞を拜見致しましたのは其時が初めて御座いました。さうして、まことに失禮では御座いますけれど、最初に大きく出て居りました貴方様のお父様の、十徳を召したお顔をヂイと見上げて居りますうちに、柴思さんの處のお湯殿の鏡の中で見て居りました私の顔が、マザ／＼と浮き出して参りました時の私の胸の轟きほどんなで御座いましたでせう。今更に不思議なやうな、恐ろしいやうな……さうしてたまらなくなつたかしい様な……それでもさう思つてはならぬと……いふやうな何とも云へませぬ思ひにわななきながら、いつまで其のお寫眞を見入つて居りましたこととせうか。

けれども、さうした私の思ひは、その次の頁を開きますと一緒にかき消されてしまひました。たとへ、ま晝に幽霊に出會ひましたとても、私は、あの時ほどに慄るへわななきは致しませんでした。……その頁にやはり大きく七分身におうつりになつてゐる貴方様のお洋服姿を拜見致しました時に、お母様の變装かと思ふほどよく肖てお出で遊ばすことが、たゞ一眼でわかつてしまつたので御座いました。その時に私は疊の上に両手をついて、あなた様のお寫眞を見入つたま……不思議の上にも重なる不思議に、すつかりおびやかされてしまつたので御座いました。さうして何もかもがわからなくなりましたま、今にも氣絶しさうに息苦しく喘ぎつゞけて居るやうに思ひます。しまひには兩方の手首が痺れて來まして、髪の毛が顔の前に亂れかゝつて参りまして、やはり身動きすら出来ないまに次から次へと恐ろしい思ひに迷ひつゞけた居たやうに思ひます。

「私は不義を致したおぼえは毛頭御座いません」

と仰言つたお母様のお言葉をハツキリと思ひ出しながら……。

けれども、そのうちに室の中が眞暗になつてしまつたのに氣がつかますと、私はやつと氣を取り直しました。机の端に置きました小ラムプに火を灯けまして、ふるふる指で目次にあつたあなた様の、感想談のところを開いてみました。それを讀んで行きますうちに私は、もう今にも聲を立て、泣きたいやうになりましたのを、袖を噛みしめ／＼してやつと我慢し通したこ



とで御座いました。  
それは今度の追善興業につきまして、あなた様が雑誌記者にお洩らしになつた御感想のお話でしたが、その時にお寫眞と一緒に切り抜いて大切に仕舞つて居りましたのをこゝに挟んで置きます。古い事で御座いますからもうお忘れになつてゐるかも知れぬと存じまして……

### 初の大役「琴責め」

中村半次郎丈談

ありがたう存じます。

おかげで熱も出なくなりまし、場合が場合ですから生命がけで勉強して居ります。

この阿古屋の琴責めと云ふのは、當家の六代前の先祖で白井半之助と云ふのから傳はつて居りますので、父の代になつてから方々で演じて、いつも當りを取つたものだと思はします。着付は其の代々の好みになつてゐるのですが、父の代になりましたからは牡丹に蝶々といふことに定めてしまひました。帯は黒地に金銀の唐草模様で、きまつてゐないのは襟だけですが、父のやうに黒とか黄とかいふやうな凝つた澁好みのものは僕みたいには逆も使へませんから、もつとほかの古代紫か水色か何かによろと思つてゐます。父親の追善ですから白襟によろいかと

も思つてゐますが、どうも僕の方では、そんな氣分が出せさうにもありませんので、どうしようかと考へてゐるところです。

十三貫目の衣裳の由來ですか……それは詳しい事は知りませんが、何でも僕が生れました年の正月（明治二十四年）から父は關西地方の興業に出かけまして、長崎から博多を打ち止めにして、三月のお芝居に間に合ふやうに歸つて來たさうです。其時に何處かで何かを見て感じたのでせう。今度の旅行のお土産だと云つて、こんな衣裳を工夫し出しますと、これが一番いゝと云ふので一代改めなかつたのださうです。

しかし御承知の通り父はとても凝り性でしたので、指し圖がなか／＼八釜しくて職人は面喰ひ通しだつたさうです。型の方も特に此の衣裳の爲めに改めた箇所があります位で、初め「あづまや」と申しまして某家の御祕藏品を模した唐織好みの草色の襦袢を着て出て來るのですが、琴にかゝる前にうしろ向きになつて、その襦袢を脱いで、正面に直るまでに衣裳の全體を皆様にお眼

にかけるやうになつて居ります。  
ところで、その牡丹の花の中で開いてゐる五ツと、その上に飛んでゐる三ツの蝶々は、造り物で浮かしてありまして、シグサのたんびにユラ／＼と動くやうにしてありますので、衣裳に臺座を作つて置いて、襦袢を脱ぐ時に一々手早く止めさせるといふ凝りやうです。そのほか、隅々まで舞臺榮えばかりを主眼にしてありまして、利き處／＼には無暗と針金や鯨鬚や鉛玉なんぞを使



つてあるのですが、それでゐてスツキリと、しなやかにと云ふ注文ですから職人もよつぽど尻古垂れたことせう。

父の方も元來が凝り性なのに、此衣裳ばかりは又特別で、うはごとくにまで云ふ位だつたさうで、スツカリ氣に入るまでには小一年もかゝりまして、僕が生れると間も無い翌年の春狂言にやつと間に合つた位ださうです。その前に父は二度ばかり何處か（多分關西でせう）へ行きまして、この衣裳のお手本を見て来て、いろいろ細かい指圖をし直しましたし、春芝居の間際になつてから、着付けと身體の極り工合を今一度見に出かけたと後になつて僕に話して居りましたが、しかし、そのお手本の正體が錦繪だつたか押繪だつたか。又、それが何處に在つたものやら、そんな事は一度も話したことがありませんので、僕も今だに不思議に思つて居ります。

それに皆様も御承知か存じませぬが、父はよく女に化けて旅行する癖がありましたさうで、デミナ十徳を着て、お高祖頭巾を冠つて、養生眼鏡をかけますとチョットしたお金持ちの後家さん位に見えましたさうで、興業中でも何か氣に入らぬ事がありますと、そんな風にして姿を隠して、太夫元が困つて居るのを、すぐ傍から見つて面白がつたりしたさうです。ですから其時の旅行もキットそんな姿で汽車に乗つて行つたのでせう。父の姿を見かけたものは一人も無かつたので、この衣裳のお手本の正體ばかりは、たうとう何處にあるのかわからず仕舞ひになつてしまひました。

そのうちに、其の春興行の前後から父は眼に見えて健康を損ねて來ましたので、仕立屋などは衣裳の祟りだなどと蔭口を云つて居たさうですが、もと／＼ひよわな體質なのに無理な旅行などをしたせいでせう。そんな祕密の旅行もフツツリと止めてしまひまして、舞臺に立つ時のほかは静養ばかりしながら、やつと昨年（はる）の春まで持ちこたへて來たのです。

一方に僕もまた親ゆづりの病身者で、おまけに早くから母に別れた牛乳育ちの弱蟲だつたもんですから、父から傳へられました事は大抵口傳ばかりと云つていゝのでした。本當の仕込みは伯父さん（芝猿丈）と築地のお師匠さん（藤田勘十郎氏）のお蔭なのですが、それとても、身體が弱いために本當の勉強が出來て居りませんので、トテモお恥かしい譯なのです。

そんなところへ今度のお芝居は父の追善の爲めと云ふので、皆様の一方ならぬお引立てを受けまして、舞臺に立たせて頂きますばかりか、夢にも思ひがけなかつた大役の御注文が出て居りますことを、まだ熱が出て寝て居りました僕の枕元に伯父が駆けつけて來て知らせてくれました時はスツカリ膽を潰してしまひました。初めのうちは、いつもの伯父の癖で、僕をカラカツてゐるのだとばかり思つて、いゝ加減な返事をしながら笑つて居りましたが、そのうちに八丁堀の大旦那様（大沼氏）や平川町の先生（紫紅氏）方がお見えになつて、いよく本當だとわかります。僕は思はず手放して泣き出してしまひました。さうして此お芝居が濟んだら、あとはどうなつても構はない積りで稽古を始めたのですが、都合のいゝ事に父も僕も心もちヒョロ長い方で肩巾か



ら何からよく合つてゐますので、衣裳の方はあまり手を入れずに済みました。しかし何しろこの扮装は總體で十三貫目もありましてシヤグマだけでも一貫目近くあります。それをまだ藝も身體もコンマ以下の弱蟲が着るのですから、平生だと立ち上るだけでも大變なのですが、それでも生命がけの女の氣もちになつて舞臺に出てみますと、不思議なくらゐる樂に動けますので、これは大方亡くなりました父の靈が衣裳に乗り移つて軽くしてくれるのだらうと思つて居ります。云々。

私は此時、この記事の上に出伏しまして、どんなにか泣きましたこととせう。

私のお母様の押繪を御覽になつた貴方様のお父様が、それほどまでに牡丹と蝶々の着付けを大切にかけてお用ひになりました。そのお心のウラをお察しました時に、私はもう立つても居ても居られぬやうになりました。

中村半次郎様と私とは、お話にきいた事のある夫婦だつたに違ひ無い。一人はお母様に似て、一人はお父様に似た双生児だつたに違ひ無い。さうしてお母様は私達二人をお生みになると間もなく、お父様に知れないやうに男の子の方を本當のお父様の處へお遣りになつたので、そんな事を何もかも引き受けてお手傳ひしたのは、あのオセキ婆さんだつたに違ひない。さうと考へるよりほかに考へやうが無いのをどうしませう。

「あゝ。中村珊玉様……あなたはそれほどまでに私のお母様を……さうして又私のお母様も

……」

と叫びかけて私はハツとしながら、自分の手で自分の口を押へました。

今から考へますと私はどうして此時に發狂しなかつたのでせうと不思議に思はれる位で後座

います。

いゝえ。私はそれから後暫くの間、發狂してゐたのかも知れませぬ。その夜遅くに岡澤先生のところのお湯殿で、もう一度と見ない決心をして居りました鏡の前に丸一年ぶりに坐りまして、その中に坐つて居られるお母様の顔を見つめながら、いつまでもく涙を流して居りました。私の姿を、若しお兄様が御覽になりましたならば、きつと氣が變になつたものとお思ひになつたでせう。

お兄様……あゝ……おなつかしいお兄さま……。さう申し上げてはわるいのかも知れませぬけれども、どうぞおゆるし下さいませ。私は其夜から貴方様の私をタツタ一人のお兄さまときめてしまつて居たのですから。さうして若しホントのお兄さままでおいでにならないのでしたら、そのホントのお兄さまよりもつとくおなつかしい、大切のく祕密のお兄様と思つて戀ひ焦れながら死んで行き度いと、そればかりを神様にお願ひするやうになりましたのは、其の夜からの事で御座いましたから……。



そのあくる朝になりますと、私は熱が出ましたやうで、時々クラ／＼とたふれさうになりましたが、一生けんめいに我慢をしまして、思ひ切り白くお化粧をして顔色の悪いのを隠してしまひました。

それを奥様が御覽になつて

「マア。トシ子さんたら。何て慌て方でせう」

とお笑ひになりながら髪結ひさんと呼んで来て下さつたのですが、その時に私は「生れて初めて他人に髪を結つて貰ふのだ」と思ひ／＼鏡と向ひ合つては居りましたが、心の中は睡つてばかり居りましたやうで、気が付いた時には、もうスツカリ高島田に結び上げてありましたのを見て思はず「アラツ」と云つて髪結ひさんに笑はれました。

それから故郷を去るときに柴忠さんのお嬢さまから頂いた一張羅の着物と着かへまして、先生御夫婦のお伴をして上野から鐵道馬車に乗りましたが、久しぶりに厚ぼつたい帯をシツカリと締めましたので気がシャンとしました爲めか、それともまだ外はつめたい風が吹いて居りましたせいか、馬車に乗つて居ります間は居眠りをしなかつたやうで御座います。けれども歌舞伎座へ這入つて平土間に坐りますと間もなく、人イキレであたまかくなりましてせむか、又もウツトリとなりまして、お芝居通の先生や奥様が色々説明して下さるのを、夢うつゝに聞いてゐるばかりで御座いました。

お兄様が阿古屋に扮して出てお出でになりましたも、同じやうに睡くて／＼ボンヤリして居りましたやうで、それを我慢しい／＼眼を瞠つて居りました苦しさ、今だにシミ／＼とおぼえて居ります。あとでのお話によりますと、お兄様もその日はお加減がわるかつたのを、無理にとめになりましたのださうで、その惱ましいお姿が、琴責めの時にたいさうよくうつたとの事でしたが、私はたゞ、その白いお下着の襟に刺してありました銀糸の波形の光りを不思議なくらゐるハッキリとおぼえて居りますだけで、そのほかは白いお顔と、赤いお召物とが、ポーツとした水彩畫のやうに眼に残つて居りますばかり……筋なぞは一つもわからないまゝで御座いました。さうして、家に歸りましてから

「面白かつたか」

と先生に聞かれましたも、何一つお答へが出来なかつた時の恥かしう御座いましたこと……。

それでも私は、たうとう自分の病氣を隠しおほせました。

此胸の疵を、お医者様に見られる位なら死んだ方がいゝ。……イ、エ。私は此病氣がだんだん非道くなつて死ぬ時が近づいて来るのを待ちませう。さうして彼の世で待つておいでになるお母様の處へ行つて、思ひ切り抱きついて泣きませう。ほかの事はみんな違つてゐても私のお母様だけは、私の本當のお母様に違ひ無いのだから……と、そんな風に思ひ込みまして、ともすれば熱の爲めに夢のやうな心地になりかけますのを、唇が痛くなるほど噛みしめて我慢しい／＼



そのあくる日も、その又あくる日も無理やりに學校へ行つたので御座いましたが、そのうちに何時からともなく不思議と病氣が癒つてしまつたので御座います。これはおほかたお兄様に是非とも一度お目にかゝらなければなりません運命を、私が持つて居りましたせいでせうと思ひますけれども……。

けれども、其時の私は何故この病氣が治つたのだらうと、つくづく天道様を怨んだことで御座いました。

それから後の私は「不義者の子」といふ大きな札をホントに間違ひなくピツタリと貼りつけられたやうに思つて仕舞つたので御座います。日の目を見ることさへも恥かしく思ひながらその日その日を送つてゐたので御座います。

「あゝお母様。あなたは私を助け度いばかりに、あんな嘘を仰言つた」

とさう思ひながら涙にくれた事が幾度ありましたでせう。中村とか、菱田とか云ふ文字を見かけますたんびに、私の弱い心はどんなにかハラ／＼と波打ちましたこととせう。ほんとに失禮此上もない事ですけど、そのやうな文字が眼に這入りますたんびに私はすぐに「不義」といふ文字を思ひ出すので御座いました。時折りは、いつか知らず歌舞伎座の方を向いて歩いて居りますのに心付きました、何となく氣が咎めますまゝにフイとほかの町すぢへ外れて行きました。その氣恥かしく御座いましたこと……。

けれども、そのうちに暑中休暇が参りますと私は又、思ひも寄りませぬことで、このやうな悲しい、浅ましい憎みから救はれるやうになりました。それはずつと前から岡澤先生の御書齋に置いてありました昔の八犬傳の御本を、何氣なく引き出して開いて見てからの事で御座います。

私はそれこそホントに何の氣なしで御座いました。たゞ、永い日のつれ／＼に二階の窓からお隣の屋根を見て居りますうちにフト、芳流閣の押繪を思ひ出しまして、信乃と現八は何故あの高い屋根の上で鬨はなければならぬのでせうとチョット不思議に思ひましたので、その繪の描いてある處を探し出して前へ／＼と読み返して行きますうちに、いつの間にかそのお話のおもしろさに釣り込まれてしまひました。さうして、しらず／＼のうちに一番初めに立ち歸りまして、八犬傳の全體の女主人公になつて居られる伏姫様が、夫と立てゝ居られる八つ房といふ犬に身を觸れずにみごまれた……といふお話の處まで讀んでしまひました。

そのお話につきましては作者の曲亭馬琴といふ方が昔からのいろ／＼な例を引いて、さも／＼本當らしく書いて居られるのでした。それを讀みました時の私の驚きは、まあどんなで御座いましたでせう。申すまでもなく其時まで私自身には、そのやうな事について何の知識も持たなかつたので御座いましたが、それでも此の世にはキットそんな事があり得るに違ひ無いといふ事を其時にどんなにか固く信じましたこととせう。お母様のお言葉の祕密を解く鍵は、このお話のほかには無いと思ひまして、どんなにか夢中になつて喜びました事とせう。さうして、なほも先の



方を讀んで参りますと、その八つ房といふ犬の思ひ子となつて生れた八犬士の身體には、その父の犬の身體についてゐた八ツの斑紋が一ツづゝ大きなほくろとなつてあらはれて、親子のしるしとなつて居たといふ事まで詳しく書いてあるでは御座いませんか。

それは私に取りまして、それこそ眼も眩むほどの奇蹟的な喜びで御座いました。われと胸をシツカリと抱きしめて、時々涙を流してまで溜め息をしいく讀み續けたことでした。

——男と女とが、お互ひに思ひ合つただけで、その相手によく肖た子供を生んだり生ませたりすることが出来る——

……まあ、何といふステキな子供らしい空想で御座いませう。

けれども其時の私には、そのやうな事が本當にあり得なければならぬとしか思へないので御座いました。さうして、それから後の私は、そんな事實が本當にあることかどうかを、たしかめやうと思ひまして、毎日のやうに上野の圖書館に行きまして、むつかしい産科の書物や心理學の書物を何十冊ほども探りに讀みましたことせう。圖書館の人はおほかた私が産婆の試験を受けてゐるとでも思はれたのでせう。そんな書物の名前を色々教へて下さいましたので私は心から感謝して居りましたが、今から考へますと可笑しいやうな氣も致します。

けれども、そのやうな不思議なことを書いた書物はなか／＼見當りませんでした。そればかりでなく、生れて初めていろいろな事を知りますたんびにビツクリする事ばかりで、人中でそんな

書物を讀んで居るのが氣恥かしさに、圖書館行きを止めようかと思つた位で御座いましたが、そのうちに遺傳の事を書いた書物を何氣なく讀んで居りますと、私は又、ビツクリすることを發見致しました。

それは「女の兒は男親に似易く、男の兒は女親に肖易い」といふことを例を擧げて證明した學理で御座いました。

それを讀みました時に私は身體中が水をかけられたやうに汗ばんでしまひました。さうしてせつかく喜び勇んで居りました私の心は又も、石のやうに重たくなつてしまひました。

「お兄様と私とはやつぱり不義の子だ。さうしてそれを知つてゐるのは此世に私一人だけ……」

さう思ひますにつれて、私の眼の前がズーと暗くなつて行くので御座いました。

それから後の私の心は、もう圖書館に行く力もない位よわりきつてしまひました。御飯さへ咽喉を通り兼ねるやうになりました。たゞ、岡澤先生御夫婦に御心配をかけない爲めに無理からお膳についてゐるやうな事でした。

「このごろトシ子さんの風付きのスツキリして來たこと……それでこそ東京に來た甲斐があるわ……ネエあなた……」

と云つてお二人から賞められたり、冷やかされたりしました時の辛う御座いましたこと……。けれども、それをもまだ私の心の底に、あきらめ切れない何かしらが残つて居つたので御座



いませう。時々思ひ出したやうに上野の圖書館に参りましては、醫學に關係しました不思議な出來事や、珍らしい事實を書いた書物を、あてどもなく讀み散らして居りますうちに又も、思ひもかけませぬ書物から大變なお話を見つけ出しまして、ビックリ致したので御座います。

その書物を書かれたのは、その頃もう亡くなつて居られた醫學博士の石神刀文といふ方で、たしか明治二十年頃に西洋の書物から翻譯なすつたものと、おぼえて居ります。題名は「法醫學夜話」と申しますので、その中には昔から今日までの間に、法醫學上の問題になりました色々な不思議な出來事が、昔風の文章で面白く書いてあるので御座いましたが、そのおしまひの方に次のやうなお話が交つて居りました。その書物はもう何處の本屋にも無いとの事でしたから、私はその後、今一度圖書館に通ひまして、そのお話のところだけを書き寫して、お兄様のお寫眞やお話の記事と一緒に肌身離さず持つて居りましたので、お讀み悪いか存じませぬが、そのまゝ此處に挿んで置きます。

法醫學夜話 (石神刀文氏著)

第五章 人身の妖異 その一 妊娠奇談

人身の妖異、其他に關する法醫學上の興味ある挿話も亦決して珍らしからず。中にも最も人の意表に出づるものあるは妊娠に關する奇談にして、到底コンモンセンスにては判斷し得べからざるもの多し。

その第一に掲ぐ可きは昔(西曆紀元前三百七十年前後)希臘の國の一王妃の身の上に取りし奇蹟的現象なり。

譯者曰く——憾むらくは此原文には、その王と王妃の明記しを在らず。當時希臘國內は雅典市を除くのほか、數個の專制的君主國が分立し居りしを以て、此事件の起りしも其中の一國なりと推測せらる。

その王妃は册立後間もなく身ごもり給ひて、明け暮れ一室に起臥しつゝ、紡績と靜養とを事とせられしが、その室の楣間には、先王の身代りとなりて忠死せし黒奴の肖像畫が唯一個掲げあり。その状態、宛かも王妃の臥床を視下しつゝ、微笑を含み居れるが如く然り。王妃も亦床上に横たはりつゝ、所在なき折々はその黒奴の肖像を熟視し居られしが、やがて月滿ちて生れし孤兒を見れば、眉目清秀なる王の胤と思ひきや、眞つ黒々の黒ん坊なりしかば王妃の驚き一方ならず。其のまゝ悶絶して息絶えなむばかりなりしは左もありなむ。

然るに斯くと知りたる王の驚愕と憤激も亦一方ならず。直ちに兵士に命じて王妃を監禁すると同時に、當時召し使ひ給ひし黒奴を悉く擽め取つて獄舎に投じ、一々拷問にかけ給ひけれど、固より身に覺えなき者共の事として白狀する者一人も無く、遂に由々しき疑獄の姿とぞなりにける。



然るに又、其の當時、雅典市にヒポクラテスとなん呼べる老醫師あり。其の徳望と、學識と、手腕と、共に一世に冠絶せる人物なりしが、此事を傳へ聞かざりて王の御前に出頭し、妊娠中の婦女子が或る人の姿を思ひ込み、又は或る一定の形状色彩のものを氣長く思念し、又は凝視する時は、その人の姿、又は、その物品の形状色彩に似たる兒の生まる可き事、必ずしも不合理に非ざる可きを、例を擧げ證を引いて説明せしかば、王の疑やうやくにして解け、王妃と黒奴との冤罪も残りなく晴れて、唯、彼の黒奴の肖像畫のみが廢棄燒却の刑に處せられきとなん。これ即法醫學の濫觴にして、律法の庭に醫師の進言の採用せられし嚆矢なりと聞けり。

譯者曰く——支那に傳はれる胎教なるものも、此のヒポクラテスの見地より見る時は強ちに荒唐無稽の迷信として一概に排斥すべきものに非ず。或は、最も高等なる科學的研究手段によりてのみ理解され得べき、深遠微妙なる學理原則のその間に儼存せるもの無しと云ふ可からず。心すべき事にこそ。

又、次に掲ぐるは、今より約二十年前（西曆一八六六年）我英國の法曹界に於て深甚なる注意の焦點となり、海外の専門雜誌にも傳へられし事件なれば、或は記憶に新なる讀者もあるべけれども、未知の人々の爲めに抄録せむに、蘇格蘭の片田舎（地名秘）に住める貴族にして赤髮富豪のきこえ高きコンラド（假名）從男爵といふがあり。年四十に及びて數哩を隔てたる處に在る「鷹の宿」といふ由緒ある家柄に生れしアリナ（假名）と呼べる若き女性を夫人として迎へける

が、この女性に元來絶世の美人なりしにも拘はらず、何故か八方より申込み來る婚約を悉く謝絶し居り。尼となりて修道院に入らむと志し居りしものなりしを、八方より手を盡して、辛うじて貰ひ受けしものなりければ從男爵の満悦譬ふべくもあらず。身方の親戚知友はもとより新夫人の兩親骨肉及「鷹の宿」の隣家に住める醫師、兼、辯護士の免狀所有者にして、篤學の聞こえ高きランドルフ、タリスマン氏迄も招待して、盛大なる華燭の典を擧げ、附近住民をして羨望渴仰の眼を瞠らしめぬ。

去る程にアリナ新夫人はやがて從男爵の胤を宿しつ。月満ちて玉の如き男子を生み落しけるが、その兒の顔貌一眼見るより從男爵の面色は忽然として一變し、聲を荒らげて云ひけるやう「吾家には代々斯の如き漆黒の毛髮を有せるもの一人も生れたる事無し。又汝が家の系統にも去る者無きは人の知る處にして、汝を吾が妻として迎へたる理由も亦、其點に懸つて存するを知らざりしか。察する處汝は、何人か黒髮を有する男子と密通して此子を宿せしものに相違無し。余は斯の如き兒を吾が家の後嗣として披露する能はず、疾く此兒を抱きて親里に立ち去れ。而して余の責罰の如何に寛大なるかを思ひ知れ」

とぞ罵りける。然るに之に對してアリナ夫人は不思議にも一言の辯解をも試みんとせず。その夜深く件の黒髮の孩兒を抱きて祕かに産室をよるほひ出で、跣足の儘數哩を歩行して、翌日の正午頃親里に歸り着きしが、家人の隙を窺ひて玄關横の應接間に入り、その正廳に掲げある黒髮の



美青年の肖像畫の前に來り、石壁の上にあふれ伏したるまゝ息絶えぬ。程經て之を發見せし實父母は驚駭措く處を識らず。直ちに隣家のタリスマン氏を迎へ來り、水よ薬よと立ち騒ぎけれども其甲斐なく、唯、黒髪の孩兒のみが乳を呼びつゝ生き残りけるこそ哀れの中のははれなりしか。其後、此事件は訴訟問題となり、アリナ夫人の實父とコンラド從男爵とは法廷に於てアリナの貞操に關し黒白を争ふこととなりしが、從男爵は、その黒髮青年の肖像畫と同じ人物の存在を固く主張せしに對し、アリナ夫人の實父の味方となりし醫師、兼、辯護士ランドルフ・タリスマン氏は頑強なる抗辯を試みて一步も退かず。結局同氏は態々佛國に渡りて件の肖像畫を描きし畫工を伴ひ來り、その畫像が元來英國に於て描かれしものに非ず、西班牙の一闘牛士の死亡したるに依り、其愛人の好みに任せて狩獵服を着たる姿を該畫工が執筆せしものなるが、評判の傑作なりし爲め其製作の途中に於て盜難に罹り、轉々して英國に渡りたるものなるを以て、細部に於て未完成なる部分が多々ある旨を、一々その畫工に指摘せしめつ。次いでタリスマン氏は、畫面上に印せられたる新舊幾多の接吻痕のあと、涙の痕跡、及畫面に身を支へたる指の痕と、アリナ夫人の身長指紋其他が完全に一致する處より、アリナ夫人が兼ねてより此畫像に叶はぬ戀心を捧げ居りし事を立證し、同夫人が嘗て尼寺に入らむとせし心理の真相を明白にして、その貞操の肉體的に純潔不二なる事を各方面より詳細に亘りて論斷し、更に進んで前掲、希臘國、某王妃の例を擧げて、かゝる事例が存在の可能なる事を説破したる後、一段と語氣を強めて云ひけるやう。

「近く、吾が英國に於ても遺傳學上、かゝる現象の存在し得ることを證明し得べき實例あり。最近ラッドレー附近の一種馬場に於て飼育せられし一牝馬は、今より三年前に見世物用の班馬と交尾して一匹の混血兒を生み、飼主をして奇利を博せしめし事あり。然るに夫れより二年後の昨年度に於て該牝馬を普通の乗馬と交尾せしめたるに、奇怪にも、以前の配偶たりし班馬と同様の班紋を臀部より大腿部にかけて止めし仔馬を生みたるを以て、現在斯界の専門家、及び、遺傳學者間の論議の中心となり居り。しかも這般の奇現象を説明し得べき學說の中、最權威あるものとして、他の諸説を壓倒しつゝあるは目下の處唯一つ

——生物の親子の外貌性格の相似は、その親の心理に潜在せる深刻なる記憶力が、その精蟲と卵とに影響したるものに外ならず——直接の父母以外の、他人に酷似せる子が、姦通の事實なくして生るる事あるは此の道理に依るもの也——  
と云ふに在り。故に、吾國の過去に於ける幾多の裁判が、其當時の最も有力なる學理學說によりて決定せられし先例に依る時は、此の訴訟も亦、此説を眞理と認めて斷定せらる可きものなる事を、余は斷乎として主張し得るもの也。すなはち此事件は、前述の如き心理状態に在りて、結婚を忌避しつゝありしアリナ嬢を、從男爵が追求して謝絶の辭に窮せしめ、強ひて同棲を承諾せしめしより起りしものにして、此の婦人の此の畫像に對する精神的の貞操を破らしめし罪は寧ろ從男爵側に在りと云ふべし。アリナ嬢は、何事も云ふ能はずして嫁し、何事も云ふ能はずして死



せり。その貞操の高潔なる。その性情の純美なる。之をして疑ふ可くんば、天下何れの處にか正義を求めん。之をしも同情せずんば、地上何れの處にか人道を認めん」と涙を揮つて痛論せしかば、満場寂として云ふ處知らず。唯、證人席に在りしアリナの實父母が歎歎するあるのみ。遂に此訴訟は從男爵コンラド氏の敗訴となり、アリナの靈と、從男爵の血によりて生まれたる孩兒の扶助料、及び、その實父に對する慰籍料として巨額の財産を分與して結着を見たりとなり。

之を以て之を見れば、古來貞操に關する疑を受けて辯疏する能はず。冤枉に死せし婦人の中にはかゝる類例無しといふ可からず。且つ、此の判例と學説とを眞理と認めて類推する時は、男子にても曾て戀着し、若しくは記憶せる女性に似たる兒を、現在の配偶に生ましむる事が、あり得べき道理となり來るを以て、場合によりては男女間に於ける精神的貞操の有無をも、形而下の諸現象、譬へば其の兒に現はれたる特徴等によりて、具體的に證明され得るに到るべく從つて、法律上に於ける貞操の字義が現在よりも遙かに狭少嚴密となり、道徳上より見たる貞操の意義と一糸相容れざるに到ると同時に、一方には這般の學理を逆利用する姦通の隠蔽事實が、陸續として現出する時代の近き將來に於て來り得べきことも、豫想するに難からざる事となるべし。

◇譯者曰く——以上を要するに、生物界に於ける靈意識の作用の玄怪不可思議にして、現代

に於ける科學知識の克く追隨捕捉し得べきものに非ざるは、單に妊娠に關する前記二三の特例に照すも、斯の如く明瞭なる事然り。況んや、かゝる微妙なる事象を一片の法律の條文、又は淺薄なる常識の判斷に任せて、深遠なる醫學的研究を全然度外視せること吾が國の法廷の如くなる時は、その危険、その不安果して幾何ぞや。更に況んや、幾多の無辜を罰して願みざる非人道に想倒する時は、烈日の下寒毛樹立せずんばある可からず。歐米先進諸國に於ける醫學の發達と、その社會的權威の偉大なる、眞に羨望に堪へたりと云ふべし。

(以下を省く)

それからちやうど夕方の事でした。ずつと遠くの駿河臺の方からニコライ堂の鐘の音が聞こえますと間もなく、圖書館の人が窓を閉め始めましたので私はやつと氣が付きましたが、その時にはもう廣い室の中に私一人だけしか残つてゐないので御座いました。私は其の書物を係の人にお返ししますとそのまゝ、うなだれて外へ出ましたが、寛永寺の御門の前の杉木立の近い人氣の絶えた處まで參りまして、とある大きな木の根方に坐りますと、ありたけの涙を絞りながら泣いて泣きつゞけました。その時の私の心持を、どう致しましたならばお兄さまにお傳へする事が出来ませう……。若し此のやうな事があり得るものと致しましたならば、お兄様と私の身の上こそ此上も無いよいお手本では御座いますまいか。



あなたのお父様と、私のお母様とは唯一眼で戀に落ちられました。さうしてお互ひにその戀しい人の姿を、胸の底に深く秘められたまゝ、寢ても醒めてもお忘れになりませんでした……その思ひがお兄様と私の姿にあらはれて、お二人の思ひを遂げる爲めに此世に生き残つてゐるのでは御座いますまいか。

かう思ひ當りました時、私はこの小さな胸が押し潰されてしまつて、眼の前が眞つ暗になりまして中に、二つの青白い鬼火がもつれ合つて行くのがホンノリと見えたやうに思ひました。けれども又氣を取り直して、今一度よくよくあと先を考へまはして見たので御座いましたが、考へれば考へるほど思ひ當りますことばかりが、あとからく出て来るので御座いました。

あなたのお父様に似て居ります私の姿を、朝に晩に見て居られました私のお母様はきつと、かうした不思議について何かしら、心の奥深くに思ひ當つてお出でになつたに違ひ無いのでした。あの楠田神社の繪馬堂に奉納されました額ぶちの外題に「三國誌」をと仰言つた柴忠さんの御注文を避けて、わざと「芳流閣上の二犬士」の場面をお作りになつた、お母様のお心の底の底には、つい此間私が伏姫様のお話を見ました時に思ひ當りましたのと同じやうな驚きと喜びが、云ふに云はれぬ母親の悲しみと一緒に、人知れず潜み隠れて居なかつたと、どうして考へられませう。その頃の福岡の士族の家庭にはオキマリのやうに一部づゝ備へ付けてありました八犬傳のお話を、お母様だけが御存じなかつたと、どうして思はれませう。……さうして其のやうな恐ろ

しい、惱ましい不思議さを明け暮れ胸に秘めてお出でになつたればこそ、お母様はあのように思ひ切つて、お父様の御成敗をお受けになつたのでは無いでせうか。私が正しく、うちのお父様の血を引いた娘であることを御存じになりながらも、さうした不思議を思ひ當つてお出でになつたればこそ、あの様に何一つ、お申し開きをなさらなかつたのでは無いでせうか……。

あゝ。思ふも氣高い……おそろしい、お母様の純眞なお心の力……藝術の道と、人間の道と、さうして、のがれやうもなく落ちてお出でになつた戀の道の三つに、靈と肉を捧げつくして、あへなくも世をお早めになつた神聖なお母様……可哀さうなお母さま……いぢらしいお母様……むごい……悲しい……おなつかしい……。

かう思ひますと私は氣がちがひさうにたまらなくなりまして、フイと顔を上げました。するともう日がトツプリと暮れて居りまして、澤山の落ち葉が、眞白な塵と一緒に恐ろしい勢ひでゴッーと渦巻きながら、私の方へ走つて来るやうでしたから、私はやつと立ち上りまして谷中の方へ歸りかけました。泣いて泣きつくしましたあとの空つぼのやうな氣もちになりながら……。

けれども、さうして星空の下を吹く烈しい秋風の中をフラ／＼と歩いて行きますうちに、私は又も、世の中が次第と明るくなつて来るやうに思ひ始めました。さうして其夜は涙に濡れたまま、夢一つ見ませずに安々と眠りましたが、あくる朝は、いつもよりもずつと早く起きまして、



先生のお宅の裏や表のお掃除を致しました。

「私 はもう一生涯結婚しますまい。お兄様はまだ何も御存じないのですから……此秘密をこちらから進んでお打ち明けする譯には行かないのですから……。ほかの方と幸福な家庭をお作りになるのかも知れないのですから……。私はそのお邪魔をしない様に……。私といふものが此の世に居りますことを、お兄さまに絶對にお知らせしないやうにして、藝術の爲めに身を捧げませう。お母様に敗けないやうに清浄な一生を送りませう」

といく度か思ひ／＼しては青い／＼澄み渡つた朝の空を仰いだことで御座いました。

それから後の私 は、外から来るいろ／＼な誘惑や迫害とたゞかひながら、心の中で、かやうな決心を固く／＼守り續けて行くばかりで御座いました。

音楽學校を卒業致しました時に、岡澤先生から洋行のおすゝめを受けました時も、お氣に障らないやうにしてお断り致しました。……本當を申しますと、飛び立つやうな思ひがしないでは御座いませんでしたが、萬一その爲めに私の寫眞が新聞に載りまして、お兄様のお眼に止まるやうなことがありはしまいかと思ひますと、何となく空恐ろしい氣持ちがして躊躇されたので御座いました。もしか致しますと、これもお兄様と私とにまつはつて居りました、不思議な運命のしわざかも知れませんでしたけれど……。又時たまには、先生を通じて申込んで参りました縁談にも同じやうにしてお断り致しました。私のこの胸の痕痕を、お兄様以外のお方にどうしてお眼

にかけることが出来ませう……と思ひまして……

私はさうして、たゞ明けても暮れてもピアノばかり弾いてゐるので御座いました。ちやうど日清戦争のあとで、西洋音楽が一時パツタリと流行らなくなりまして、軍樂隊と、唱歌だけしか残つてゐないやうな有様で御座いましたが、ちつとも構ひませずに大學のケール先生のお宅や宮内省の山内先生のお宅へ日參致して居りました。新しい樂譜を寫しては弾き、寫しては弾く樂しみに、夢中にならう／＼として居りました。

けれども、そのピアノのキーの白いなめらかな手ざはりに觸れるたんびに私 は、ともするとお母様のなつかしい白い肌を思ひ出しまして、熱い涙を落すので御座いました。又はその黒いキの光りを見る時、お母様がつけてお出でになつたオハグロの美しさをいつも／＼思ひ出しました。さうして又、岡澤先生のお庭に咲いてゐるダリアや、サルビアの赤い花の色を見ますと、あのお母様のうしろの白い壁について居りました血の滴りを思ひ出しまして、ともすると私の心は物狂ほしくなるので御座いました。

そんな物思ひをくり返しく／＼致して居りますうちに、あなたのお父様のお心がお兄様のお姿となつて、あらはれて居りますのと同じやうに、私のお母様の思ひが私のミメカタチとなつて此世に残つて居りますことは、もう疑ふことが出来なくなりました。さうして、あなたのお父様と私のお母様が、死ぬまでお隠しになつた戀が、お兄様と私によつて、饗宴を入れ違へたまゝに



遂げられなければならぬ運命が、一刻々々とさし迫つて来て居りますことを、私は毎日々々ハツキリと感ずるやうになつて参りました。

あゝ。私は、どう致したらよろしいので御座いませう。

世間では私を、あなたのお父様のお血すぢを引いたものと信じ切つて居るので御座います。若しお兄様と私とが御一緒になるやうな事になりましたならば、世間の人は何と云ふで御座いませう。キツトあの忌はしい兄妹の戀として、其のまゝには許さないで御座いませう。

お兄様と私とがホントの兄妹でないといふ證據に、あの古い書物のお話を例に引きましても信じて下さる方が何人居られるでせう。

又は榎田神社の繪馬堂にかゝつて居ります二つの押繪の人形が何の證據になりませう。却つてお兄様と私とを世にも咀はれた男女にしてしまふ役にしか立たないで御座いませう。

そればかりでなく、其時の私にはこんな事も考へられたので御座いました。

お兄様はホントウはもうズツト前から、お父様にこのお話をお聞きになつてゐるのでは無いかしら……此事については私よりもずつと詳しく御存じなので、それを表向きには隠しておいでなりながら、お心の中ではやつぱり私と同じやうな思ひに惱んでお出でになるのでは無いかしら。女嫌ひといふ評判を平氣で立て通してお出でになりますのも、そんなお心もちから出たこと

で、ホントウは人知れず私の事を思つてお出でになるのでは無いかしら……私の事をいろいろとお探りになつてゐるのでは無いかしら……

さうして萬に一つお兄様が私をお見つけになりました時に、殿方の氣強いお心から、そんなことはちつとも構はぬと仰言つて、直ぐにも只今の御名譽地位をお振り棄てになつて私を救ひにお出でになるやうなことがありはしまいかしら……

若し其やうな場合になりましたら、私はどう致しませう。この背中から胸へ抜けとほつて居ります恐ろしい疵痕を、私はどうしてお兄様にお眼にかけることが出来ませう。さうして、それをしも御承知の上で、お構ひにならぬとしましても、私はもう其の頃から、一生涯治る見込みも御座いませぬ難病に取りつかれて居る事を、よく存じて居りましたのをどう致しませう。

私はこの病氣を隠し度う御座いましたばかりに、何もかも忘れて、一心に勉強をつゞけて居りましたのです。たゞ氣もちばかりで生きて居りましたのです。さうしてそんなやうな氣もちを持ちつゞけて行きますうちに、いつからともなく、亡くなられました私のお母様が今はの際にお残しになつたあの謎のお言葉の、あとの半分の意味をスッキリ悟つてしまつて居たので御座います。

→私は不義を致しましたおぼえは毛頭御座いませぬ。けれども……此上のお宮仕へは致し兼ねます



とキツパリお父様に仰言つた、そのお母様のお言葉の中には、その時のお母様が、やはり私と同じやうな病氣にかゝつて、私と同じやうな氣もちでお仕事に熱中してお出でになつた、絶望的なお心持ちが、堪へられぬ程痛々しく一パイに籠もつてゐたに違ひありません、身にしみゝく悟つてゐたので御座います。

何をお隠し致しませう。私の家は代々かうした病氣に呪はれて居りました爲めに縁組みをするものが無いと云つてもよかつたので御座います。ですからお母様は、たゞ私一人が幸福になりますやうに……さうして私一人の幸福をお守りになり度い爲めに、あのやうなお言葉を残されて、世をお早めになつたものとしか考へられないので御座います。

そのお母様と同じ病氣で一パイになつて居ります此の身體を、どうしてお若い御病身のお兄様に捧げることが出来ませう。その爲めにお兄様の御名譽と藝術とを捨てゝいたゞく事が、どうして出来ませう。

さう思ひます度に私の胸は、いつも張り裂けるやうになりました。拭いても／＼落ちる涙をピアノのキーの上から拂ひ除けながら、ソツと蓋を御ししまして、その冷たい板の上に、熱のある頬をシミ／＼と押しつけました事が幾度で御座いましたらう。

けれどもお兄様。私はもう只今となりましては何もかもわからなくなつてしまひました。

たゞ……お兄様が此手紙を御覽になりましたならば、すべてがスツカリおわかりになりますこと……そればかりを心頼みに致しまして、やう／＼に此處まで認めて來たので御座います。

それは何故かと申しますと、お兄様は若しや、お兄様の本當のお母様を御存じなのでは無いかと思はれますからで御座います。さうして、それと一緒に、お父様の御病氣のホントの原因も御存じになつてゐること、思はれますからで御座います。

さうして又、若しも、そんな事が御座いませんで、お兄様はそのやうな事についてホントウに何一つ御存じないものとしませれば、あなたのお父様は、やはり私のお母様とおんなじやうに、唯一つの戀をお胸に秘められたま……お兄様にもお明かしにならないま……此上もなく氣高い一生をお送りになつたお方に違ひ御座いませぬことが、たやすくお察し出来るからで御座います。

どうぞおゆるし下さいませ。

御病氣の折柄をも構ひませず、女心のせつなさに、こんなに長々とした事を御眼にかけまして、無かしお読みづらくてお疲れの事と存じます。

けれども此の事をお打ち明けして、ホントの事を判断して頂くお方は此世にお兄様お一人しか、お出でにならないので御座います。私はもう、此のやうな祕密を胸に秘めて居ります力が



無くなりましてしたので御座います。唯一人、お兄様のお心にお継りするよりほかに致し方が無くなつたので御座います。

お兄様、若しお兄様が、ホントウに私のお兄様でお出でになりますならば、私はお兄様のたゞ一人の妹として、生命にかへてもお願い致します。

看護婦さんたちの、それとないお話しを聞きますと、お兄様は、その後大變にお工合がおよろしいとの事で、それだけ承はりましただけでも自分の病氣が薄らいで行くやうに心強う御座います。どうぞく此上にもよくおなり遊ばして、スツカリもとのやうにおなり遊ばすまでは、私の事を出来るだけお忘れ下さいまして、お心靜かに御養生なすつて下さいませ。私、はそればかりを心頼みに致しましてこの病院でお手當てを受けて居ります。さうして生きて居りますうちに、たゞ一眼でも、お兄様のお丈夫なお姿を拜見し度いと、そればかりを神様にお祈り致して居ります。

私、はもう此の世の中で、お兄様の事を考へるよりほかには、何の楽しみも無くなつてゐるので御座いますから……

けれども若しかして、まだお兄様が御丈夫な御自由なお身體におなりになりませぬうちに、私が亡くなりますやうなことが御座いましたならば、濟みませぬが唯一度でよろしう御座いますから私のお墓にお参り下さいまして、お出来になりますことなら多くの花よりも、あの花菖蒲をお

手向けになつて下さいませ。お母様がお斬られになつた時に、お座敷の前に咲いて居りました思ひ出の花で御座いますから……

どうぞくお願い致します。決して御無理をなさいませぬやうに……そんな事を遊ばしたことがわかりましたならば、私、はその上の御無理をおさせ申しませんやうに覺悟致して居るので御座いますから……

せめて、お兄様だけでも、御無事に此世に生き残つて頂きまして、お母様の藝術を此世にあらはして下さいますやうにと、そればかりをお祈りして居るので御座いますから……

けれども若しさうで御座いませぬでしたならば……お兄様と私とが、血を分けた兄妹で御座いませぬでしたならば……ホントウにあなたのお父様と、私のお母様の、せつないお心の形見で御座いましたならば……

あ……私はどう致しませう……

あなたのお父様と、私のお母様の戀は、世にも上なく清淨なもので御座いました。

さうして永久に氣高いもので御座いました。

どうぞくお兄さまと私の戀も、そのやうにいつまでも氣高く、清淨に、悲しくてをばりますやうに……

今一度お眼にかゝり度い……と思ひますと、私、は又しても狂ほしい心地にせめられます。け



れども、このやうな思ひすらも、お二方の戀の氣高さに比べますと、お恥かしい、汚ららしいものやうに思はれまして……。思ひが亂れまして、もう筆が進みませぬ。お名残り惜しう存じます。

明治三十五年三月二十九日

あら／＼かしこ

菱木新太郎様

井の口トシ子より

みもとに

—をはり—

### 瓶詰の地獄

拜呈 時下益々御清榮、奉慶賀候。陳者、豫てより御通達の、潮流研究用と覺しき、赤封蠟附きの麥酒瓶、拾得次第届告仕る様、島民一般に申渡置候處、此程、本島南岸に別小包の如き、樹脂封蠟附きの麥酒瓶が三個漂着致し居るを發見、届出申候。右は何れも約半里、乃至、一里餘を隔てたる個所に、或は砂に埋もれ、又は岩の隙間に固く挟まれ居りたるものにて、よほど以前に漂着致したるものらしく、中味も、御高示の如き、官製端書とは相見えす。雜記帳の破片様のものらしく候爲め、御下命の如き漂着の時日等の記入は不可能と被爲存候。然れ共、尙何かの御参考と存じ、三個とも瓶のまゝ、村費にて御送附申上候間、何卒御落手相願度、此段得貴意候敬具

月 日

××島村役場印

海洋研究所 御中



## ◇第一の瓶の内容

あゝ……此の離れ島に、救ひの舟がとうとう来ました。

大きな二本エントツの舟から、ボートが二艘荒浪の上におろされました。舟の上から、それを見送つてゐる人々の中にまちつて、私たちのお父さまや、お母さまと思はれる、なつかしいお姿が見えます。さうして……おゝ……私たちの方に向つて、白いハンカチを振つて下さるのが、ここからよくわかります。

お父さまや、お母さまたちはきつと、私たちが一番はじめに出した、ビール瓶の手紙を御覽になつて、助けに来て下さつたに違ひありません。

大きな船から眞白い煙が出て、今助けに行くぞ……と云ふやうに、高い高い音の音が聞こえて来ました。その音が、此の小さな島の中の、禽鳥や昆蟲を一時に飛び立たせて、遠い海中に消えて行きました。

けれども、それは、私たち二人に取つて、最後の審判の日の獄よりも怖ろしい響で御座いました。私たちの前で天と地が裂けて、神様のお眼の光りと、地獄の火焰が一時に閃めき出たやうに思はれました。

あゝ。手が震えて、心が惶惶と書かれませぬ。涙で眼が見えなくなります。

私たち二人は、今から、あの大きな船の眞正面に在る高い崖の上に登つて、お父さまや、お母さまや、救ひに来て下さる水夫さん達によく見えるやうに、シツカリと抱き合つたまゝ、深い淵の中に身を投げて死にます。さうしたら、いつも、あそこに泳いでゐるフカが、間もなく、私たちに喰べてしまつてくれるでせう。さうして、あとには、此の手紙を詰めたビール瓶が一本浮いてゐるのを、ボートに乗つてゐる人々が見つけて、拾ひ上げて下さるでせう。

あゝ。お父様。お母様。すみません。くくくく。私たちは初めから、あなた方の愛子でなかつたと思つて諦めて下さいませ。

又、せつかく、遠い故郷から、私たち二人を、わざと助けに来て下さつた皆様の御親切に對しても、こんなことをする私たちが二人はホントにくく濟みません。どうぞくくお赦して下さい。さうして、お父さまと、お母様に懷かれて、人間の世へ歸る、喜びの時が来ると同時に、死んで行かねばならぬ、不倅な私たちの運命を、お矜恤下さいませ。

私たちは、かうして私たちの肉體と靈魂を罰せねば、犯した罪の報償が出来ないのです。此離れ島の中で、私たち二人が犯した、それはくく恐ろしい悖戻の報責なのです。

どうぞ、これより以上に懺悔することを、おゆるし下さい。私たち二人はフカの餌食になる價打しか無い、狂妄だつたのですから……。



あゝ。さやうなら。

神様からも人間からも救はれ得ぬ

哀しき二人より

お父様  
お母様  
皆々様

◆第二の瓶の内容

あゝ。隠微たるに驗たまふ神様よ。

この困難から救はるゝ道は、私が死ぬよりほかに、どうしても無いので御座いませうか。

私たちが、神様の足元と呼んでゐる、あの高い崖の上に私がたつた一人で登つて、いつも二三匹のフカが遊び泳いでゐる、あの底なしの淵の中を、のぞいてみた事は、今までに何度あつたかわかりませぬ。そこから今にも身を投げようと思つたことも、いく度であつた知れませぬ。けれども、そのたんびに、あの憐憫なアヤ子の事を思ひ出しては、靈魂を滅亡す深いため息をしいし

い、岩の圭角を降りて來るのでした。私が死にましたならば、あとからキツトアヤ子も身を投げ  
るであらうことが、わかり切つてゐるからでした。

私と、アヤ子の二人が、あのボートの上で、附添ひの乳母夫婦や、センチヨーサンや、ウンテ  
ンシユさん達を、波に浚はれたまゝ、此の小さな離れ島に漂れついてから、もう何年になりませ  
るか。此島は年中夏のやうで、クリスマスもお正月も、よくわかりませぬが、もう十年ぐらゐ  
つてゐるやうに思ひます。

その時に、私たちが持つてゐたものは、一本のエンピツと、ナイフと、一冊のノートブック  
と、一個のムシメガネと、水を入れた三本のビール瓶と、小さな新約聖書が一冊と……それだけ  
でした。

けれども、私たちは幸福でした。

この小さな、緑色に繁茂り榮えた島の中には、稀に居る大きな蟻のほかに、私たちが憂患す  
禽、獸、昆虫は一匹も居ませんでした。さうして、其時、十一才であつたと私と、七ツになつた  
ばかりのアヤ子と二人のために、餘るほどの豊饒な食物が、みち／＼と居りました。キウクワン  
テフだの鸚鵡だの、繪でしか見たことの無いゴクラク鳥だの、見たことも聞いたことも無い華麗  
な蝶だのが居りました。おいしいヤシの實だの、パイナップルだの、バナナだの、赤と紫の大き



な花だの、香氣のいゝ草だの、又は、大きい、小さい鳥の卵だのが、一年中、どこかにありました。鳥や魚などは、棒切れでたゞくと、何ほどでも取れました。

私たちは、そんなものを集めて来ると、ムシメガネで、天日を枯れ草に取つて、流れ木に燃やして、焼いて喰べました。

そのうちに島の東に在る岬と磐の間から、キレイな泉が潮の引いた時だけ湧いてゐるのを見付けましたから、其近くの砂濱の岩の間に、壊れたボートで小舎を作つて、柔らかな枯れ草を集めて、アヤ子と二人で寝られるやうにしました。それから小舎のすぐ横の岩の横腹をボートの古釘で四角に掘つて、小さな倉庫みたやうなものを作りました。しまひには、外衣も裏衣も、雨や、風や、岩角に破られてしまつて、二人ともホントのヤパン人のやうに裸體になつてしまひましたが、それでも朝と晩には、キツト二人で、あの神様の足登の崖に登つて、聖書を讀んで、お父様やお母様のために祈りをしました。

私たちは、それから、お父様とお母様にお手紙を書いて大切なビール瓶の中に入れて、シツカリと樹脂で封じて、二人で何遍もくく接吻してから海の中に投げ込みました。そのビール瓶は、此島のまほりを環る、潮の流れに連れられて、ズン／＼と海中遠く出て行つて、二度と此島に歸つて来ませんでした。私たちはそれから、誰かゞ助けに来て下さる目標になるやうに、神様の足登の一番高い處へ、長い棒切れを樹てて、いつも何かしら、青い木の葉を吊して置くやうにしました。

うにしました。

私たちは時々争論をしました。けれどもすぐに和平をして、學校ゴッコや何かをするのでした。私はよくアヤ子を生徒にして、聖書の言葉や、字の書き方を教へてやりました。さうして二人とも、聖書を、神様とも、お父様とも、お母様とも、先生とも思つて、ムシメガネやビール瓶よりもズツト大切にして、岩の穴の一番高い棚の上に上げて置きました。私たちは、ホントに幸福で、平安でした。此島は天國のやうでした。

かやうな離れ島の中の、たつた二人切りの幸福の中に、恐ろしい悪魔が忍び込んで来やうと、どうして思はれませう。

けれども、それは、ホントウに忍び込んで来たに違ひ無いのでした。

それは何時からとも、わかりませんが、月日の経つにつれて、アヤ子の肉體が、奇蹟のやうに美しく、麗澤に長つて行くのが、アリ／＼と私の眼に見えて来ました。ある時は花の精のやうにまぶしく、又、ある時は悪魔のやうになやましく……さうして私はそれを見てみると、何故かわからずに思念が曖昧く、哀しくなつて来るのでした。

「お兄さま……」

とアヤ子が叫びながら、何の罪穢れもない瞳を輝かして、私の肩へ飛びついて来るたんびに、



私の胸が今までとはまるで違つた氣もちでワク／＼するのが、わかつて來ました。さうして、その一度々々毎に、私の心は沈倫の患難に付されるかのやうに、畏懼れ、慄えるのでした。けれども、そのうちにアヤ子の方も、いつとなく態度がかはつて來ました。やはり私と同じやうに、今までとはまるで違つた……もつと／＼なつかしい、涙にうるんだ眼で私を見るやうになりました。さうして、それにつれて何となく、私の身體に觸るのが恥かしいやうな、悲しいやうな氣もちがするらしく見えて見ました。

二人はちつとも爭論をしなくなりました。その代り、何となく憂谷をして、時々ソツと嘆息をするやうになりました。それは、二人切りで此離れ島に居るのが、何とも云ひやうの無いくらゐ、なやましく、嬉しく、淋しくなつて來たからでした。そればかりで無く、お互ひに顔を見合つてゐるうちに、眼の前が見る／＼死蔭のやうに暗くなつて來ます。さうして神様のお啓示か、悪魔の戲弄かわからないまゝに、ドキンと、胸が轟くと一緒にハツと吾に歸るやうな事が、一日のうちに何度となくあるやうになりました。

二人は互ひに、かうした二人の心をハツキリと知り合つてゐながら、神様の責罰を恐れて、口に出し得ずに居るのでした。そんな事をしてゐるうちに、若し救ひの舟が來たらどうしやう……と云ふ心配も、一緒になつてゐることが、何とも云はないまんに、二人同志の心によくわかつてゐるのでした。

けれども、或る靜かに晴れ渡つた午後の事、ウミガメの卵を焼いて食べたあとで、二人が砂原に足を投げ出して、はるか海の上を這つて行く白い雲を見つめてゐるうちにアヤ子はフイと、こんな事を云ひ出しました。

「ネエ。お兄様。あたし達二人のうち一人が、若し病氣になつて死んだら、あとは、どうしたらいゝでせうネエ」

さう云ふうちにアヤ子は、面を眞赤にしてうつむきまして、涙をホロ／＼と焼け砂の上に落しながら、何とも云へない、悲しい笑ひ顔をして見せました。

その時に私が、どんな顔をしたか、私は知りませぬ。たゞ死ぬ程息苦しくなつて、張り裂けるほど胸が轟いて、啞のやうに何の返事もし得ないまゝ立ち上りますと、ソロ／＼とアヤ子から離れて行きました。さうしてあの神様の足登の上に来て、頭を掻き撈り／＼ひれ伏しました。

「あゝ。天にまします神様よ。

アヤ子は何も知りませぬ。ですから、あんな事を私に云つたのです。どうぞ、あの處女を罰しないで下さい。さうして、いつまでも／＼清淨にお守り下さいませ。さうして私も……。

あゝ。けれども……けれども……

おゝ神様よ。私はどうしたら、いゝのでせう。どうしたら此患難から救はれるのでせう。私



が生きて居りますのはアヤ子のために此上も無い罪悪です。けれども私が死にましたならば、尙更深い、悲しみと、苦しみをアヤ子に與へることにあります。あゝ。どうしたらいいでせう  
私………。

おゝ神様よ………。

私の髪の毛は砂にまみれ、私の腹は岩に押しつけられて居ります。若し私の死に度い願ひが聖意にかなひましたならば、只今すぐに私の生命を、燃ゆる閃電にお付し下さいませ。

あゝ。隠微たるに鑒給まふ神様よ。どうぞ、聖名を崇めさせ給へ。み休徴を地上にあらはし給へ………。

けれども神様は、何のお示しも、なさいませんでした。藍色の空には、白く光る雲が、糸のやうに流れこるばかり………。崖の下には、眞青く、眞白く渦捲きどよめく波の間を、遊び戯れてある、カカ尻尾やヒレが、時々ヒラ／＼と見えてゐるだけです。

その青澄んだ、底無しの深淵を、いつまでも／＼見つめてゐるうちに、私の目は、いつとなくグル／＼と、眩暈めき初めました。思はずヨロ／＼とよろめいて、漂ひ碎くる波の泡の中に落ち込みさうになりましたが、やつとの思ひで崖の端に踏み止まりました。………と思ふ間もなく私は崖の上の一番高い處まで一跳びに引き返しました。その絶頂に立つて居りました棒切れと、其尖端に結びつけてあるヤシの枯れ葉を、一思ひに引きたふして、眼の下はるかか淵に投げ込ん

でしまひました。

「もう大丈夫だ。かうして置けば、救ひの船が来ても通り過ぎて行くだらう。」

かう考へて、何かしらゲラ／＼と嘲り笑ひながら残狼のやうに崖を馳け降りて、小舎の中へ馳け込みますと、詩篇の處を開いてあつた聖書を取り上げて、ウミガメの卵を焼いた火の残りの上に載せ、上から枯れ草を投げかけて焔を吹き立てました。さうして聲のある限り、アヤ子の名を呼びながら、砂濱の方へ馳け出して、そこいらを見まはしました。………。見るとアヤ子は、はるかに海の中に突き出てゐる岬の大磐の上に跪いて、大空を仰ぎながらお祈りをしてゐるやうです。

x

私は二足三足うしろへ、よろめきました。荒浪に取り捲かれた紫色の大磐の上に、夕日を受けて血のやうに輝いてゐる處女の背中の神々しさ………。

ズン／＼と潮が高まつて来て、膝の下の海藻を洗ひ漂はしてゐるのも心付かずに、黄金色の瀧浪を浴びながら一心に祈つてゐる、その姿の崇高さ………。私は身體を石のやうに固ばらせながら、暫くの間、ボンヤリと眼をみはつて居りました。けれども、そのうちにフィットと、さうしてゐるアヤ子の決心がわかりますと、私はハツとして飛び上

りました。夢中になつて馳け出して、貝殻ばかりの岩の上を、傷だらけになつて迂りながら、岬



の大磐の上に這ひ上りました。キチガヒのやうに暴れ狂ひ、哭き喚ぶアヤ子を、兩腕にシツカリと抱き抱へて、身體中血だらけになつて、やつとの思ひで、小舎の處へ歸つて來ました。けれども私たちの小舎は、もうそこにはありませんでした。聖書や枯れ草と一緒に白い煙となつて、青空のはるか向ふに消え失せてしまつてゐるのです。

それから後の私たち二人は、肉體も靈魂も、ホントウの幽暗に逐ひ出されて、夜となく、晝となく哀哭み、切嚙しなければならなくなりました。さうしてお互ひに相抱き、慰さめ、勵まし、祈り、悲しみ合ふことは愚か、同じ處に寝る事さへも出來ない氣もちになつてしまつたのでした。

それは、おほかた、私が聖書を焼いた罰なのでせう。夜になると星の光りや、浪の音や、虫の聲や、風の葉ずれや、木の實の落ちる音が、一ツ／＼に聖書の言葉を叫びながら、私たち二人を取り巻いて、一步一步と近づいて來るやうに思はれるのでした。さうして身動き一つ出來ず、微睡むことも出來ないまゝに、離れ／＼になつて悶えてゐる私たち二人の心を、窺視に來るかのやうに物怖ろしいのでした。かうして長い／＼夜が明けますと、今度は同じやうに長い／＼晝が來ます。さうすると此島の中に照る太陽も、唄ふ鸚鵡も、舞ふ極樂鳥も、玉蟲も、蛾も、ヤシも、パイナプルも、花の色

も、草の芳香も、海も、雲も、風も、虹も、みんなアヤ子の、まぶしい姿や、息苦しい肌のかとゴツチャになつて、グル／＼／＼と渦巻き輝きやきながら、四方八方から私を包み殺さうとして、襲ひかゝつて來るやうに思はれるのです。その中から、私とおんなじ苦しみに囚はれてゐるアヤ子の、なやましい瞳が、神様のやうな悲しみと悪魔のやうなホ、エミとを別々に籠めて、いつまでも／＼私を、ドイツと見つめてゐるのです。

鉛筆が無くなりかけてゐますから、もうあまり長く書かれませぬ。私は、これだけの虐遇と迫害に會ひながら、なほも神様の禁責を恐れてゐる私たちのまごころを、此瓶に封じこめて、海に投げ込まうと思つてゐるのです。明日にも悪魔の誘惑に負けるやうな事がありませぬうちに……。

あゝ、神様………私たち二人は、こんな苛責に會ひながら、病氣一つせず、日に増し丸々と肥つて、康強に、美しく長つて行くのです。此島の清らかな風と、水と、豊穰な食物と、美しい、楽しい、花と鳥とに護られて……。

あゝ。何といふ恐ろしい責め苦でせう。此美しい、楽しい島はもうスツカリ地獄です。



神様。神様。あなたはなぜ私たち二人を、一思ひに屠殺して下さらないのですか……………。

——太郎記す……………

◇第三の瓶の内容

オ父サマ。オ母サマ。ボクタチ兄ダイワ、ナカヨク、タツシヤニ、コノシマニ、クラシテキマス。ハヤク、タスケニ、キテクダサイ。

市川 太郎

イチカワ アヤコ

——をはり——

月 蝕



鋼のやうに澄みわたる大空のまん中で  
月がすゝり泣いてゐる。

……けがららしい地球の陰影が  
自分の顔にうつると……………

それを大勢の人間から見られるとて……………  
……………身ふるひして嫌がつてゐる。



……………しかし……………  
逃れられぬ暗い運命は……………  
刻々に彼女に迫つて来る。



大空のたゞ中に……………



……はじまつた……  
月蝕が……………



彼女はいつとなく死相をあらはして来た。  
水々しい生白い頬……………

……目に見えぬ髪の毛を、長々と地平線まで引きはえた……………  
それが冷たく……………美しく……………透きとほる……………コメカミのあたりから水気が……………ヒツソリと  
したゝる。



彼女はもう……………  
仕方が無いとあきらめて  
暗い……………醜い運命の手に……………  
自分の美をまかせてしまふつもりらしい。



頤のあたりが

すこしばかり切り缺かれる。

……………黒い血がムル／＼と湧く。

……………暗い腥いにほひが大空に流れ出す。

……………それが一面に地平線まで擴がつてゆく。  
彼女を取巻く星の光がキラ／＼と牙えかへつた。



彼女の臉が一しきりふるえて

やがて力無く黙ずんで来る。

鼻の横に黒い血の碗が盛り上る。

……………深く斬込まれた双の蔭に  
赤茶氣に肉がヒクメク。



世界は暗くなつた。

すべての生物は鉛のやうに重たく  
針のやうに痛々しい心を



ヂット抱いて動かなくなつた。



けれども暗い……鋼鐵よりもよく切れる圓形の双は  
彼女の青ざめた横頬を

なほもズン／＼と斬り込んでゆく。

そこから溢れ出る暗い……腥いにほひにすべては溺れ込んでゆく。

……山も……海も……森も……家も……道路も……

……そこいらから見上げてゐる人間たちも……



その中にたゞ一つ残る白い光……

彼女の額と鼻すぢが

もうすこしで……

黒い双の蔭に蔽はれさうになつた。



空一面の夥しい星が

小さな聲で囁き合つて

又ヒツソリと静まつた。



陰惨な最後の時……

顔を蔽ひつくす血の下に

観念して閉ぢこゐた白い臉を

パツチリと彼女は見開いた。



案外に平氣な顔で

下界の人々を流し眼に見はした

ニツコリと笑つた。



……ホ、ホ、ホ、ホ……

これはお芝居なのよ。

……大空の影と光りの……

だから妾は痛くも苦しくも……

……何ともないのよ……



さうしてもうぢきおしまひになるのよ。



……でも皆さんホントになすつたでせう。  
……あたし名優でせう……

オホ、……



ではサヤウナラ……

みなさんおやすみなさい。

……ホ、……

ホ……

# 涙のアリバイ

——手先表情映畫——

すべて無字幕、説明なしで、手だけを中心とし、其他の物體は、手の背景としてうつす。但、生きた人間の顔は絶対に取り入れぬこと。

## 俳優登場

◆悪人の手……四十恰好の色の白い、指の長い、節の高い、青すぢの走つた毛ムクジャラ……

……右の手の甲に大きな疵痕……

……左の薬指に「槻田」と彫つた巨大な認印つきの指環一個……

……時々思ひ出したやうに、ねばつこい、ヒネクレたわなゝきを見せる……

◆美人の手……綺麗な、スナナリとした、上品な中年増……



……左の薬指に華奢なダイヤ入りと、エンゲージリングを一つづつ……  
 ……優しい心のふるえを時々あらはす……  
 ●女中の手……真黒く、丸々と脂切つた……  
 ……ダラリとした無神経……  
 ●探偵の手……三十前後の、黒くて、強さうな……  
 ……頭のよさをあらはすテキパキとした動き……

第一の場面

……贅澤な事務用机の中央の、椅子に接した三尺四方ばかり……  
 ……凝つた文具いろく……  
 ……高雅な卓上電燈、寫眞立て、豆人形、一輪挿し、灰落しなどをキッチンと並べてある……  
 ……一隅の置時計は九時十五分を示してゐる……  
 ……薄暗い窓あかりがさしてゐる……  
 ……時々自動車のヘッドライトが窓硝子に近づいては消えて行く……  
 ●悪人の手登場……卓上電燈のスイッチを捻り、あたりをパツと明るくする。  
 ……手袋を脱いで机の上に放り出し、續いてシガーケース、財布、名刺入れ、ハ

ンカチ其他を投げ出し、両手を揉み合はせて疲れた表情……  
 ●女中の手登場……珈琲と、帝劇マチネーの案内状を机の上に置いて退場……  
 ●悪人の手……立ちながら珈琲を取り上げつゝ案内状を見る。  
 ……ペンを取り上げて同封の葉書の「出席」と印刷して下へ「槻田萬策」と署名  
 ……をして傍に置く。  
 ……やがて椅子に腰を卸し、両手を机の平面にピタリと静止させ、あたりの様子  
 ……を窺ふこなし……  
 ……電燈を消し、机の横から、大きなインキ瓶を取り出し、夕あかりに透かしつ  
 ……つ机の上のインキ瓶のインキを半分ばかり、大きな瓶へ注ぎ返しもとの位置に直す。  
 ……今一度あたりの様子をうかがひつゝ、左右のカフスの間、其他、衣服の各所  
 ……から、寶石を掴み出して、一ツ／＼インキ瓶の中に沈めおはる。  
 ……悦ばしげに両手を揉み合はせつゝ電燈をつける  
 ●女中の手登場……『丸の内私立探偵局連水晃』と刷つた名刺を主人の手に渡す。  
 ●悪人の手……その名刺を裏返したりヒネクツタリして困惑した表情の後「こちらへお通し  
 ……申せ」といふ手つきをする。  
 ●女中の手……恭しく握り合つた儘退場……



◆悪人の手……………女中が遠ざかるにつれてブル／＼とふるえつゝ、立ち上るこなし……………名刺を握り潰さうとして、又ハツと吾にかへる。

書き初める。間もなく慌て、机に歸り、ペンを取り上げ、レターペーパーを擴げて手紙を書き初める。

「拜啓 本日は光榮ある晩餐會に御招待を受け、格別の御厚遇に預り、殊に、朝野の名士數氏に御紹介を賜はり候事、面目之に過ぎ……………」

……………こゝまで書くうちに次第々々に手がふるひ出し、文字が固苦しく亂れ始めて、たうとう中止する。

◆探偵の手登場……………ツカ／＼と机に近づき、立つたまゝ握手を求め。悪人の手……………ペンを棄て、さも愉快さうに立ち上つて之に應じ、椅子を指して「サアド

ウヅ」といふこなし……………椅子に腰かけ、ハンカチで汗を拭ふ。

◆女中の手登場……………探偵の前に珈琲を置いて退場……………

◆悪人の手……………悠々と椅子に腰を下し、机の上のシーガーケースを取り上げ、蓋を開いて探偵にすゝめる。

◆探偵の手……………軽く左右に振つて斷る。

◆悪人の手……………かすかにふるえつゝ、自分でマッチを擦り、葉巻に吸ひつける。

◆探偵の手……………机の上に書きかけになつてゐる晩餐會の禮狀を指し「そこで盗んだものを

下さい」といふ風に兩手を軽く重ねてさし出す。強く否定して、身の潔白を表明する。

◆悪人の手……………禮狀の文字のふるえを指し、鋭く詰問する。

◆悪人の手……………非常に激昂し、固く握り締めて机をドン／＼とたたき「出て行け」と命ずる如く入口の扉を指す。

◆探偵の手……………皮肉に屈けたり伸ばしたりして悪人を指し、嘲弄しつゝ立ち上る。

◆悪人の手……………ソロ／＼とポケットのピストルを探り、半分程引き出す。

◆探偵の手……………往來に面した窓を指し、腕時計の時間「九時半」を指し示しつゝ退場……………

◆悪人の手……………ピストルを握り締めたまゝ見送る。

……………やがてピストルをポケットに押し込み、急いで手袋をはめレターペーパーの書きかけを下の二三枚と一緒に破つて、これもポケットに捻ぢこみ、机の上に投げ出した身のまはりのものを取り上げ、電燈を消して、探偵のあとを逐うて行く……………

——[間]——



◆美人の手登場

……しづかに電燈をつける。  
……指環をはめ直し、指先に残つてゐる化粧のあとをハンカチで拭ひ消しなぞしながら、何気なく机の案内状と葉書とを取り上げてみる。

……さも嬉しさに両手を打ち合はせる。

……インキをつけたまゝ投げ出してあるペンを、ソツと取り上げて「出席」欄出萬策と書いてある横に、優しい筆蹟で「同シツ子」と並べて書き「缺席」の文字を消さうとして、インキの切れたのに氣付き、つけ足さうとする。

……と……インキ壺の中に何か落ち込んでゐるのに氣がついて、ペン先で二三度突つき、その中の一個をかき上げると、ハツとしてペン軸を取り落す。

……ワナノくとふるえる指でレターペーパーを二三枚破つて、吸取紙の下に重ねて、机のまん中に置き、抽出からピンセットを取り出して、インキの中にさし入れ、寶石を一つ一つ拾ひ上げてインキを切り、スツカリ紙に包み、その上からハンカチでくるんで懐に入れる。

……別の新しいハンカチを取り出して泣く風情……。

……そのまゝ静に、電燈を消して退場……。

——[間]——

●探偵の手登場

……左右とも手袋をはめたまゝ、ソロノと机に探り近づく。

……懐中電燈を照し、そこいらを調べまはる。……紙屑籠……唾壺……小

型の瓦斯ストーブなど……。

……大きなインキ瓶の口が濡れてゐるのに氣付き、取り上げて二三回振つて見てから又下に置く。

……机のまはりを押しこゝろみて、秘密の落し戸の有無をたしかめる。  
……次に、机の抽出しを下から上へ順々に検査して、机の表面まで懐中電燈を持

つて来る。

……先づ、案内状の回答葉書に新しく「全シツ子」と書いたのを照し「缺席」の文字の上のカスタペンの痕を調べ、次いでインキに濡れたピンセットを照し出す。

……すぐにインキが半分以上減つてゐる壺に電燈をさしつける。  
……右手を握りしめて「占めた」といふこなし……。  
……懐中電燈を消して退場……。

第二の場面



……暗い部屋に置いたピアノのキーのところ、三尺四尺ばかり……  
……楽譜は置いてない……  
……一方の窓から薄あかり……  
……何か快活らしい曲を弾いてゐる。

◆美人の手……時々手を止めてハンカチで涙を拭ふやうす……

——そのうしろから突然にパツと光線がさす——

◆美人の手……ハツとしてハンカチを取り落す。

●探偵の手……懐中電燈をさしつけつゝ近寄る。

◆美人の手……わな／＼と慄え出す。

●探偵の手……ピンセットで物を抓み上げる眞似をして見せる。

◆美人の手……寶石の包みを差し出しつゝ、わな／＼き悲しむ。

●探偵の手……包みを受け取つて中味を調べ、固く結び直して無造作にポケットに入れ

る。

……くらの暗の中に、拇指を出して見せ、食指とくつけ合はせて「お前と共謀だ

らう」と詰問する體。

◆美人の手……烈しくわな／＼きつゝ左右に振つて否定し「ピアノを弾いてゐた。何も知らな

い」と主張する。

●探偵の手……懐中電燈をつけ、ピアノのキーの上に落ち散つた涙を一ツ／＼に照し出す

ち、指先が感動して微かにふるえ出す。

……ともつた儘の懐中電燈をしづかにピアノのキーの上に置き、わな／＼く女の白

い手をハンカチごと両手で強く握り締め「御安心なさい」といふ風に軽くたゝいて慰撫す

る。

——その上から涙がポトポトと滴たりかゝる——

——完——



微 笑

それは可愛らしい、お河童さんの人形であつた。丸裸體のまゝ……何處をみつめてゐるかかわからないまゝ……ニツコリと笑つてゐた。

……時間と空間とを無視した……すべての空虚を代表した微笑であつた。……眞實無上の美しくしさ……私は、その美しくさが羨ましくなつた。

た。そのスベくした肌の光りが無性に悲しく、腹立たしく、自烈度くなつた。云ひ知れず憎々しくなつた。その人形を壊してしまひ度くなつた。其微笑をメチャクにし度くなつた。私は人形を抱き上げて、静かに首をねぢつて見た。すると其首は、殆んど音も立てないで、ポツクリと折れた中から、竹の咽喉笛がヒョイと出て來た……人を馬鹿にしたやうに……

私は面白くなつた。拳固を固めてポカリと頭をたゞき割つたら、鋸屑の脳味噌がバラ／＼と崩れ落ちて來た。胴を掴み破ると、ボール紙の肋骨が飛び出した。その下から又、薄板の隔膜と反故紙の腸があらはれた。

た。手足をポキ／＼とヘシ折つたら、中味は灰色の土の肉ばかりで、骨の處は空虚になつてゐることがわかつた。けれども人形は死ななかつた。何もかもバラ／＼になつたまゝ、可愛らしくニコ／＼してゐた。

私は愈々苛立たしくなつた。人形の破片を残らず古新聞に包んで、グル／＼と押し丸めて、庭の隅のハキダメにタ、キ込んだ。……こんな下らないものを作つた人形師を咀ひながら……其古新聞紙はハキダメの中で雨にたゞかれて破れた。メチャク／＼になつた人形の手足が、ゴミクタの中に散らばつた。その中から可愛らしい硝子の片眼だけが、高い／＼青空を見詰めながら、いつまでも／＼微笑してゐた。私はずつと後になつてそれを發見した。さうして何かしらドキンとさせられた。

私は履物の踵で、その片眼を踏みつけた。全身の重みをかけてキリ／＼と廻轉した。白い太陽がキラ／＼と笑つた。

——をはり——



## 支那米の袋

あゝ……すつかり酔つちやつたわ。……でも、もう一杯カニヤツクを飲ましてちやうだいね……

あんたもお飲みなさいよ。今夜は特別だからサア……えゝ。妾の氣持が特別なのよ。今夜は……

……そのわけは今話すわよ。話すから一パイお飲みなさいつたら……それあとテも恐ろしい話なのよ。……ダメく。いくらあんたが日本の軍人だつて、妾の話をおしまひまで聞いたら屹度ビックリして逃げ出すにきまつてゐるわよ。

……あゝ美味しい。妾もう一パイ飲むわ。へゞれけになるわよ今夜は……ニチエウオ！……レストラン・オブライコのワーニヤさんを知らないか……つてね。管を巻くわよ今夜は……オホ、……でも、あんたは其の話を聞く前に、妾にいくらでもお酒を飲ましていゝ理由があるのよ。何故つて妾は此の間から何度もくあんたを殺し度くなつた事があるんですもの……マ

ア。あんな顔をして……ホ、……まああんなに怖い顔をしなくてもいゝから一杯お飲みなさいつたら、シヤンパンを抜いたからサ……

……アラ……何故いけないの。おかしな人ねあんたは……まあ憎らしい。妾、そんな薄情物ぢや無いわよ。あんたを殺してお金を奪つたつて、いくらも持つてやしないぢや無いの。亞米利加の水兵の十分の一も持つてゐないことを妾はちやんと知つてゐるわよ。ホラ御覽なさい。ホ、……だからそんな餘計な心配をしなくて一パイお飲みなさいつたら……飲まなけああんたを殺し度いわけを話さないからいゝ……寝てる間に黙つて殺しちやうから……さあ……グツト……さうよ。サアも一つ……これは妾を侮辱した罰よ。ホ、……

今夜もさうなのよ。チョツと電燈を消すから、其の窓から向家の屋根を覗いて御覽なさい……ホラ、あんなに雪が班になつて凍り付いてゐるでしょ。妾はあの屋根の雪の班を見るたんびにあんたを殺したくてたまらなくなるのよ。……だから其のたんびにお酒を飲むの。ウオツカでも、ウイノーでも、ピーヴオでも何でもいゝの。さうすると忘れちやつてね。あんたを殺すのを忘れちやつて寝てしまふから……あゝ美味しい。妾もう一杯飲むわ。

……イ、エ眞劍なの。ホンタウに眞劍なのよ。さうして今夜こそイヨ／＼本氣になつてあんたを殺さうと思つてゐるのよ。だから今夜は特別なのよ……だつてあんたはちやうどこんな晩に、妾を生命がけの旅行に連れ出して行つた男にソツクリなんですもの……背の高さと色が違ふだけ



で、眞正面から見るとホントに兄弟かと思ふ位よ。だからコンナに惚れちやつたのよ。……イ、エ……ちつともトンチンカンな話ぢや無いの。妾、そんなに酔つてやしないわよ。カニヤツクなんかイクラ飲んだつて管なんか巻きやしないから……その譯はかうなのよ。まあお聞きなさいつたら……トンチンカンでもいゝからサア……

あんたはツイ此の頃来たんだから知らないでせうけれども、此の間、此浦鹽を引き上げて行つた亞米利加の軍艦ね。あの軍艦の司令官の息子でヤングつて云ふのが、その男なのよ。……え、……司令官と同じにヤングつて云つてね。名前だか苗字だかわからないけど、只さう云つてゐたの……さうネエ。年は三十だつて云つてゐたけど、あんたと同じ位に若く見えたわ。六尺位の背丈の巨男でね。まじめな、濟まアした顔をしてゐたわ。彼の軍艦の中でも一等のお金持ちで、一番の學者だつて、取り巻きの士官や水兵さん達がさう云つてゐたから本當でせうよ。もつとも學者だつて云ふけど、あんたと違つて歌も知つてゐるし、音楽も出来るし、お酒はいくら飲んでも平氣だし、ダンスでも賭博でも、あんたよりズツト巧かつたわ……それからもう一つ……お話ガトテも上手だつたの。イ、エ。そんな六箇敷い話ぢや無いの。それあステキな面白い……トテモ恐ろしい戀愛の話よ。ヤングは其の方の學者だつて、自分で左様云つてゐた位だわ。え、……

そのヤングは軍艦が浦鹽に着くと間も無く此のオブライコの舞踏場へ遣つて来て、一番最初に

妾を捉まへて踊り出したの。さうしたら妾の身體がヤングの半分位しか無かつたもんだから、一緒に来た士官や水兵さん達がみんなでワイ／＼冷やかして、ピュー／＼口笛を吹いたりしたの。……さうしたらヤングも一緒に笑ひながら、妾をお人形さうのやうに抱き上げて此の室へ逃げ込んだと思ふと、妾の内ポケットから鍵を取り上げて扉をピツタリと掛けてしまつたの。……その素早かつた事……でも其の時は、妾が店に突き出されてから、まだやつと二日目位だつたし、男つてどんなものか知らない位だつたもんだからホントウにビツクリしてしまつて、一生懸命ヤングの軍服の胸に獅噛み付いてゐたわ。だけどヤングは、此の室で二人切りになると、トテモ親切に妾を慰めて呉れたのよ。落魄男爵の娘からこんなレストランの踊り子にかはつた妾の身の上話を、シンカラ同情して聞いてくれたり、お料理やお菓子を取つたり、お酒をいくらでも飲んでくれたり、お金を持つてゐるだけみんな置いて行つて呉れたりしたので、妾ホントウに嬉しかつたわ。それはみんな亞米利加の貨幣だつたけど主人は大ニコ／＼で私の頭を撫で、

「大手柄／＼……彼のお客を一生懸命で大切にしろ……」

それからヤングは毎晩のやうに妾の處へ遣つて来たの。さうして妾とだん／＼仲よしになつて来ると、いろんな事を妾に教へ初めたの。亞米利加の言葉だの、ABCの讀み方だの、キツスの送り方だの……誕生日の話だの……花言葉だの……だけど、その中でも一等面白くて怖かつたの







いんですつてさあ。亞米利加の男や女に獨身生活者が多いのは、そんな遊びのステキな氣持ちよさを知つてゐるからで、そんな人達に、方々から誘拐して來た美しい男や女を當てがつて、いろんなステキな遊びをさせる俱樂部だのホテルだの云ふものが、大きな街に行くとキツト何處かに在るんですつてさあ……つまり金さへあればドンナ事でも出来るのが亞米利加の風だつて云ふのよ。だから戀愛の天國つて云へば、今の世界中で亞米利加よりほかに無いつてヤングは自慢してゐたわ。

……でもね……その中でたつた一つドンナお金持ちでも滅多に出来ない。一番ステキな、一番贅澤な、取つとぎの遊びがあるつて云ふのよ。ねえ……面白いでせう……それはねえ。今云つたやうにお金づくで出来るいろんな素敵な遊びにも飽きてしまつて、どうにもかうにも仕様がなくなつた人の中の一人か二人かやつて見たくなる、ステキなく、此上も無い無鐵砲な遊びで、それこそホントにお金づくでは出来ない生命がけの愉快な遊びなんですつてさあ……さう云つたらあんたはわかるでせう。其の遊び方が……え……わからないつて……まあ……

……だつて其の遊びの本家本元は日本だつてヤングはさう云つたのよ。世界中のどこにも無くて日本にだけ昔から流行つてゐるのを、此頃亞米利加の學者たちが大騒ぎをして研究を始めてゐるので、トテモ有名な遊びなんですとさあ……さう云つてもわからない？……まあ……ぢやもつと云つて見ませうか。

ヤングは左様云つたのよ。日本の藝術つてものは何でもかんでも世界中の藝術の一番いゝ處ばかりを一粒選りにして集めたものなんですつてさあ……イ、エ。オベツカぢや無いのよ。ヤングが左様云つてゐたんだから……妾なんかは解からないけど……だから日本では戀愛の遊びだつて、ほかの色んな遊びの仕方は、もうすっかり流行り廢つてゐる代りに、その一番ステキなのがタツタ一つだけ、今でも残つてゐるんですつて。一つは日本人はお金をそんなに持たないから、ほかのお金のかゝるのはみんな諦めてしまつて、その一番ステキなだけで満足してゐるのかも知れないつて云ふのよ。それを此頃になつて亞米利加の學者たちが八釜しく云つて研究してゐるけども、それはたゞ學問の研究だけで、本當にやつて見ようなんて云ふ度胸のある人間は、まだ一人も亞米利加に出て來ないんですつてさあ……そんなステキな遊びが日本に在るのをあんた知らない……マア……そんな筈は無いわ。ヤングは學者だから嘘なんか吐きやしないわよ。あんたは知つてゐるけど氣が付かないでゐるのよ。日本ではそんなに珍らしくないから……

……エ？……その遊びの名前でつて……それを妾スツカリ忘れちやつたのよ。イ、エ本當よ……今に思ひ出すかも知れないけど……おぼえてゐるのは其の遊びの仕方だけよ。それあとテモ素敵な氣持ちのいゝ遊び方で、聞いた丈けでも胸がドキドキする位よ。何でも亞米利加の言葉で云ふと「戀愛遊びの行き詰まり」つて云つたやうな意味だつたわよ。日本の言葉で云ふと、もつと短かい名前だつたやうだけど……え？……その遊びの仕方を云つてみるつて？……厭々……



それは妾わざつと話さないで置くわ。あんたが思ひ出さなければ丁度いゝからね。おしまひの樂しみに取つとくわよ。……えゝ……今夜は妾はトテモ意地悪よ。ホ、ハ、ハ、ハ。

……でも、そんな話を初めて聞いた時には、妾もうビツクリしちやつて髪の毛をシツカリと掴みながらブル／＼慄へて聞いてゐたやうよ。その頃の妾は今よりもズツと初心だつたもんですからね……そんな話を平氣でし／＼、青い顔をしてお酒を飲んでゐるヤングの軍服姿が、だん／＼恐ろしいものに見えて来て、今にも妾を殺すのぢや無いか知らんと思ひ／＼、その高い薄つぺらな鼻や、その兩脇に凹んでゐる空色の眼や、綺麗に眞中から分けた栗色の髪の毛を見つめてゐたやうよ。何だか悪魔と話してゐるやうな氣かしてね……。

だけど、そのうちにヤングから、そんな遊びの仕方、一番やさしいのから先にして一つ／＼に教はつて行くうちに、妾はもう怖くも何ともなくなつてしまつたのよ。……ええ……それ本當の事はどうせ亞米利加の本場に行つて、色んな藥や器械を使はなくちや出来ないのが多かつたし、一番ステキな日本式の遊びや、そのほかの生命がけの遊びは相手が無いから只眞似方と話だけで済ましたの。妾の身體に傷が残るやうなものも店の主人に見つかると大變だから、ヤングと一緒に亞米利加に行つて結婚式を擧げてからの樂しみに取つといたけど、ほかのは大抵卒業しちやつたのよ。……それも初めのうちは、妾がヤングからいぢめられる役で、首をもうすこしで死ぬ

とこまで絞められたり、縛つて宙釣りにされたり、髪の毛だけで吊るされたりして、とても我慢出来ない位、苦しかつたり痛かつたりしたのよ。だけど其のうちにだん／＼慣れて來たら、其の痛いのが苦しいのが眼のまはるほどよくなつて來てね……妾があんまり嬉し／＼にして涙をポロポロ流したりするもんだから、おしまひにはヤングの方が羨ましがつて、いつも持つてゐる小さな鞭を妾に持たして、それで自分の背中を思ひ切り打つて呉れつて云ひ出した位よ。

えゝ……妾思ひ切り打つて遣つたわ。ヤングなら背中に鞭の痕が付いてゐても誰も氣付かないでせうし、妾も自分でいぢめられる氣持ちよさを知つてゐたんですからね……イ、エ。音なんかいくら聞こえたつて大丈夫よ。妾ヤングから教はつた通りに暢氣さうに流行歌を唄ひながら、その調子に合はせて打つてゐたから、外から聞いたつて何かほかのものをたゞいてゐるとしか思へなかつた筈よ。……でも、さうして寢臺の上に長くなつてゐるヤングの脂切つた大きな背中を、小さな革の鞭で力一パイにたゞいてゐる間の氣持ちのよかつたこと……打てば打つほどヤングが可愛くなつて來てね……さうしてもうヤングと一緒に亞米利加へ行つたら、そんな遊びが本式に大ビラで出來ると思ふと、樂しみで／＼たまらなくなつちやつたの。だから……妾は毎晩そんな遊びをする時間をすこしづつ割いて、ヤングを先生にして一生懸命に亞米利加の言葉を勉強し續けたのよ。

妾は言葉を覚えるのが名人なんですつてさあ。ヤングがビツクリしてゐた位よ。ヤングとこん



な話が出来るやうになる迄では一と月とかゝらなかつたし、水兵さん達と悪態のつきつこをする位の事なら初めつから譯なかつたわ。おしまひにはヤングがよくポケットに入れて持つて来る英字新聞が、すこしづつ讀めるやうになつたから豪いでせう。自分の國の字など聖書もロクに讀めないのによ。ホ、、、。だつて妾の兩親はトテモ貧乏で妾を學校に遣る事が出来なかつたんですもの……お化粧の道具なんかも、兩親から買つて貰つた事は一度も無かつたのよ。だけど此時ばかりは學者の奥さんになるのだからと思つて、ずつと前から欲しくてたまらなかつた型の小さい上品なものを別に買つて、バスケットの底に仕舞つて置いたわ。えゝ。それ嬉しかつたわよ。だつてどうせ兩親に賣り飛ばされて、こんな酒場の踊り子になつてゐる身の上ですもの……おまけに生れて初めて妾を可愛がつてくれて、色んな樂しみを教へてくれたのが、そのヤングなんですもの……その頃の妾は今みたいなオシャベリの女ぢや無かつてよ。どんな男を見ても怖ろしくて氣味がわるくて、思ふやうに口も利けない中に、たつた一人そのヤングだけが怖くなつたんですもの……アラ……御免なさいね。泪なんか出して……妾……男の方の前で、こんな事を云つて泣くのは今夜が初めてよ。ネ……笑はないでね。

さうしたら……さうしたらね、ちやうどあと月だから十月の末の事よ。ヤングが何時になく情氣た顔をして這入つて来て此の室で妾と差し向ひになると、何杯もくお酒を飲んだあげくにシ

ヨボくした眼偷きをしながら、こんな事を云ひ出したの……

「可愛いくワニーヤさん。私はいよくあなたとお別れしなければならぬ時が来ました。あなたを亞米利加へ連れて行く事も思ひ切らなければならぬ時が来ました。私は明日の朝早く、船と一緒に浦鹽を引き上げて布哇の方へ行かなければなりません。さうして日本と戦争を始めなければなりません。さうなつたら私は戦死をするかも知れないし、あなたを連れて行く譯にも行かなくなりました。昨夜不意打ちに本國から秘密の命令が来たので、どうする事も出来ないのです。……しかし若しも戦争が済むまで私が死なないで居たらキツト貴女を連れに來ます。ですから何卒今度ばかりは諦めて下さい」

……つて……さう云つてゐるうちにポケットからお金をドツサリ詰めた革袋を出して、妾の手に握らせたの。

妾その革袋を床の上にたゞき付けて泣いちやつたわ。

「そんな事は嘘だ」

つて云つてね。それあ日本が亞米利加と戦争を初めさうだつて云ふ事は、ズツ前から聞いてゐるにはゐたけれども、ヤングの話はあんまりダシヌケ過ぎて、どうしても本當とは思へなかつたんですもの。だから

「あんたは妾を捨てゝ行かうとするのだ。何でもいゝから妾はあんたを離れない。一緒に軍艦に



乗つて行く」

……つて云つて死ぬ程泣いてくくくく何と云つても聴かなかつたの。しまひには首ツ玉に獅噛み付いて、片手で軍服のポケットをシツカリ掴んで離さなかつたの……。

ヤングは本當に困つてゐたやうよ。軍服の肩の處に顔を當て、ヒイ／＼泣きじやくつてゐる妾を膝の上に抱き上げたまゝ暫らアクヂツとしてゐたやうよ。けれども其のうちにフィツと何か思出したやうに私の顔を押し離すと、私の眼をキツト睨まへながら、今までと丸で違つた低い聲で「ワーニヤさん。いゝ事がある。」

つて云つたの。妾はその時、何だかわからないまゝドキンとして泣き止みながらヤングの顔を見上げた時、ヤングは青白／＼イ氣味の悪い顔になつて、私の眼をヂー／＼と覗き込みながらソロ／＼と口を利き出したのよ。前とおんなじ低い聲でね……。

「ワーニヤさん。いゝ事がある。貴女がそれ程までに私の事を思つてくれるのなら、一つ思ひ切つた事を遣つて来てくれませんか。私が今から海岸の倉庫へ行つて大きな麻の袋を取つて來ますから、その中へ這入つて呉れませんか。毛布を身體に巻きつけて置けば人間だか荷物だかわからないし、寒くも無いだらうと思ひますから、さうして私の荷物に化けて軍艦に來て物置の中に轉がつかめてくれませんか。さうすれば、そのうちに私がうまく父親の司令官に話して、貴女を士官候補生の妾にして私の化粧室に住まはせて上げますから……その話が出来るまで三度三度の喰

べ物は、私が自分で持つて行つて上げます。随分窮屈で辛いでせうけれども暫くの間と思ひますから辛棒して呉れませんか」

……つて……ネエあんたどう思つて……トテモ、ステキな思ひ付きぢや無いの……イ、エ、ヤングは本氣でさう云つて居たのよ。妾を欺してゐたんぢや無いの。もうすこし先までお話しするとわかるわ……え、今話すわよ。話すからもう一杯飲んで頂戴……曹達を割つて上げるからね……

妾、この話を聞くと手をタ、イて喜んでやつたわ。だつて今までに活動や何かで見たり聞いた「戀の冒險」の中のどれよりもズット素敵ぢや無いの。女の兒が支那米の袋に這入つて、軍艦に乗つて戦争を見物に行くなんて……ねえ……妾あんまり嬉しかつたもんだから思ひ切りヤングに飛び付いて遣つたわ。さうして無茶苦茶にキスして遣つたわ。

ヤングも嬉しさうだつたわよ。今までになく大きな聲を出して歌を唄つたりしてね。さうして妾に

「……それではドツサリお酒を飲みながら待つてゐて下さい。今夜は特別に寒いやうだから袋の中で風邪を引かないやうにね。私はこれから袋を取りに行つて來ますから」

つて左様云ふうちに帽子を冠つて外套を着て何處かへ出て行つてしまつたの。妾、そんな時に一寸心配しちやつたわ。ヤングが其のまんま逃げて行つたのぢや無いかと思つ



てね……だけどそれは餘計な心配だったのよ。ヤングは間もなくニコ／＼笑ひながら歸つて来て  
妾の顔を見ると

「……お、寒い／＼……一寸その呼鈴を押して主人を呼んで呉れませんか」

つて云つたの。妾、ヤングの足があんまり早いのでビツクリしちやつてね。

「まあ……今の間にもう海岸まで行つて来たの……さうして袋はどこに持つて来たの……」

つて聞いたらヤングは唇に指を當て、青い眼をグル／＼まはしながら妙な笑ひ方をしたの。

「シツ……黙つてゐらつしやい……近所の支那人に頼んで外に隠して置いたのです。今にわかり  
ますから……」

つてね……さう云ふうちに主人が這入つて来たたら、ヤングはいつもの通り其の晩妾を買ひ切り  
にして、お料理やお酒をドン／＼運び込ませて、妾に思ひ切り詰め込ましたのよ……途中でお  
腹が空かないやうにね……さうして主人にはドツサリチップを呉れて、面喰つてピヨ／＼して  
ゐる禿頭を扉の外へ閉め出すとピツタリと鍵をかけながら

「明日の朝十時に起してくれエツ」

……で大きな聲で怒鳴つたの。さうして置いて妾の手をシツカリと握つたヤングは、あの窓を  
指さしながらニヤ／＼笑ひ出したのよ……

妾ヤングの憐憫なのに感心しちやつたわ。あの窓は其時までもつと大きな二重硝子になつてゐ

て、その向ふにはあんな鐵網の代りに鐵の棒が五本ばかり並んでゐただけど、その硝子窓を外  
して、鐵の棒のまん中へ寢臺のシーツを輪にして引つけて、その輪の中へ突込んだ椅子の脚を  
壁のふちへ引つかけながら、二人がかりでゲイ／＼と引つぱると一本一本にみんな抜けちやつた  
の。……え、……電燈を消してゐたんだから外から見つてわかりやしないわ。……その穴から  
ヤングが先に脱け出して、あとから這ひ出した私を抱へ卸してくれたの。

それは浦鹽附近に初めて雪の降つた晩で、あの屋根の白い斑雪も其時に積んだまんまなのよ。

風は無かつたやうだけど星がキラ／＼してゐてね……その横路地に白い舞踏服姿の妾が、寢臺か  
ら取つて来た白い毛布にくるまつてガタ／＼に寒くなりながら立つてゐると、ヤングは大急ぎで  
向家の横路地の間から隠して置いた支那米の袋を持つて来て私の頭の上からスポリと冠せてくれ  
たの。さうして其のまんま地べたの上のソツと寝かして、足の處をシツカリとハンカチで結へる  
とヤットコサと荷ぎ上げながら、低い聲でこんな事を云つて聞かせたのよ。

「さあ……ワーニヤさんいゝですか。暫くの間辛いでせうけども辛棒してゐて下さい。私がもう  
宜しいつて云ふまでは、決して口を利いたり聲を立てたりしてはいけませんよ」

つてね……。だけど妾は、その袋があんまり小さくて窮屈なのでビツクリしちやつたわ。妾の  
身體は随分小さいんだけど、それでも足を出来るだけグツと縮めなければ袋の口が結ばらないの  
ですもの。おまけに其の臭かつたこと……停車場のはかりみたい臭ひがしてね。ホコリ臭く



て、息が詰まりさうで、何遍もく／＼咳が出さうになるのをヂツと我慢してゐるのがホントに苦しかつたわ。

それから何處を通つて行つたのかよくわからないけれど、何でも此のスイツランスカヤから横路地傳ひに公園の横へ出て、公使館の近くを抜けながら海岸通りへ出たやうなの。途中で下腹や腰のところやヤングの肩で押へられて痛くてしやうが無かつたけど、やつとの思ひで我慢してゐたわ。えゝ。それあ怖かつたわ。ヤングが時々立ち止まるたんびに誰か来たのぢや無いかと思つてね……。

海岸に来るとヤングは其處に繋いであつた小さい舟に乗り込んで、妾をソツと底の方へ寝かして、その上に跨がつて自分で擡を動かして始めたやうなの……そこいらはまだ暗くて、波の音がタラリ／＼として、粗い袋の目から山の手の燈火がチリ／＼と見えてね……妾は息が苦しいのも、背中が痛いのも、それから足を伸ばし度くてたまらないのも忘れて、時々聞える汽笛の音に耳を濟ましながら胸をドキ／＼させてゐたわ。これが故郷のお別れと思つてね……さうかと思ふと亞米利加の町をヤングと連れ立つて散歩してゐる自分の姿を考へたり……ヤングと妾の幸福の爲めにイ、コン様にお祈りを捧げながら、ソツと小さな十字架を切つたりしてゐたわ。

さうすると間もなく今までと丸で違つた波の音が聞え出して、小舟が軍艦に横付けになつたやうなの。其の時に妾は又ドキンとして荷物の積りで小さくなつてゐると、此方からまだ何も云は

ないのに上の方から男の足音が二人ほど、待つてゐたやうにゴト／＼と音を立て、降りて來たの。さうして其の中の一人が低い聲で

「へ、へ、へ。今までお楽しみで……」

つて云ひかけたらヤングが同じやうに低い聲で

「シツ。相手は通じるんだぞ……英語が」

つて叱つたやうよ。さうすると二人ともクツ／＼笑ひながら黙り込んで、妾の袋をドッコイシヨと小舟の中から抱へ上げたの。

其の時に妾はチョット變に思はないぢや無かつたわ。何だか解らないけどその二人の男の抱へ方が、袋の中に生きた人間が居るつて事をチャンと知つてゐるとしか思へなかつたんですもの。一人は妾の肩の處を……それから、もう一人は腰の處を痛くないやうにソツとネ……ただこれれは大方ヤングが今の間に手眞似か何かで打ち合はせたのかも知れないと思つてゐるうちに、一度階段を降り切つた二人の足音は又、別の段々を降り始めて、今度は波の音も何も聞えない、處處に電燈のついた急な階段を二ツばかり降りて行つたの。

其の時にヤングはもう何處かへ行つてゐたやうよ。……いゝえ船の中はシンとしてゐたけど、何時ヤングが消えてしまつたのか解らなかつたわ……まあさう……出帆前つてそんなに忙がしいものなの……ぢや矢つ張りあんたの云ふやうに、あの軍艦はずつと前から出發の準備をして命令



が来るのを待つてゐたんだわ。ね……さうでせう……ヤングが出帆の日を知らなかつたのは無理も無いわ。さうして本當に日本と戦争をする氣で出て行つただけで、途中で日本が怖くなつたから止しちやつたんでせう。……アラ……どうしてそんなに失笑すの……。

「イ、エ、あんたがいくら笑つたつて左様に違ひ無いわよ。だつてヤングはおしまひまで一度も嘘を吐いた事なんぞ無かつたんですもの。妾がヤングに欺されてゐるやうに思ふのはソレアあんなの嫉妬よ……まあいゝから黙つてお酒を飲みながら聞いてゐらつしやい。あんたの氣もちはおくわかつてゐるんだから。もつとおしまひまで聞いて行くうちには、ヤングが云つた事が本當か嘘かわかるから……ね……。

……さうしたらね……

さうしたら、あとに残つて妾を抱へてゐる二人の足音が又一つ急な段々を降りて行くと、どこか遠い處に黄色い電燈がたつた一つ點つてゐる、暗い、板張りらしい處に來たの。それと一緒に二人の男はイキナリ妾を固い床の上にドシンと放り出したもんだから妾は思はず聲を立てる處だつたわ。だけど又それと一緒に、これは何處か近い處に人間が居るからで、妾を荷物と見せかける爲めにわざとコンナ亂暴な眞似をしたのに違ひ無いと氣が付いたの。それでやつと我慢して放り出されたなりにヂットしてゐたら、其のうちに誰も居なくなつたのでせう。二人の男は大きな聲で話をしいくユツクリユツクリと室を出て行つたの。

「アハ、、、。もう大丈夫だ。泣かうが喚かうが」

「ハ、、、。しかしヤングの智恵には驚いちやつたナ。露西亞の娘つ子なんて、コンナ正直なもんだと思はなかつたよ」

「ウーム。こんな素晴らしい思ひ付きは彼奴の頭でなくちや出て來つこねえ。何しろ革命から後つてもものあ何處の店でも摺れつ枯らしを追ひ出して、いゝとこのお嬢さんばかりを仕入れたつて云ふからな……其處を睨んだのがヤングの智恵よ」

「成る程ナア……ところで其のヤングは何處へ行きやがつたんだらう」

「おやぢん處へ談判に行つたんだらう。生きたオモチヤをチツトばかり持込んでいゝかつてよ」

「……ウーム。しかしなア……おやぢがうまくウンと云へあ良いが……」

「それあ大丈夫よ。それ位の智恵なら俺だつて持つてゐる。つまり時間が來るまでは他の話で釣つといて、艦の中を見まはらせねえやうにしとくんた。さうしてイヨ／＼動き出してから談判を始めせえすれあ十が十まで此方のもんぢやねえか。……まさか引つ返す譯にも行くめえしさ」

「ウーム。ナルホド。下手を間誤付けあ、良い恥晒しになるつてえ譯だな」

「ウン……それにおやぢだつて萬更ぢやねえんだかんナ……ヤングは其處を睨んでゐるんだよ」

「アハ、、、違えねえ。豪えもんだなヤングつて奴は……」

「アハ、、、」



「イヒ、、、、、」

……妾こんな話をきいてゐるうちにハッキリと意味はわからないまゝ、もうスツカリ大丈夫なやうな氣になつて、グーグー睡つてしまつたのよ。

えゝ……それあ大膽と云へば大膽なやうなものよ。だけどその時の妾はもう大膽にも何にも仕様の無い位へトくに疲れてゐたんですもの。最前からオブラーコで飲んだお酒の酔ひと、今まで苦しいのを我慢してゐた疲勞が一時に出ちやつて、何時軍艦が出帆の笛を吹いたか知らないまゝに睡つてゐたわ。

だけど、さうして眼が醒めてからの苦しくて情なかつた事……軍艦の器械のゴツトン／＼といふ響きが身體に傳はるたんびに毛布ごしに床板に押しつけられてゐる背中と、腰骨と、曲つたまゝの膝つ節とが、まるで火が付いたやうに痛むぢや無いの。妾はもう……早くヤングが来て呉れ、ばいゝ。さうしたら水か何か一パイ飲まして貰はなくちや、咽喉がかわいて死ぬかも知れない。さうしてモット大きな袋に入れて貰はなくちや……と、そればかり考へてゐたわ。さうして人にわからない様に少しづつ寝がへりをしかけてゐると、不意に頭の上で誰か口を利き出したので、妾は又ハツとして龜の子のやうに小さくなつてしまつたの……それは何でも三四人の男の聲で、妾のすぐ傍に突立つて、先刻から何か話してゐたらしいの……。

「まだルスキー島はまはらねえかな」

「ナニもう外海よ」

「……ワン。ツ。スリー。フォー。フオーア……サアテン。フオテン……おやア……一つ足りねえぞこりやア……フオテン。フキフテン。シツクステン……と……あつ。足下に在りやがった。締めて十七か……ヤレ／＼……」

「……様と一緒に天國までも……つて連中ばかりだ」

「惜しいもんだなあ……ホントニ……おやぢせえウンと云へあ、布哇へ着くまで散々ばら蹴たふせるのになア」

「馬鹿野郎。布哇クンダリまで持つて行けるか。萬一見つかつて世界中の新聞に出たらどうする」

「ナアニ。頭を切らして候補生の風をさせとけあ大丈夫だつて、ヤングがさう云つてたぢや無えか」

「駄目だよ。浦鹽の一粒選りを十七人も並べれあ、どんな盲目だつて看破つちまはア」

「それにしても惜しいもんだナ。せめて比律賓までも許して呉れるとなア」

「ハ、ハ、まだあんな事を云つてやがる。……そんなに惜しけあ、みんな袋ごと呉れて遣るから手前一人で片づけろ。割り前は遣らねえから」

「ブル／＼御免だ／＼」



「ハ、見やがれ……すけべえ野郎……」  
 そんな事を云ひ合つてゐるうちに一人がマッチを擦つて葉巻に火を點けたやうなの。間もなく美しい匂ひがブン／＼して来たから……。

「だけど妾は其のほひを喫くと一緒に頭の中がシーンとしちやつたの。身體が石みたやうに固くなつて息も吐けない位になつちやつたの。……だつて妾みたやうにして此の軍艦に連れ込まれた者は、妾一人ぢや無いことが、その時にやつとわかりかけて来たんですもの……。妾のまはりにはまだいくつも支那米の袋が轉がつてゐるらしいんですもの……。おまけに、それをどうかしに來たらしい荒くれ男が三四人、平氣で冗談を云ひ合ひながら葉巻を吹かしてゐるぢや無いの……あんまり恐ろしい不思議な事なので、妾はあと先を考へる事も何も出来なかつたわ。たゞ眼をまん丸に見開いて鼻つ先に被さつてゐる袋の粗い目を凝視ながら、兩方のお乳を痛いほどギョツと擱んでゐたわ……夢ぢや無いかしらと思つて……」

でも、それは夢ぢや無かつたの……さうして齒を喰ひ締めて？一心に耳を澄ましてゐると、ゴツトン／＼といふ器械の音の切れ目／＼にド、——ン／＼つて云ふ浪の音が、何處からか響いて來るぢや無いの。……え、……おほかた外の女達も妾とおんなじにビツクリして小さくなつてゐたんでせう。話聲をする音も聞えない位シンとしてゐたやうよ。

さうしたら又その中に、その葉巻を持つてゐるらしい男が一としきりスバ／＼と音を立て、吸

ひ立てながら、こんな事を云ひ出したの。

「待て／＼。片づける前に一ツ宣告をして遣らうぢやねえか。あんまり勿體無えから」

「バカ……止せつたら……一文にもならねえ事を……」

「インニヤ。此の儘片づけるのも藝の無え話だかんナ……エヘン」

「止せつたらヂツク……そんな事をしたら化けて出るぞ」

「ハ、ハ、……化けて出たら抱いて寝て遣らあ……何も話の種だ……エヘン／＼」

「止せつたら止せ……馬鹿だなあ貴様は……云つたつてわかるもんか」

「まあいゝから見ろつて事よ……これあ餘興だかんナ……俺の云ふ事が通じるか通じないか……」

……  
 つて云ふうちに、そのヂツクつて男は、又一つ咳拂ひをしながらハツキリした露西亞語で演説みために喋舌り出したの。

「エヘン……袋の中の別嬪さんたち。よく耳の垢をほじくつて聞いておくんなハイよ。いゝかね。……お前さん達はみんな情人と一緒になり度さに、こんな姿に化けて此處へ擔ぎ込まれて來たんだらう。又……お前さん達の情人も、おんなじ了簡でお前さん達を此處まで連れて來たんで、決して悪氣ぢや無かつたんだらうが、残念な事には、それが出来なくなつちやつたんだ。いゝかい……だからね。……エヘン……だから怨むならばだ……いゝかい……怨むならば、お前さ



ん達の情人にこんなステキな智慧を授けた、ヤングと云ふ豪い人を怨まなくちやいけないんだよ。……それからもう一人……この艦に乗つてゐる俺たちの司令官を怨みたけあ怨むがいよつてんだ。……イヤ……事によると、その司令官だけを怨むのが本筋かも知れないがね……どつちにしてもお前さん達のいゝ人や、そんな連中に頼まれた俺達を怨んぢやいけないよ。いゝかい……と云ふ譯はかうなんだ。先刻ヤングさんが司令官に、お前さん達を亞米利加まで連れてつていゝかつて伺ひを立てゝみたら、亞米利加の軍艦の中には食料品より以外に肉類を一切置いぢやイケナイつてえ規則になつてゐるんだッさあ……だからね……折角此處まで來てゐるのをホントにお氣の毒でしやうが無いけど、ちやうど風も追ひ手のやうだから、お前さん達は其の袋のまま、海を泳いで浦鹽の方へ……」

こゝまで其の男が饒舌つて來たらあとは聞えなくなつちやつたの。だつて妾のまはりに轉かつてゐる十いくつの袋の中から千切れるやうな金切聲が一どきに飛び出して、ドタンバタンとノタ打ちまはる音がし始めたんですもの。中には聞いたやうな聲がいくつもあつたやうだけど、そんな時に誰が誰だかわかりやしないわ。たゞ耳が潰れるほどキー／＼ピーピー云ふだけですもの。だけど私は黙つてゐたの。聲を出すより先にどうかして袋を破いてやらうと思つて一生懸命に藻掻いてゐたの。だけど袋が小さい上にトモ丈夫に出來てゐるので噛み付かうにも噛み付けなしいし、カーバイ足を踏ん張ると首の骨が折れさうになるし、その苦しさをさつたら無かつたわ。だけ

ど、それでも生命がけの思ひで、力のありつたけ出して藻掻いてゐるうちに、妾のまはりの叫び聲が一ツ／＼に擔ぎ上げられて、四ツか五ツ宛行列を立てながら階段を昇りはじめたの。その時にはチョットの間みんなの叫び聲は止んだやうだけど、その階段の音が聞えなくなると又、前よりも非道い泣き聲や金切聲がゴチャ／＼に聞え始めたの。めい／＼に男の名を呼んでヒイヒイ泣いてゐたやうよ。

だけど妾はそれでも泣かなかつたの。さうして死に物狂ひになつて、両手で頭をしつかりと抱へながら、足の處の結び目を何度も何度も蹴つたり踏んだりしてゐたら、身體中が汗みどろになつて、髪の毛が顔中に粘り付いて、眼も口も開けられなくなつてしまつたの。その中に袋の中は湯氣が一パイ詰まつたやうに息苦しくなつて來るし、髪の毛は顔から二の腕まで絡まつて、動いたんびにチク／＼抜けて行くし、おまけに着物と毛布が胸の上の處でゴチャ／＼になつて袋の中一パイにコダワリながら、お乳を上へ／＼と押し上げるので、その苦しさをさつたら……もう死ぬか／＼と思つた位よ。さうして其のうちに……御覽なさい。この臂の處が兩方ともこんなに肉が出てピカピカ光つてゐるでせう。この臂はヤングが「猫の臂」つて名をつけて紐 育婦人の臂くらべに出すつて云つて居たくらゐる柔らかくてスナナリしてゐたのが、知らないうちに擦り破れてしまつて、動いたんびにヒリ／＼と痛み出して來たんですもの。……それに氣が付くと妾はもう、スツカリ力が抜けてしまつて、意地にも張りにも動けなくなつたやうよ……兩方の臂を抱へてグツ



タリとなつたまゝ、呼吸ばかりセイ／＼切らしてゐたやうよ。  
そのうちに又、上の方から四五人の足音が聞えて來ると、みんなの叫び聲がまたピツタリとなつちやつたの。それに連れて降りて來る男たちの話聲がよく聞えたのよ。器械の音とゴツチャになつたまゝ……。

「アハ、ハ、ハ、非道な眼に會つちやつたナ。あとでいくらかヤングに増して貰へ」

「ヂツクの野郎が餘計な宣告を饒舌るもんだから見ろ……こんな血が出て來た」

「ハ、ハ、ハ、恐ろしいもんだナ。袋の中から耳朶を喰ひ切るなんて……」

「俺あ小便を引つけられた。コレ……」

「ウワー……。あれあスチューワードが持ち込んだ肥つちよの娘だらう。彼奴の鞭で結へてあつたから……」

「ウン。あのパン屋のソニーさんよ。おかげで高價な錢を拂つたルバシカが臺なした。とても五弗ちや合はねえ」

「まあさうコボスなよ。女の小便なら縁喜が宜いかも知れねえ」

「ワハ、ハ、ハ、」

……だつてさあ……こんな事を云ひ合つて暢氣さうに笑ひながら、その男たちは又四ツばかり叫び聲を擔ぎ上げたの。

「サア溫柔しく……。あばれると高い處から取り落しますよ。落ちたら眼の玉が飛び出しますよ」

「小便なんぞ引つかけないやうに願ひますよだ。ハ、ハ、ハ、ハ、」

「ドッコイ／＼……どうでえこの腹部のヤロ／＼ふつくりとした事は……トテモ千金こてえられねえや」

「アイテツ。其處は耳朶ぢやねえつたら……アチ、ハ、ハ……コン畜生……」

「ハ、ハ、ハ、其處へ腦天を打つけねえ。其の方が早えや……」

「アイテテ……又やりやがつたな……畜生ツ……かうだぞ……」

つて云ふうちに……ギヤ／＼と云ふ聲が室中にビリ／＼する位響いて來たの。  
その聲を聞くと妾は又夢中になつてしまつて、身體中にあり丈けの力を出しながら床の上を轉がり始めたの。さうして出來るだけ電燈の光りの見えない方へ盲目探りに轉かつて行つて、何かの影を探して隠れよう／＼としてゐたの。さうすると今度は男たちの靴の音が離れ／＼になつて、一人か二人宛あとになつたり先になつたりしながら——次から次に擔ぎ上げて行くうちに、たうとう室の中の叫び聲が一ツも聞こえなくなつてしまつたのよ。たゞ軍艦の動く響きと、微か



な波の音ばかり……人間のゐるらしい音は全く無くなつてしまつてね……。  
 その時に私はやつと、すこしばかり溜息をして氣を落ちつけたやうよ。妾の袋はキツト何かの影になつて見えなくなつてゐるのに違ひ無いと思ひく、顔中にまつはつてゐる髪の毛を掻き除けながら、なほも、ヂツと耳を澄ましてゐたやうよ。

さうすると、それから暫く経つて、もうみんな何處かへ行つてしまつたと思ふ頃、今度はたつた一人の重たい、釘だらけの靴の音が……ゴトーン、ゴトーンと階段を降りて來たの。さうして室のまん中に立ち止まつて其處いらをヂーイと見まはしながら突立つてゐるやうなの、

……その時の怖かつたこと……今までの怖さの何層倍だつたか知れないわ……妾の壽命はキツトあの時に十年位縮まつたに違ひ無いわよ。……もう思ひ切り小さくなつて、何時までもく息を殺してゐると、そこいら中があんまり静かなのと氣味がわるいので頭がキン／＼痛み出して、胸がムカ／＼して吐きさうになつて來たの。それを我慢しよう／＼と藻掻いてゐた爲めに身體ちうが又、冷汗でビッシヨリになつてしまつたの。

さうすると、もう何處かへ行つたのか知らんと思つてゐた其の男が馬鹿みたいにノロ／＼した變テコな胸間聲で口を利き出したの。

「……どうしても一ツ足りねえと思ふんだがナア……みんなは、おらが三人擔いだといふけど、おらあ二遍しけあ階子段を昇らねえんだがなあ……」

その聲と言葉付きを聞いた時に妾は又、髪の毛が一本一本馳け出したやうに思つたわ。齒の根がガク／＼鳴り出して、手足がブル／＼動き出すのをどうする事も出来なかつたわ……だつて其の聲つて云ふのは、ずつと前に一度オブラーコの酒場へ遊びに來て、散々バラ水兵たちにオモチヤにされて外に突き出された大きな嫌らしい黒ん坊の聲だつたんですもの。……その時にその黒ん坊が恨めしさうな、もの凄いや眼付きで妾たちをふり返つた顔を袋の中でハッキリと思ひ出したんですもの……怖いにも何にも妾は生きた空が無くなつて、もうすこしで氣絶しさうになつた位よ。今にもゲーツと吐きさうになつてね。さうすると其の黒ん坊は

「どうしても無いんだナア……可笑しいナア……」

つて云ひながらマツチを擦つて煙草を吸ひ付け／＼出て行きさうに歩き出したの。……そんな時の嬉しかつたこと……妾は思はず手の甲に爪が喰ひ入る程力を籠めてイーコン様を拜んぢやつたわ。

……だけど矢つ張り駄目だつたの……階段の方へノロ／＼と歩いて行つた黒ん坊は間もなく奇妙な聲を立てながらバツタリと立ち止まつたの。

「イヨーツ。あんな處に隠れてら。フヘ、フヒ、フホ、フム……畜生々々」

と云ふなりツカ／＼と近づいて來て、妾の袋へシツカリと抱き付いちやつたの。……それと一緒に黄臭い煙草のほひと、何とも云へない黒ん坊のアノ甘つたるい體臭とがムウーと袋の中へ



流れ込んで来たやうなの。

妾、その時に、どんな風に暴れまはつたか、ちつとも記憶えてゐないのよ。……たゞ、ちつとも聲を立てなかつた事を記憶えてゐるだけよ。誰か加勢に来たら大變と思つてね。……だけど其の黒ん坊もウンともスンとも云はなかつたやうよ。おほかた一人で妾を何處かへ擔いで行つて、どうかしようと思つたのでせう。暴れまはる妾を何遍も抱へ上げかけては床の上に取り落し取り落ししたので、其のたんびに妾が氣が遠くなりかけたやうよ。

だけど、それでも妾は聲を立てなかつたの。さうしてヤツサモツサやつてゐるうちに、どうした拍子か袋の口が解けて、兩足が腰の處までスツボンと外へ脱け出した事がわかつたの……。

それに氣が付いた時に妾がどんなに勢よく暴れ出したか……アラ又……笑つちや嫌つて云ふのに……ソレ處ぢや無かつたわよ。ソンの時の妾は……何でもいゝから……足が折れても構はないから此の黒ん坊を蹴殺して、その間に袋から脱け出して遣らうと思つて、頭でも顔でも胸でも何處でも蹴つて……蹴飛ばして遣つたわ。……え……黒ん坊も一生懸命だつたやうよ。袋の上からシツカリと組み付いて来て、片つ方の手で妾の兩足を押へようとするのだけれども、妾の兩足を一緒に掴まへる事はなかく出来なかつた、片つ方だけ掴まへても妾が死に物狂ひで蹴飛ばしてやつたもんだから、しまひにはセイ／＼息を弾ませて、妾の足と掴み合ひ／＼しながら彼方へ轉がり、此方へ蹴飛ばされしてゐたやうよ。……だけど、そのうちに妾の着物と毛布が兩手と一緒に

にだん／＼上の方へ来て、息が出来ない位に切なくなつて来ると、黒ん坊はたうとう妾の兩足を掴まへて、足首の處を兩手でギューと握り締めちやつたの。

そんな時に妾は初めて、大きな聲を振り絞つたわ。兩手を顔に當て、力一パイ反りかへながら、「助けて／＼／＼。ヤンゲ／＼／＼」

つてね。え……それあ大きな聲だつたわよ。咽喉が破れる位叫んで遣つたんですもの。さうして兩足を押へられたまま、起き上つては反りかへり／＼して固い床板の上に頭をブツ付け始めたの。死んだ方がいいと思つてね。

さうしたら黒ん坊も其の勢ひに驚いて諦めめる氣になつたんでせう。

「……ウ、……そんなに死に度えのかナア……」

つて喘ぎ／＼云ひながら、私の兩足を掴んで床の上をズル／＼と片隅に引つばつて行くと思つたら、其處に置いてあつたらしい細い針金で足首の處から先にグル／＼／＼と巻き立て、胸の處まで袋ごしに締め付けてしまつたの……

その時の苦しさをしたら、それあ、とてもお話ししたつて解かりやしないわよ。だつてチヨットでも太い息をするか動くかすると、すぐに長い細い針金が双物みたいに喰ひ込んで、そこいら中の肉が切れて落ちさうになるんですの……それでゐて、いくら喘いでもく喘ぎ切れない位息が切れてゐるんですもの……妾はそのまゝ直ぐに氣が遠くなつちやつた位なの。だけどさ又すぐに



苦しき息を吹きかへすと又もや火の付いたやうに針金が喰ひ込むでせう。地獄の責め苦つてほんたうにあの事よ。さうして息も絶えぬにヒイ／＼云つてゐるうちに今度は本當に氣絶してしまつたらしいの。

それから何分経つたか、何時間経つたのかわからないけど、又自然と息を吹き返した時には、妾はもう半分死んだやうになつてゐたやうよ。手や足の痛さがわからなくなつてしまつてね。……さうして眼だけを大きく見開いて何處かを凝視してゐたやうよ。だから其の時に聞いた話も夢みたやうに切れ／＼にしか記憶えてゐないの。

「……どうでえ。綺麗な足ぢやねえか」

「ウーム。黒人の野郎、こいつをせしめようなんて職過ぎらあ」

「面が歪んだくれえ安いもんだ。ハ、ン」

「しかし、よつぽど手酷く暴れたんだな。あの好色野郎が、こんなにまで手古摺つたところを見ると……」

「フ、ン、勿體なくもオブラーコのワーニヤさんだかな」

「ウーム。十九だつてえのに惜しいもんだナア……コンナに暴れちやつちやヤングだつて隠しく譯に行くめえが……」

「……シート……来やがつた／＼……」

つて云ふうちに又一人、スバリ／＼と煙草を吹かしながら、軽い氣取つた足取りで階段を降りて来て、悠つくり／＼と妾の傍に近づいた者が居るの……

その足音を聞くと妾は氣もちが一ペンにシヤンとなつちやつたわ。飛び上り度い位嬉しくなつて……ヤング……つて叫ばうとしたのよ……

だけど妾が起き上らうとすると、手や足が、胸の處まで氷みたやうになつて動かなくなつてゐることがわかつたの。それと一緒に、聲がピツタリと咽喉に聞へてしまつて、名前を呼べる位ならまだしも、聲を立てる事すら出来なくなつてゐるぢやないの。何だかそんな夢でも見てゐるやうに胸の處が固ばつてしまつてね。若しかすると、あんまり怖い眼に會ひ續けたので氣が變になつてゐたのかも知れないけど……

さうするとヤングは長い／＼大きな溜め息を一つしてから、静かな猫撫で聲かと思ふくらゐ優しい口調で、こんなお説教を妾にして聞かせたの。上品な露西亞語でね……

「ワーニヤさん。溫柔しくしてゐて頂戴……。私は貴女が憎いからこんな事をするのぢやありません。よござんすか。よく氣を落ち着けて聞いて頂戴……。ね。私は貴女が可愛いくて／＼たまらない餘りにコンナ事をするのです。私は貴女が、あんまり綺麗で可愛いから、亞米利加の貴婦人と同じやうにして殺してみたくなつたのです。ね。いつぞやお話して上げた戀愛ごつこの事を



まだ記憶えてゐらつしやるでせう、ね、ね、わかつたでせう。……私も最早近いうちに日本と戦争をして戦死をするのです。ですからもう貴女以外の女の人と結婚する事は出来ないのです。貴女と一緒に天國に行くよりほかに楽しみは無くなつたのです。ですから満足して、私の云ふ事をきいて頂戴。ね、ね、溫柔しく私の云ふ通りになつて死んで頂戴。ね、ね……わかつたでせう。ね、ね……」

さう云ふうちにヤングは妾の足に捲かつた針金を解き始めたの。さうして胸の上までユツクリユツクリ解いてしまふと

「サア……。寒かつたでせうね」

つて云ひながら、又、もとの通りに袋を冠ぶせて口をシツカリ括つてしまつたの。

え……妾はちつとも手向ひなぞしなかつたわ。死人のやうにグツタリとなつて、ヤングのする通りになつてゐたわよ。

その時のヤングの聲の静かで悲しかつたこと……ほんの一寸の間だつたけど妾の胸にシミと融け込んで、妾に何もかも忘れさしてしまつたのよ。……何だか甘い、なつかしい夢でも見てゐるやうな氣もちになつてね……ネンネコ歌にあやされて眠つて行く赤ん坊みたやうに涙がとめ度なく出て来たもんだから、妾はたうとう聲を出してオイ／＼泣き出しちやつたの。

「……ヤング……ヤング……」

つて云つてね……さうするとヤングは一々丁寧に返事をしい／＼妾を袋に入れてしまつてから、今一度妾の頭の處を袋の上から撫でて呉れたわ。

「……ね……ね……わかつたでせうワイニヤさん。溫柔しくするんですよ。サア……。もう泣かないで……。いゝですか。ハイ／＼。私がヤングですよ。いゝですか。サ……泣かないで……」

さう云つて妾をピツタリと泣き止まして終ふと、静かに立ち上つて、這入つて来た時と同じやうに氣取つた足音を立てながら、悠々と階段を昇つて何處かへ行つてしまつたの。

だけど妾はやつぱり夢を見てゐるやうな氣持ちになつて、シヤクリ上げ／＼しながらグツタリとなつてゐたやうよ。さうするとあとに残つた三人の男たちは手ん手に妾の頭と、胴と、足を抱へて、上の方へ擔ぎ上げながら黙りこくつて階段を昇りはじめたの。そのゆつくり／＼した足音が静かな室の中にゴトーン／＼と響くのを聞きながら、妾は何だか教會の入口を這入つて行くやうな氣持ちになつてゐたやうよ。

だけど第一の階段を昇つてしまふと間もなく、一番先に立つて妾の足を抱へてゐた男が、變な聲でヒョツクリと唸り出したの。さうして何を云ふのかと思つてゐると

「ウーム。ウメエもんだナア。ヤングの畜生。あの手で引っかけやがるんだナア。何處へ行つても……」

つてサモ／＼感心したやうに云ふの。さうすると私の腰を擔いでゐた男も眞似をするやうに唸



り出したの。

「ウーム。まるで催眠術だな。一ペンで温順しくしちまやがつた」

さうすると又、妾の頭を擔いでゐた男が老人みたやうな咳をゴホン／＼としながら、こんな事を云つたの。

「十七人の娘の中で、ワーニヤさんだけだんべ……天國へ行けるのはナア」

「アーメンか……ハ、ハ、ハ、」

こんな事を云つてゐるうちに又二つばかり階段を昇ると、ザー／＼と云ふ波の音がして甲板へ出たらしく、袋の外から冷たい風がスー／＼と這入つて来て、擦り剥けた臂の處が急にピリ／＼痛み出したの。それと一緒に明るい太陽の光りが袋の目からキラ／＼とさし込んで来て眼が眩むくらのマブシクなつたので、妾は両手で顔をシツカリと押へてゐたやうよ。さうしたら足を抱へてゐた男が

「サア……天國へ来た……」

「ウフ、ハ、ハ、ワーニヤさんハイチャイだ。ちつとハア寒かんべえけれど」

「ソレ。ワン……ツー……スリイツ……」

と云ふうちに、私をゆすぶつてゐた六ツの手が一時に離れると、私はフワリと宙に浮いたやうになつたの。

その時に妾は何かしら大きな聲を出したやうよ。……やつと夢から醒めたやうにドキンとしてね……だけど、さう思ふ間も無く妾の頭が、船の外側の何處かへ打つかると一處にガーンとなつてしまつて、何時海の中へ落ち込んだかわからなかつたの……

それから又、妾が気が付いて眼を開いたのは一分か二分ぐらゐる後のやうにしか思へないのよ……何だか知らないけれど身體中に痺れが切れて、腰から下が痒くて／＼仕様が無いやうに思つてゐるうちにフイツと眼を開いてみたら、其處は忘れもしない此のレストランの地下室でね。いつぞや肺病で死んだニーナさんが寝かされてゐた其の寢臺の上に、湯タンポと襪襦つ布片で包まれながら、素つ裸體で放り出されてゐるぢや無いの。おまけに寢臺の横でドロ／＼燃えてゐるペーチカの明りでよく見ると、妾の手や足は凍傷で赤ぶくれになつてゐて、針金の痕が蛇みたひにビク／＼と這ひまはつてゐる上から、黒茶色の油膏薬がベト／＼ダラ／＼塗りまはしてあるぢや無いの。その汚ならしくて氣味の悪かつたこと……妾何だかわからないまゝビツクリして泣き出しちやつた位よ。

……だけど、それから間もなく料理番の支那人が持つて来て呉れた魚汁の美味しかつたと……その支那人のチーつて云ふのに聞いてみたら、その時は妾が死んでからちやうど二日目だつたさうよ。……妾の袋は、ルスキー島から二海里ばかりの沖に投げ込まれると間もなく、軍艦



と擦れちがつたジャンクに拾はれたので、その船頭の女房の介抱で息を吹き返したんです。さあ。十七番のナータシャさんも同じジャンクで拾はれてゐたし、パン屋のソニーさんも鯨捕り船だつたかに拾はれて来たのを、白軍の巡邏船が見付け出して警察に引き渡したんです。けどみんな水をドツサリ飲んでゐたんで駄目だつたんですとさあ。そのほかの袋は十日ばかり経つてから、タツタ二個だけ外海の岸に流れ付いたさうよ。妾怖いから見に行かなかつたけれど……ホントに可哀さうで仕様が無いの……。

妾……この話をするのはあんたが初めてよ。いゝえ……誰も知らないの……みんな死んでゐるから……。

それから浦鹽では可なり評判になつてゐるらしいのよ。……え……あんたが知らないのは無理も無いわよ。あんたはまだ浦鹽に来てゐなかつたんですからね。おまけに警察でも此の家でもまだ秘密にしてゐるから、新聞にも何も書いて無いさうよ。おほかた亞米利加を怖がつてゐるのでせう。あの軍艦がしたらしい事はみんな感づいてゐるんですからね。

え……それは何遍も訊かれたのよ。一體どうしてこんな眼に會はされたのかつてね。妾が気が付いてから後の一週間ばかりと云ふもの、警察の人や、うちの主人や、そのほかにも役人らしいエラさうな人が何人も毎日やうに妾の枕元に遣つて来ちや、威したり、嫌したりし

ながら、ずいぶん執拗く事情を尋ねたのよ。……おしまひには先方から色んな事を話して聞かせてね……あのヤングつて云ふ士官はトテモ悪い奴で、今年の夏に浦鹽に着いた時に、軍艦の荷物が税關にかゝらないのをいゝ事にして阿片をドツサリ浦鹽に持ち込んで、方々に賣り付けてお金を儲けた事がチャンとわかつてゐるんだ……だけれども遣り方がナカ／＼上手でハッキリした證據が上らない爲に、どうすることも出来ないで居たんだ。さうしたらヤングの畜生めスツカリ浦鹽の警察を舐めてしまつたらしく、今度は配下の水兵にお金を遣るかどうかして、めい／＼の色女を十何人も軍艦に擔ぎ込んで、上海か何處かの市場に賣りに行かうとしやがつた。……けれども軍艦が沖へ出ると、それが上官に見つかるかどうかしたもんだから一つ残らず海の中へ放り込んでしまつたのだ。あのヤングつて奴なんだ。……しかもその中で生き残つてゐるのはお前一人なんだからトテモ大切な證人なのだ。俺達はお前の仲間十何人の響きを取つて遣らうと思つてゐるのだから、早く氣をシツカリさして返事をして呉れなければ困る。御褒美の金はいくらでも遣るから本當の事を云つて呉れ……一體お前は何と云つてヤングに欺されたのか。どうして船の中に連れ込まれたのか。さうしてドン間違ひから海の中に放り込まれるやうな事になつたのか……ナシテいろんなトンチンカンな事を眞剣になつて訊くの……

だけと妾どうしてもそれに返事する事が出来なかつたのよ。……お前さんたちが云つてゐるのはみんな嘘だ。ヤングはそんなに悪い人間ぢやない。悪い奴はあの船の司令官一人だつて云つて



遣らうと思つても、どうしても其の譯を話す事が出来なかつたの。……何故つて云ふと。妾、正氣に歸つてからちやうど一週間ばかりと云ふもの、口を利くのが怖くて、仕様が無かつたんですもの。どうしても其の時の恐ろしさが忘れられなくなつて「ハイ」とか「イ、エ」とかいふ短かい返事をするのさへ怖くて、たまらない氣がしてね。それを無理に口を利かうとすると齒の根がガタ／＼云ひ出して、すぐに吐きさうになつて来るんですもの……仕方が無いから丸で啞者みたやうになつて眼ばかりパチ／＼させてゐたら、警察の人達もとう／＼諦らめてしまつて來なくなつたやうよ。

……だけれども、さうして妾が一人ボツチになつてからウト／＼しようとする、すぐにあの時の氣持が夢になつて見えて來て、寢床の中で汗ビツシヨリになりながら一生懸命藻掻かせられるの。夢うつゝに敷布を噛み破つたり、湯タンポを蹴り落したりしてね。其の恐ろしさつたら無かつたわよ。さうして、そんな夢のおしまひがけにはキツトあのヤングの悲しい、靜かな聲が、どこからともなくハツキリと聞えて來て、妾をサメ／＼と泣き出させたの。眼が醒めてから後までも妾は、そんな言葉の意味を繰り返しく／＼考へながら眼をまん丸く見開いて、いつまでも暗い天井を見詰めてゐたわよ。

そのうちに十日ばかりも經つと凍傷の方が思つたよりも軽く濟んだし、針金の痕も切れ／＼になつてお化粧で隠れる位に薄れて來たの。それに連れて身體がもとの通りに元氣付くし、口もど

うにか利けるやうになつて來たので、寢てゐるわけにも行かなくなつて思ひ切つて舞踏場へ出て見たら、間もなくあんたが遊びに來たでせう。

それあ不思議と云へばホントに不思議でしやうが無いのよ。妾はあんたに會つたのが神様の引き合せ／＼しか思へないのよ。だつて初めてあんたに會つたあの晩ね。あの晩から妾はピツタリとそんな怖い夢を見なくなつたのよ。おまけに前と比べると丸で生れかはつたやうに饒舌娘になつてしまつてね……さうしてそのうちに、あんたがたまらない程可愛くなつて來るに連れて、あのヤングが云つてゐた色んな言葉の本當の意味が一つ／＼に新しく、シミ／＼とわかつて來たやうに思ふの。さうしてヤングから教はつた色んな遊びをあんたに教へ見たくてしやうが無くなつて來たの。それも當り前の打つたり絞めたりする遊びなんかちや我慢出來ないの……一と思ひにあんたを殺すかどうかして終はなくちやトモやり切れなと思ふくらゐ、あんたが可愛いくて可愛いくてたまらなくなつたのよ。

……妾、それをやつとの思ひで今日まで我慢してゐたのよ。何故つて萬が一にも妾からそんな話を切り出したら、あんたがピツクリして逃げ出すかも知れないと思つたからよ。……だけれど、それがもう今夜になつたらトモ我慢がし切れなくなつちやつたのよ。

妾はけふも、いつものやうに日暮れ前から此の室に這入つて、お掃除を濟まして、ペーチカに火を入れたの。さうしてスツカリお化粧を濟ましてから、あんたを待ち／＼昨夜の飲み残しのお



酒を飲んでみたら、そのうちに室の中が静かアに暗くなつてね。向家の屋根の雪の斑と、その上にギラ／＼光つてゐる星だけがハッキリと見えるやうになつて来たぢや無いの……妾もうスツカリあの晩と同じ氣もちになつてしまつてね……たまらなく息苦しくて……。アラ……睡つちや嫌よ。……睡らないで聞いて頂戴つてばさあ……まあ嫌だ。本當に酔つちやつたのね……人が一生懸命に話してゐるのに……

……ね……わかつたでせう……あなたにもわかつたでせう。妾のさうした氣持ちが……ね……妾、お酒に酔つて云つてゐるのぢや無いのよ……いゝこと……ね。だから妾は今夜こそイヨイヨ本當にあんたを殺さうと思つて、ワザ／＼此の短劍を買つて来たのよ。英國出來の飛び切りつて云ふのをサア。一寸御覽なさいつてば……此のよく斬れること……妾の腕の毛がホラ……ヒイヤリとして……ね。ステキでせう。いゝこと。……この切つ尖であんたの心臓をヒイヤリと刺しとほして、その血のついた刃先を、すぐにズブ／＼と妾の心臓に突き刺して死んで終はうと思つてゐるのよ……トテモ氣持ちのいゝ心臓と心臓のキツスよ。ヤングが教へて呉れた世界一の贅澤な……一生に一度つきりの……

アラッ……妾今やつと思ひ出したわ。日本の言葉でこんな遊びの事をシンヂウつて云ふんでせう。ね。ね。

……サア。本氣で返事して頂戴よ。睡らないでサア。サアつてばサア。……いゝわ。妾あんた

が睡つてたつて構はないから……そのまんま突き刺しちやうから……いゝこと……？ ねッ……死んで呉れるでせう。ね……いゝこと……殺しても……嬉しい……ぢや……お別れの乾杯よ……ね……さうして寢床へ行くのよ……サア……

(をばり)



# るなか、の、じけん

## 大きな手が、り

村長そんぢやうさしの處ところの米倉こめくらから、白米はくまいを四俵よら盗ぬすんで行いつたものがある。

あくろ朝あさ早く駐在ちゆうざいの巡査じゆんささんが來きて調しらべたら、俵らを積つんで行いつたらしい車くるまの輪わのあとが、雨あめあがりの土つちにハツキリついでゐた。其そのあとをつけて行いくと、町まちへ出る途とちゆう中の、とある村外むらげれの一軒いっけん屋やの軒下のきしたに、その米俵こめらを積つんだ車くるまが置おいてあつて、その横よこの縁臺えんたいの上うへに、頬冠ほかむりをした男おとこが大だいの字じになつて、グウ／＼とイビキをかいてゐた。引ひつ捕とらへてみるとそれは、その界限かいげんで持もてあまし者ものの博奕ばくち打ちうちであつた。

博奕ばくち打ちうちは盗ぬすんだ米こめを町まちへ賣うりに行ゆく途中とちゆう、久ひさし振ぶりに身からだ體たいを使つかつてクタバレたので、チヨツトの積つりで休やすんだのが、思おもはず寝過ねあごしたのであつた。

腰繩こしづなを打うたれたまゝ車くるまを引ひつぱつてゆく男おとこの、うしろ姿すがたを見送みおくつた人々ひとびとは、ため息ためいきして云いつた。

「わるい事は出來んなあ。」

## 按摩の晝火事

五十ばかりになつて一人住居ひとりずまゐをしてゐる後家ごけさんが、ひる過あぎに近所きんじよまで用足もちたしに行いつて歸かへつて來くると、開あけ放はなしにしておいた自分の家おのゝうちの座敷ざしきのまん中に、知しり合あひの按摩あんまがラムプの石油せき油を撒まいて火ひを放はなけながら、煙けむりに噎ひせて逃にげ迷まつてゐる……と思おもふ間まも無なく床柱とこばしらに行ゆき當あたつて引ひづくり返かへつてしまつた。

後家ごけさんは、めんくらつた。

「按摩あんまさんが火事くわじ々々」

と大聲おほこゑをあげて村中むらぢゆうを走はしりまはつたので、忽たちち人ひとが寄よつて來きて、大事だいじに到いたらずに火ひを消けし止とめた。氣絶きぜつした按摩あんまは擔かつぎ出だされて、水みづをぶつかけられるとすぐに蘇生そせいしたので、あとから駈かけつた駐在ちゆうざい巡査じゆんさに引渡ひきわたされた。

大勢おほぜいに取り捲まかれて、巡査じゆんさの前まへの地べたに座すわつた按摩あんまは、水みづ涕はなをこすり／＼から申まをし立たてた。

「まつたくの出來心できごころで御座ございます。聲こゑをかけてみたところが留守りゆうすだとわかりましたので……」

「それからどうしたか」



と巡査は鉛筆を嘗めながら尋ねた。皆はシンとなつた。

「それで臺所から忍び込みまして、ラムプを探り當てましてその石油を撒いて火をつけましたが、思ひがけなく、うしろの方からも火が燃え出して熱くなりましたので、うろたへまして……雨戸は閉まつて居りますし、出口の方角はわからず……」

きいてゐた連中がゲラ／＼笑ひ出したので、按摩は不平らしく白い眼を剝いて睨みまはした。巡査も吹き出し相になりながら、ヤケに鉛筆を甜めまはした。

「よし／＼。わかつてる／＼。ところで、どういふわけで火を放けたのか。」

「へい。それはあの後家めが。」

と按摩は又、そこいらを睨みまはしつゝ、土の上で一膝進めた。

「あの後家めが、私に肩を揉ませるたんびに、變なことを云ひかけるので御座います。さうしてイザとなると手ひどく振りますので、その返報に……」

「イ、エ、違ひます。まるでウラハラです……」

と群集のうしろから後家さんが叫び出した。

みんなドツと吹き出した。巡査も思はず吹き出した。しまひには按摩までが一緒に腹を抱へ

た。

其時にやつと後家さんは、云ひ損なひに氣が付いたらしく生娘のやうに眞赤にやつたが、やが

て袖に顔を當てるとワ——ツと泣き出した。

## 夫婦の虚空藏

「あの夫婦は虚空藏さまの生れがはり……」

といふ小守娘の話を、新任の若い駐在巡査がきいて

「それは何といふ意味か。」

と問ひ訊してみた

「生んだ子をみんな賣りこかして、うまいものを喰つて酒を飲んでゐるから、コクウザウサマ……」

と答へた。巡査は其通り手帳につけた。それからその百姓の家に行つて取り調べると、五十ばかりの夫婦が二人とも口を揃へて

「ハイ。みんな美しい着物を着せてくれる人の處へ行き度いと申しますので……」  
と濟まし返つてゐる。

「フ——ム。それならば賣つた時の子供の年齢は……」

「ハイ。姉が十四の年で、妹が九つの年。それから男の子を見世物師に賣つたのが五つの年で



……。證文がどこぞに御座いましたが……間違ひは御座いません。つい此間のことで御座いますから。ハイ……」

「巡査は此婦が馬鹿では無いかと疑ひ初めた。しかも、なほよく氣をつけてみると、今一人の子供が女房の腹の中に居るやうす……」

「巡査は變な氣持ちになつて帳面を仕舞ひながら

「フーム。まだほかに子供は無いか」

と尋ねると、夫婦は忽ち眞青になつてひれ俯した。

「實は四人ほど墮胎しましたので……喰ふに困りまして……どうぞ御勘辨を——」

「巡査は驚いて又帳面を引き出した。

「ウーム不都合ぢや無いか。何故そんな勿體無いことをする」

といふと、青くなつてゐた亭主が、今度はニタ／＼笑ひ出した。

「へへムムムム。それほどでも御座いませぬ。酒さへ飲めばいくらでも出來ますので……」

「巡査は氣味がわるくなつて逃げるやうに此家を飛び出した。

「此事を本署に報告しましたら古參の巡査から笑はれましたヨ。何でも墮胎罪で二度ほど處刑されてゐる評判の夫婦ださうです。二人とも揃つて低能らしいので、誰も相手にしなくなつてゐたのださうです」

と、その巡査の話。

### 汽車の實力試験

「この石を線路に置いたら、汽車が引つくり返るか返らないか」

「馬鹿な……それ位の石はハネ飛ばして行くにきまつてゐる」

「インニヤ……引き割つて行くだらう」

「論より證據やつて見ろよ」

「よし来た」

間もなく木かゝつた列車は、轟然たる音響と共に、その石を粉碎して停車した。見物してゐた三人の青年は驚いて逃げ出した。

「あくる朝三人が村の床屋で落ち合つてこんな話をした。

「昨日は恐ろしかつたな。あんまり大きな音がしたので、おれあ引つくり返つたかと思つたよ。」

「ナアニ。機關車は全部鐵造りだからな。あんな石ぐらゐる屁でも無いだろ」

「しかし、引き碎いてから停まつたのは何故だらう。車の齒でも缺けたと思つたんかな」

「ナアニ。人を轢いたと思つたんだろ」



かうした話を、頭を刺らせながらきいてゐた一人の男は、列車妨害の犯人搔索に来てゐた刑事だつたので、すぐに三人を本署へ引つぱつて行つた。その中の一人は署長の前でふるへながらかう白状した。「三人の中で石を置いたのは私で御座います。けれどもはね飛ばしてゆくとばかり思つて居りましたので、……罪は一番軽いので……」と云ひ終らぬうちに巡査から横面を喰はせられた。三人は同罪になつた。

### スットントン

漁師の一人娘で生れつきの盲目が居た。色白の丸ボチャで、三味線なら何でも弾くのが自慢だつたので、方々の寄り合ひ事に、藝者代りに雇はれて重寶がられてゐた。ある時、近くの村の青年の寄り合ひに雇はれたが、案内に来た青年は馬方で、馬力の荷物の上ろの方に空所を作つて其處に座布團を敷いて、女と三味線と、下駄を乗せると、最新流行のスットントン節を唄ひながら、白晝の國道を引いて行つた。ところがその馬力が、正午過ぎに村へ歸りつくと、荷物のうしろには座布團だけしか残つてゐ

ないことが發見されたので、忽ち大騒ぎになつた。「途中の松原で畜生が小便した時までは、たしかに女が坐つてゐた」といふ馬方の言葉をたよりに、村中總出でそこいらの沿道を探しまはつたが、それらしい影も無い。村長や、區長や、校長先生や巡査が青年會場に集まつて、いろ／＼に首をひねつたけれども第一居なくなつた原因からしてわからなかつた。結局、娘の親たちへ知らせなければなるまい……といふので、とりあへず青年會員が二人、娘のうちへ自轉車を乗りつけると、晴れ着をホコリダラケにしたその娘が、おやぢに引き据ゑられて、泣きながら打たれてゐる。二人の青年は顔を見合はせたが、ともかくも飛び込んで押し止めて「これはどうした譯ですか」と尋ねると、おやぢは面目なささうに頭を掻いた。「ナアニ。こいつが此頃流行るスットントンといふ歌を知らんちうて逃げて歸つて來たもんですから……どうも申譯ありません……」二人の青年はいよ／＼譯がわからなくなつた。そこで、なほよく事情をきいてみると、最前女を馬力に乗せて引いて行つた青年が、途中でスットントン節をくり返しく唄つた。それは娘に初耳であつたので、先方で弾かせられては大變と思つて一生懸命に耳を澄ましたが、あひにく其



青年が調子外れ（音痴）だったので、歌の節が一々變テコに脱線して、本當の事がよくわからな  
い。これではとても記憶えられぬと思ふと、女心のせつなさに、下駄と三味線を両手に持つて、  
死ぬる思ひで馬力から飛び降りて逃げ歸つたものと知れた。

青年の一人は此話をきくと非常に感心したらしく、勢ひ込んで云つた。

「實に立派な心がけです。しかし心配することは無い。私たちと一緒に來なさい。これから夜  
通しが、りて青年會をやり直します。歌は途中で私が唄つてきかせます」

## 花嫁の舌喰ひ

一部落學つて不動様を信心してゐた。

その中で、夫婦と子供三人の一家が夕食の最中に、主人が箸をガラリと投げ出して

「タツタ今おれに不動様が乗り移つた」

と云ひつゝ、妻い顔をして座り直した。お神さんは慌てゝ疊の上にひれ伏した。ビツクリして泣  
き出した三人の子供も叱りつけて拜ました。

此噂が傳はると、其處いらぢうの信心家が、あとから／＼押しかけて來て「お不動様」の御利  
益にあづからうとしたので、家の中は夜通し寝ることも出来ない様になつた。

そのまん中に、木綿の紋付き羽織を引つかけた不動様が坐つて、恐ろしい顔で睨みまはしてゐ  
たが、やがて、うしろの方に座つてゐる、紅化粧した別嬪をさし招いた。その女は二三日近所  
へ嫁入つて來たものであつた。

「もそつと前へ出る。出て來ぬと金縛りに合はせるぞ。ズツと私の前に來い。怖がる事は無い。  
罪を淨めてやるのだ。サアよいか。お前は前の生に恐ろしい罪を重ねてゐる。その罪を淨めてや  
るから舌を出せ。もつと出せ。出さぬと金縛りだぞ……さうだ……」

かう云ひつゝ、其舌に顔をさし寄せて、ヂツと睨んでゐた不動様は、不意にパクリと其舌を頬張  
ると、ズルリ／＼とシヤブリ初めた。

女は衆人還視の中で舌をさし出したまゝ、眼を閉ぢてブル／＼ふるえてゐた。すると不動様は  
何と思つたか突然に、其舌を根元からプツリと噛み切つて、グル／＼と嘸み込んでしまつた。

女は悶絶したまゝ、息が絶えた。

あとで町から醫者や役人が來て取調べた結果、不動様の脳髓がずつと前から梅毒に犯されてゐ  
ることがわかつた。

この事實がわかるとその村の不動様信心が其後パツタリと止んだ。不動様を信仰すると梅毒に  
なるといふので……



## 感違ひの感違ひ

駐在巡査が夜ふけて線路の下の國道を通りかゝると、頬冠りをした大男が、ガードの上をスタ  
くと渡つて行く。何者だらう……とフト立ち停まると、その男が一生懸命に逃げ出したので、  
巡査も一生懸命に追跡を初めた。

やがて其男が村の中の、とある物置へ逃げ込んだので、すぐに踏み込んで引きずり出してみる  
と、それは村一番の正直者で、自分の家の物置に逃げ込んだものであることがわかつた。

巡査はガツカリして汗を拭きく

「馬鹿めが。何もしないのに何でおれの姿を見て逃げた。」

と怒鳴りつけると、その男も汗を拭きく、

「ハイ。泥棒と間違へられては大變と思ひましたので……どうぞ御勘辨を……」

## スキートポテト

心中のし損ねが村の駐在所に連れ込まれた……といふのでみんな見に行つた。

十燭の電燈に照らされた板張りの上の小さな火鉢に、消し炭が一パイに盛られてゐる傍に、男  
と女が寄り添ふやうにして跣まつて、濡れくたれた着物の袖を焙つてゐる。どちらも都の者らし  
く男は學生式のオールバックで、女は下町風の桃割れに結つてゐた。

硝子戸の外からのぞき込む人間の顔がふえて来るにつれて、二人はいよ／＼くつき合つて頭  
を下げた。

やがて四十四五に見える駐在巡査が、ドテラがけで悠然と出て来た。一パイ飲んだらしく、赤  
い顔をピカ／＼光らして二人の前の椅子にドタリと腰をかけると、身體をグラ／＼させながら、  
いろんな事を尋ねては帳面につけた。そのあげくにかう云つた。

「つまりお前達二人はスキートポテトであつたのぢやナ」

硝子戸の外の中の暗の中で二三人クス／＼と笑つた。

すると、うつむいてゐた若い男が、濡れた髪毛を右手でパツとうしろへはね返しながら、キツ  
と顔をあげて巡査を仰いだ。異状に興奮したらしく、白い唇をわな／＼かしてキツパリと云つ  
た。

「……違ひます……スキートハートです……」

「フフ——ウム。」

と巡査は冷やかに笑ひながらヒゲをひねつた。



「フ——ム。ハートとポテトとはどう違ふかな」

「ハートは心臓で、ポテトは芋です」

と若い男はタ、キつけるやうに云つたが、硝子戸の外でゲラ／＼笑ひ出した顔をチラリと見キはすと、又グツタリとうなだれた。

「フ、フ、フ、さうかな。しかしドツチにしても似たもんぢやないかな」

若い男は怪訝な顔をあげた。硝子戸の外で笑ひ聲も同時に止んだ。巡査は得意らしく反り身になつた。

「ドツチもいらざるところで芽を吹いたり、くつつき合ふて腐れ合ふたりするではないか……ア——ン」

人が居なくなつたかと思ふ静かさ……と思ふ間も無く、硝子戸の外でドツト笑ひの爆發……

若い男はハツと両手を顔にあて、ブル／＼と身をふるはした。初めから嘲弄されてゐたことがわかつて……同時に、横に居た桃割れも、ワツとばかり男の膝に泣き俯した。

硝子戸の外で笑ひ聲が止め度も無く高まつた。巡査も腕を組んだまゝ天井をあふいだ。

「アアハア／＼／＼。馬鹿なやつどもぢや。アアハアアアハア……」

### 空屋の傀儡踊

みんな田の草を取りに行つてゐたし、留守番の女子供も午睡の眞最中であつたので、只さへ寂びれた田一町の全體が空ツポのやうにヒツソリしてゐた。その出外れの裏表二間をあげ放した百姓家の土間に、一人の眼のわるい乞食爺が突立つて、見る人も無く、聞く人も無いのにアヤツリ人形を踊らせてゐる。

人形は鼻の缺けた振り袖姿で、色のさめた赤い鹿の子を頭からブラ下けてゐた。

「観音シヤマをかこいつつけエて——。會ひに——来たンヤンら。みんなンミンヤンら……」

振りイ——の——たンモンとンにイ——北ンしよくウレエ。暗れン間も——。さんら——にイ……

……な——かア……」

歯の抜けた爺さんの義太夫はすこぶる怪しかつたが、それでも可なり得意らしく、時々霧んだ眼を天井に向けては人形と入れ違ひに首をふり立てた。

「へ——イ。このたびは二の替りといたまして朝顔日記大井川の段……テ、テ、テ、天道シヤマ

ア……きこえませぬ／＼……チン……きこえませぬわいニヨ——チツ／＼／＼／＼」

「妻ア——ウワア。なんミンだんにイ——。か——き——くンるえ——テへ、テへ、テへ。シヨレみた



んよ……光ウ秀エドンの……」  
振り袖の人形が何の外題でも自由自在に次から次へ踊つて行くにつれて、爺さんのチョボもだん／＼と、れ／＼に怪しくなつて行つた。

しかし爺さんは、どうしたのかナカ／＼止めなかつた。ヒツソリした家の中で汗を拭き／＼シヤ嘎れた聲を絞りつゞけたので、人通りのすくない時刻ではあつたが、一人立ち止まり二人引つ返ししてゐるうちに、近所界限の女子供や近まはりの田に出てゐた連中で、表口が一パイになつて来た。

「狂人だらう」

と小聲で云ふものもあつた。

そのうちに誰かが知らせたものと見えて此家の若い主人が歸つて来た。手足を泥だらけにした野良着のまゝであつたが、肩を聳やかして土間に這入るとイキナリ、人形をさし上げてゐる爺さんの襟首に手をかけてグイと引いた。振袖人形がハツと仰天した。さうして次の瞬間にはガツクリと死んでしまつた。

見物は固唾をのんだ。どうなることか……と眼を睜りながら……。

「……ヤイ。キ……貴様は誰に……とはつて俺の家へ這入つた……こんな人寄せをした……」  
爺さんは白い眼を一パイに見開いた。口をアングリとあけて呆然となつたが、やがて震える手

で傍の大きな信玄袋の口を擴げて、生命よりも大切相に人形を抱へ上げて落し込んだ。それから両手をさしのべて破れた麥稈帽子と竹の杖を探りまはし初めた。

これを見てゐた若い主人は表に立つてゐる人々をふり返つてニヤリと笑つた。人形を入れた信玄袋をソツと取り上げてうしろ手に隠しながらわざと聲を大きくして怒鳴つた。

「サア云へ。何でこんな事をした。云はないと人形を返さないぞ。」

何かボソ／＼云ひかけてゐた見物人が又ヒツソリとなつた。

麥稈帽を阿彌陀に冠つた爺さんは、竹の杖を持つたまゝガタ／＼とふるえ出した。ベツタリと土間に座りながら片手をあげて拜む眞似をした。

「……ど……どうぞお助け……御勘辨を……」

「助けてやる。勘辨してやるから申し上げる。何が爲めに此家に這入つたか。何の必要があれば……最前からアヤツリを使つてコンナに大勢の人を寄せたのか。此處を公會堂とばし思つてしたことか。」

爺さんは見えぬ眼で次の間をふり返つて指した。

「……サ……最前……私が……此お家に這入りまして……人形を使ひ初めますと……ア……あそこ居られた何處かの旦那様が……イ……一圓……ク下さいまして……ヘイ……おれが飯を喰つてゐる間に……貴様が知つてゐるだけ踊らせてみよ……トト……おつしやいましたので……へ



イ……オタスケを……」

「ナニ……飯を喰つたア……一圓くれたア……」

若い主人はメンクラツたらしく眼を白黒さしてゐたが、忽ち青くなつて信玄袋を投げ出すと、次の間の上り框に馳け寄つた。そこにひろげられた枕屏風の蔭に空つぽの飯櫃がころがつて、無残に喰ひ荒された漬物の鉢と土瓶と箸とが、飯粒にまみれたまゝ散らばつてゐる。そんなものをチラリと見た若い主人の眼は、すぐに佛壇の下に移つたが、泥足の儘かけ上つて、半分開いたまんまの小抽出しを両手でかきまほした。

「ヤラレタ……」

と云ふうちに見る／＼青くなつてドツカリと尻餅を突いた。頭を抱へて縮み込んだ。表の見物人はまん丸にした眼を見交はした。

「……マア……可哀相……留守番役のおふくろが死んだもんぢやけん。」

「キツト流れ渡りの坑夫のワルサぢやろ……」

その囁やきを押しわけて此家の若い妻君が歸つて來た。やはり野良行きの姿であつたが、信玄袋を探し當て、出て行く乞食爺の姿を見かへりもせず、泥足のまゝツカノ／＼と疊の上にあがる。若い主人の前にベツタリと座り込んだ。頭の手拭ひを取つて鬢のほつれを掻き上げた。無理に押しつけたやうな聲で云つた。

「お前さんは……お前さんは……此小抽出しに何を入れて居んなさつたのかへ……妾に隠して……一口も云はないで……」

若い主人はアグラを搔いて頭を抱へたまゝ返事をしなかつた。やがて濡れた筒ッポウの袖口で涙を拭いた。

下唇を噛んだまゝ、ヂツと此様子をながめてゐた妻君の血相がみる／＼變つて來た。不意に主人の胸倉を取ると猛烈に小突きまはし初めた。

「……えエツ。口惜しいツ。おほかた大濱（白首街）のアンチキシヤウの處へ持つて行く金ぢやつたろ。畜生々々……二人で夜の眼を寝ずに働らいた養蠶の賣り上げをば……いつまでも渡らぬと思つて居つたれば……エ、ツ……クヤシイ、クヤシイ。」

しかしいくら小突かれても若い主人はアツツリのやうにうなだれて、首をグラ／＼させるばかりであつた。

二三人見兼ねて止めに這入つて來たが、一番うしろの男は表の人だかりをふり返つて、ペロリと赤い舌を出した。

「これがホンマのアヤツリ芝居ぢや。」

みんなゲラ／＼笑ひ出した。

妻君が主人の胸倉を取つたまゝアーンと泣き出した。



# 一ふく三杯

お安さんといふ獨身者で、村一番の音坊の六十婆さんが、鎮守様のお祭りの晩に不思議な死にやうをした。

……たつた一人で寝起きをしてゐる村外れの茶屋の竈の前で、瘡せ枯れた小さな身體が虚空を擱んで悶絶してゐた。平生腰帯にしてゐた絹のボロ／＼の打ち紐が、皺だらけの首に三廻りほど捲かれて、ノドボトケの處で唐結びになつたまゝシツカリと肉に喰ひ込んでゐたが、その結び目の近まはりが血だらけになるほど掻き撈られてゐる。しかし何も盗まれたもやうは無く外から人の這入つた形跡も無い。法印さんの處から貰つて歸つたお重詰めは箸をつけないまゝ煎餅布團の枕元に置いてあつた。貯金の通ひ帳は方々探しまはつたあげく竈の灰の下の落し穴から發見された。その遺産を受け繼ぐ可き婆さんのたつた一人の娘と、その婿になつてゐる電工夫は目下東京に居るが、急報によつて歸郷の途中である。婆さんの屍體は解剖することになつた……近來の怪事件……といふので新聞に大きく出た。

お安婆さんの茶店は鐵道の交叉點のガードの横から海を見晴らしたところにあつた。古ぼけた葎簧張りの下に、すこしばかりの駄菓子とラムネ。溢茶を煮出した眞黒な土瓶。剃げた八寸膳の

上に薄汚ない茶碗が七ツ八ツ……それでも夏は海から吹き通しだし、冬の日向きがよかつたのでよく人が休んだ。

主人公の婆さんは三十いくつかの年に罹つた熱病以來、腰が抜けて立ち居が不自由になると、生れて間も無い娘を置いて去りにして亭主が逃げてしまつたので、田畠を賣り拂つて此處で茶店を開いた。その娘がまたなか／＼の別嬪の利發もので、十九の春に、村一番の働らき者の電工夫を婿養子に取つたが、今は夫婦とも東京の會社につとめて月給を貰つてゐるとか。

「その娘夫婦が東京に孫を見に来い／＼と云ひますけれども、まあ成るだけ若い者の足手まとひになるまいと思つて此通りどうやらからかうやらして居ります。自分の身のまはりの事ぐらゐは足腰が立ちますので……娘夫婦も此頃はワタシに負けて、其中に孫を見せに歸つて來ると云ふて居ります……」

と云ひながら婆さんは、青白い頬をヒクツカせて、さも得意さうにニヤリとするのであつた。  
「……フン。それでも獨りで淋しかろ……」

と聞き役になつたお客が云ふと婆さんは又オキマリの様にかう答へた。  
「へエあなた。二度ばかり泥棒が這入つて貴様は金を溜めてゐるに違ひ無いと申しましたけれど、ワタシは働らいたお金をみんな東京の娘の處に送つて居ります。それでも、あると思ふならワタシを殺すなりどうなりしてユツクリと探しなさいと云ひましたので、茶を飲んで歸りまし



た。

しかし此婆さんが千圓の通ひ帳を二ツ持つてゐるといふ噂を本當にしないものは村中で一人も居なかつた。それ位に此婆さんの吝坊は有名で、殆んど喰ふものも喰はずに溜めてゐると云つてもいゝ位であつた。そんな評判がいろ／＼ある中にも小學校の生徒まで知つてゐるのは「お安さん婆さんの一服三杯」といふ話で……

「フフン。その一服三杯といふのは飯のことかね……」  
と村の者の云ふことをきいてゐた巡查は手帳から眼を離した。

「へエ。それはソノ……とても旦那方にお話し致しまして本當になさらないお話で……しかしあの婆さんが死にましたのは、確かにソノ一服三杯のおかげに違ひ無いと皆申して居ります……」

「フフン。まあ話してみろ。参考になるかもしれん」

「へエ。それぢやアまあお話ししてみますが、あの婆さんは毎月一度宛驛の前の郵便局へ金を預けに行く時のほかは滅多に家を出ません。いつもたつた一人であつたので御座います。が、それでも村の寄り合ひとか何とかいふ御馳走ことにはキツト出てまゐります。それも前の晩あたりから飯を食はずに腹をベコ／＼にしておいて、あくる日は早くから店を閉めて、松葉杖を突張つて出て来るので御座います。いよく酒の座となりますと先づ猪口で一パイ飲であの青

い顔を眞赤にしてしまひます。それから飯ばかりを喰ひ初めて時々お汁をチュツ／＼と吸ひます。潰けもすこしは喰べますが大抵六七八杯は請け合ひのやうで……それからいよく喰へぬとなりますと煙草を二三服吸ふて一息入れてから又初めまゝのでアラカタ二三杯位は詰めこみまゝす。それからあとのお平や煮つけなどを飯と一緒に重箱に一パイ詰めて歸つて其日は何もせずにあくる日の夕方近くまで寝ます。それからポツ／＼起きて重箱の中のものをついて夕飯にする。御承知の通り此邊の御馳走ごとの寄り合ひは大抵時候のよい頃に多いので、どうかすると重箱の中のもの、その又あくる日の夕方までありますさうで……つまるところ一度の御馳走が十ペンの飯にかけ合ふことに……」

「ウーーム。しかしよく食傷して死なぬものだな」

「まつたくで御座います旦那様。あの瘦せこけた小さな身體にどうして這入るかと思ふくらゐで……」

「ウーーム。しかしよく考へてみるとそれは理窟に合はんぢや無いか。そんなにして二日も三日も店を閉めたら、つまるところ損が行きはせんかな」

「へエ。それがです旦那様。最新お話し申上げましたその娘夫婦も、それを恥かしかつて東京へ逃げたのださうでございますが、お安さん婆さんに云はせますと……『自分で作つたものは腹一パイ喰べられぬ』といふのださうで……ちやうどあの婆さんが死にました日がこゝいらのお祭り



で御座いましたが、法印さんの處で振舞ひがありましたので、あの婆さんが又『一服三杯』をやらかしました。それが夜中になつて口から出さうになつたので勿體なさに、紐でノド首を縛つたものに違ひ無い。さうして息が詰まつて狂ひ死にをしたのだらう……とみんな申して居りますが……」

「アハ、……。そんな馬鹿な……いくら沓ン坊でも……アツハツ……」

「巡査は笑ひく〜手帳と鉛筆を仕舞つて歸つた。しかしお安さん婆さんの屍體解剖の結果は此話とピッタリ一致したのであつた。」

### 蟻と蠅

山の麓に村一番の金持ちのお邸があつて、そのまはりを十軒ばかりの小作人の家を取り巻いて一部落を作つてゐた。

お邸の裏手から山へ這入るところに柿の樹と柔の畑があつたが、梅雨があけてから小作人の一人が山へ行きかゝると、その一番大きい柿の樹の根元から赤ん坊の足が一本洗ひ出されて、蟻と蠅が一パイにたかつてゐるのを發見したので眞青になつて飛んで歸つた。やがて駐在所から新しい自轉車に乗つた若い巡査がやつて来て掘り出してみると、六ヶ月位の

胎兒で死後一週間を経過してゐると推定されたので、その部落の中の女が一人々々に取り調べられたが怪しい者は居なかつた。結局残るところの嫌疑者は、此頃都の高等女學校から歸省して御座るお邸のお嬢さん只一人……しかもすこぶるつきのハイカラサンで、大旦那が遠方行き留守中を幸ひにゴロ〜寝てばかり御座る様子がどうも怪しいといふことになつた。

若い巡査は或る朝サアベルをガチャ〜云はせて其お邸の門を潜つた。

「ソラ御座つた。イヨ〜お嬢さんが調べられさつしやる」

と家中のものが鳴りを静めた。野良から此様子を見て走つて来るものもあつた。

玄關に巡査を出迎へて來意をきいた娘の母親が、血の氣の無くなつた顔をして隠居部屋に來てみると、細帯一つで寝そべつて雑誌を讀んでゐた娘は、お白粉の残つた顔を撫でまはしながら蓬もたる頭を擡げた。

「何ですつて……妾が墮胎したかどうか巡査が調べに來てゐるんですつて……ホ、……、生意氣な巡査だわネエ。アリバイも知らないで……」

玄關に近いので母親はハラ〜した。眼顔で制しながら恐る〜問ふた。

「……ナ……何だえ。その蟻とか……蠅とか云ふのは……アノ胎兒の足にたかつてゐた蟲のことかえ……」

「ホ、……、そんなものぢや無いわよ。何でもい〜から巡査さんにさう云つて頂戴……妾には



チャンとしたアリバイがありますから心配しないでお歸んなさいッテ……  
母親はオロ／＼しながら玄關に引返した。

しかし巡査は娘の聲をきいてゐたらしかつた。少々興奮の體で仁王立ちになつて、ポケットから手帳を出しかけてゐたが、母親の顔を見るとまだ何も云はぬ先にグツと睨みつけた。

「其のアリバイとは何ですか」

母親はふるえ上つた。よろめきたふれむばかりに娘のところへ馳け込むと、雑誌の續きを讀みかけてゐた娘は眉根を寄せてふり返つた。

「ウルサイわねえ。ホントニ。そんなに妾が疑はしいのなら妾の處女膜を調べて御覽なさいッテ……サウおつしやい……失禮な……」

母親はへたく／＼と座り込んだ。巡査も眞赤になつて自轉車に飛び乗りながら逃げるやうに立ち去つた。

それ以來此部落ではアリバイといふ言葉が全く別の意味で流行してゐる。

## 赤い松原

海岸沿ひの國有防風林の松原の中に、托鉢坊主とチヨンガレ夫婦とが、向ひ合はせの蒲鉾小舎

を作つて住んでゐた。

三人は極めて仲がい／＼らしく、毎朝一緒に松原を出て、一里ばかり離れた都會に貫ひに行く。

さうして歸りには又何處かで落ち合つて、何かしら機嫌よく語り合ひながら歸つて來るのであつた。月のいゝ晩なぞは、よくその松原から浮き上るやうな面白い音がきこえるので、村の若い者が物好きに覗いてみると蒲鉾小舎の横の空地で、チヨンガレ夫婦のベコ／＼三味線と四つ竹（肉の厚い竹片を二枚宛兩手に持つて打ち合はせながら囃すもの）の拍子に合はせて向ふ鉢巻の坊主が踊つてゐたりした。横には焚火と一升徳利なぞがあつた。

そのうちに世間が不景氣になるにつれて、坊主の方には格別の影響も無い様子であるがチヨンガレ夫婦の貫ひが、非常に減つた模様で、松原へ歸る途中でも、そんな事かららしく、夫婦で口論をしてゐることが珍らしくなくなつた。或る時なぞは村外れで掴み合ひかけてゐるのを坊主が止めてゐたといふ。

ところが其うちに三人の連れ立つた姿が街道に見られなくなつて、その代りに頭を青々と丸めて法衣を着たチヨンガレの托鉢姿だけが村の人の眼につくやうになつた。

……コレは可怪しい。和尚の方は一體何をしてゐるのか……と例によつてオセツカイな若い者が覗きに行つてみると、坊主はチヨンガレの女房を自分の蒲鉾小屋に引きずり込んで魚などを釣つて納まり返つてゐる。夕方にチヨンガレが歸つて來ても女房は平氣で坊主のところにくつ付い



てゐるし、チヨンガレも獨りで煮タキして獨りで寝る……おほかた法衣と女房の取り換へつこをしたのだらう……といふのが村の者の解釋であつた。  
ところが又其後になるとチヨンガレの托鉢姿が何時からともなく松原の中に見えなくなつた。しかし蒲鉾小舎は以前のまゝで、チヨンガレの古巢は物置みたやうに枯れ松葉や古材木が詰め込まれてゐた。さうして坊主がもとの木阿彌の托鉢姿に歸つて松原から出て行くと、女房は女房で坊主と別々にベコベコ三味線を抱へて都の方へ出かける。夜は一緒に寝てゐるのであつた。  
「坊主も遊んで居られなくなつたらしい。」  
と村の者は笑つた。

そのうちに冬になつた。

或る夜ケタタマシク村の半鐘が鳴り出したので、人々が起きてみると其松原が大火焔を噴き出してゐる。アレヨ／＼といふうちに西北の烈風に煽られて、見る間に數十町歩を烏有に歸したので、都の消防が残らず馳けつけるなぞ一時は大變な騒ぎであつたが、幸ひに人畜の被も無く夜明け方に鎮火した。火元は無論その蒲鉾小舎で、二軒とも引き崩して積み重ねて焼いたらしい灰の下から半焼けの女房の絞殺屍體と、その下の土饅頭みたやうなもの、中から、半分骸骨になつたチヨンガレの屍體があらはれた。しかもそのチヨンガレの頭蓋骨が掘り出されると、噛み締めたい歯が自然と開いて、中から使ひさしの猫イラズのチューブがコロガリ出たので皆ゾツとさせられた。

せられた。

### 郵便局

鎮守の森の入口に村の共同浴湯と、青年會の道場が並んで建つてゐた。夏になると其邊で、撃劍の稽古を済ました青年たちが、歌を唄つたり、湯の中で騒ぎまはつたりする聲が毎晩のやうに田圃越しの本村まで聞こえた。  
ところが或る晩の十時過の事、お面お小手の聲が止むと間もなく、道場の電燈がフツと消えて人聲一つしなくなつた。……と思ふとそれから暫くして、提灯の光りが一つ森の奥からあらはれて、共同浴湯の方に近づいて来た。

「来たぞ／＼シツ／＼聞こえるぞ」ナアニ大丈夫だ。相手は耳が遠いから……」  
と云つたやうな囁きが浴湯の周囲の物蔭から聞こえた。ピシヤリと蚊をたたく音だの、ヒツヒツと忍び笑ひをする聲だのが續いて起つて又消えた。  
提灯の主は元五郎と云つて、此道場と浴湯の番人と、それから役場の使ひ番といふ三つの役目を村から受け持たせられて、森の奥の廢屋に住んでゐる親爺で、年の頃はもう六十四五であつたらうか。それが天にも地にもたつた一人の身よりであるお八重といふ白痴の娘を連れて仕舞湯に



入りに来たのであつた。

親爺は湯殿に這入ると、天井からブラ下がつてゐる針金を探つて、今日買つて来たばかりの五分心の石油ランプを吊して火を灯けた。それから提灯を消して傍の壁にかけて、ポロポロの浴衣を脱くと、くの字なりに歪んだ右足に黒い膏薬をベタベタと貼りつけたのを、さも痛さうにランプの下に突き出して撫でまはした。

其横で今年十八になつたばかりのお八重も着物を脱いだが、村一等の別嬪といふ評判だけに美しいには美しかつた。しかし、どうしたわけか、其下腹が、奇妙な恰好にムツクリと膨らんでゐるために、親爺の曲りくねつた足と並んで、一種異様な對照を作つてゐるのであつた。

「ホントウダ〜」とふくれてゐる〜「ドレ〜」俺にも見せろよ〜「フーン誰の子だらう〜」わかるものか〜俺ア知らんぞ嘘吐け〜「お前の女だらうが〜馬鹿云へ〜コン畜生〜シツ〜」

といふやうなボソ〜話が、又も浴湯のまはりで起つた。しかし親爺は耳が遠いので氣がつかないらしく、黙つて曲つた右足を湯の中に突込んだ。お八重もそのあとから眞似をするやうに右足をあげて這入りかけたが、フイと思ひ出したやうにその足を引つこめると、流し湯へ跣んでシヤ〜と小便をし初めた。

元五郎親爺はその姿を霞んだ眼で見下したまゝ妙な顔をしてゐたが、やがてノツソリと湯から出て来て、小便を仕舞つたばかりの娘の首すぢを掴むと、その膨れた腹をグツト押へつけた。

「これは何ぢやえ」

「あたしの腹ぢやかな」

と娘は顔を上げてニコ〜と笑つた。クス〜といふ笑ひ聲が又、そこ此處から起つた。

「それはわかつとる〜：けんどナ〜：此膨れとるのは何ぢやえ〜：これは〜：」

「知らんがな〜：あたしは〜：」

「知らんちうことがあるものか〜：いつから膨れたのぢやえ此腹はコンゲニ〜：今夜初めて氣が付いたが〜：」

と親爺は物凄い顔をしてランプをふりかへつた。

「知らんがナ〜：」

「知らんちうて〜：お前だれかと寝やせんかな。おれが用達しに行つとる留守の間に〜：エ、コレ〜：」

「知らんがナ〜：」

と云ひ〜ふり仰ぐお八重の笑顔は、女神のやうに美しく無邪氣であつた。

親爺は困惑した顔になつた。そこいらをオド〜見まはしては新らしいランプの光りと、娘の膨れた腹とを、さも恨めしげに何遍も〜見比べた。

「オラ知つとる〜：ニヒツ〜」



といふ小さな笑ひ聲がその時に入口の方から聞えた。其聲が耳に這入つたかして、元五郎親爺はサツと血相をかえた。素裸體のまゝ曲つた足を突張つて、一足飛びに入口の近くまで來た。それと同時に

「ワ—ツ」逃げろツ」

といふ聲が一時に浴場のまはりから起つて、ガヤ／＼ガヤと笑ひながら、八方に散つた。其あとから薪割用の古鉈を提げた元五郎親爺が跛引き／＼駆け出したが、これも森の中の闇に吸ひ込まれて、足音一つ聞こえなくなつた。

その翌る朝の事。元五郎親爺は素裸體に鉈をしつかりと搦んだまゝの死體になつて、鎮守さまのうしろの井戸から引き上げられた。又娘のお八重は、そんな騒ぎをちつとも知らずに廢屋の臺所の板張りの上でグ／＼睡つてゐたが、親爺の死體が擔ぎ込まれても起き上る力も無いやうすゝ。そのうちにそこいらが變に臭いので、よく調べてみると、お八重は叱るものが居なくなつたせいか、昨夜の残りの冷飯の全部と糠味噌の中の大根や菜つ葉を糠だらけのまゝ残らず平らげた爲に、烈しい下痢を起して腰を抜かしてゐることがわかつた。

そのうちに警察から人が來て色々取調べの結果、昨夜からの事が判明したので、元五郎親爺の死因は過失から來た急劇腦震盪といふことに決定したが、一方にお八重の胎兒の父はどうしてもわからなかつた。

初めはみんな、擊劍を使ひに行く青年たちのイタツラであらうと疑つてゐたが、八釜し屋の區長さんが主任みたやうになつて、一々青年を呼びつけて手厳しく調べてみると、此村の青年ばかりで無く、近所の村々からお八重をヒヤカシに來てゐる者があるらしい。それでお八重には郵便局といふ綽名がついてゐることまで判明したので、區長さんは開いた口が塞がらなくなつた。

すると、その區長さんの長男で醫科大學に行つてゐる駒吉といふのが、ちやうど其時に歸省してゐて、此話をきくと恐ろしく同情してしまつた。實地經驗にもなるといふので、すぐに學生服を着てお八重の居る廢屋へやつて來て、新しい聴診器をふりまはしながら親切に世話をし初めた。母親に頼んで三度三度お粥を運ばせたり、自身に下痢止めの薬を買つて來て飲ませたりしたので「サテは駒吉さんの種であつたか」といふ噂がパツと立つた。しかし駒吉はそんな事を耳にもかけずに、休暇中毎日のやうにやつて來て診察してゐると、今度はその駒吉が、お八重の裸體の寫眞を何枚も撮つて、机の曳出しに入れてゐることが誰云ふとなく評判になつたので、流石の駒吉も閉口したらしく、休暇もそこ／＼に大學に逃げ返つた。さうすると又、あとから此事をきいた區長さんがカン／＼に怒り出して、母親がお八重の處へ出入りするのを嚴重にさし止めてしまつた。

「お八重が子供を生みかけて死んでゐる」といふ通知が村長と區長と駐在巡查の家へ同時に來たのはそれから二三日経つての事であつた。それは鎮守の森一パイに蟬の聲の大波が打ち初めた朝



の間の事であつたが、その森蔭の廢屋へ馳けつけた人は皆、お八重の姿が別人のやうに變つてゐるのに驚いた。誰も喰ひ物を與へなかつたせるか、美しかった肉付きがスツカリ落ちこけて骸骨のやうになつて仰臥してゐたが、死んだ赤子の片足を半分ばかり生み出したまゝ苦悶しいく絶息したらしく、兩手の爪をボロ疊に掘り立て、全身を反り橋のやうに硬直させてゐた。その中でも取りわけて恐ろしかつたのは、蓬々と亂れかゝつた髪の毛の中かろ、眞白くクワツと見開いてゐた兩眼であつたといふ。

「お八重の婿どん誰かいナア

阿呆鴉か梟かア

お宮の森のくら闇で

ホ——イ／＼と啼いてゐる。

ホイ、ホイ、ホ——イヨ——」

といふ子守唄が今でもそこいらの村々で唄はれてゐる。

## 赤 玉

「ナニ……兼吉が貴様を毒殺しようとした？……」

と巡查部長が眼を光らすと、その前に突立つた坑夫體の男が、兩手を縛られたまゝ、うなだれてゐた顔をキツと擽げた。

「ヘイ……そんで……兼吉をやつつけましたので……」

と吐き出すやうに云つて、眼の前の机の上に新聞紙を敷いて横たへてある鶴嘴を睨みつけた。

その尖端の一方にまだ生々しい血の塊まりが粘りついてゐる。

巡查部長は意外といふ面もちで威儀を正すかのやうに坐り直した。

「フーム。それは何様して……何で毒殺しようとしたんか……」

「ヘイそれはかうなので……」

と坑夫體の男は唾を呑み込みながら、入口のタ、キの上に藁を着せて横たへてある被害者の死骸をかへりみた。

「私が一昨日から風邪を引きまして納屋に寢残つて居りますと、あの兼の野郎が仕事を早仕舞ひにして歸つて来て「工合はどうだ」と訊きました……そこで旦那……これはもう破れカブレでぶちまけますが、大體あの兼の野郎と私との間には六百ケンで十兩ばかりのイキサツがありますので……尤も私が彼奴に十兩貸したのか……向ふから私が十兩借りたのか……そこんところ、あんまり古い話なので忘れてしまひまして……チツポケナ金ですからどうでも構はんと思つて居ても兼の顔さへ見ると奇妙に其事が氣にかゝつてしやうがなくなりますので……けんど其ういかに兼



が何とか云つて来たらどつちが借りたか、わかるだらうと思つて黙つて居たんですが……そんなで……私は見舞ひを云ひに来た兼の顔を見ると又其事を思ひ出しました。さうして……どうも熱が出たやうで苦しうて仕様が無い。こんな事は生れて初めてだから事に依ると俺は死ぬんかもしれ……と云ひますと兼の野郎が……そんなら俺が醫者を呼んで来て遣らうと云つて出て行きましたが、待つても待つても歸つて来ません。私は兼の野郎が唾を引つけて行き居つたに違ひ無いと思つてムカ／＼して居りましたが、そのうちに十二時の汽笛が鳴りますと、何處かで喰らつて眞赤になつた兼が、雨にズブ濡れになつて歸つて来て私の枕元にドン座ると大聲でわめきました。何でも……事務所の醫者(炭坑醫)は二三日前から女郎買ひに失せ居つて、事務所を開けてケツカル……今度出會つたら向ふ脛をぶち折つてくれる……といふので……

「……フム……不都合だなそれは……」

「……ネエ旦那……あいつらア矢つ張り洋服を着たケダモノなんで……」

「ウム／＼。それから兼はどうした」

「それから山の向ふの村の醫者ン所へ行つたら、此奴も朝から鰻取りに出かけて……」

「ナニ鰻取り……」

「へエ。さうなんで……此頃は毎日毎日鰻取りにかゝり切りで、家には滅多にうせ居らんさうで……よくきいてみると其醫者は、本職よりも鰻取りの方が名人なんで……」

「ブツ……馬鹿な……餘計な事を喋舌るな」

「へイ……でも兼の野郎がさう吐かしましたので……」

「フーム。ナルホド。それからどうした」

「それから兼は、その村の荒物屋を探し出して風邪引きの妙薬は無いかちうて聞きますと……此頃風邪引きが大バヤリで賣り切れてしまつたが馬の熱さまして赤玉ちうのならある。馬の熱が取れる位なら人間の熱にも利くだらうが……と其荒物屋の親仁が云ふので買つて来た……しかし畜生は薬がよく利くから分量が少くてよいといふ事を俺はきいてゐる。だから人間は餘計に服まなければ利くまいと思つて、その赤玉ちうのを二つ買つて来た。これを一時に服んだら大低利くだらう。金は要らぬから、とにかく服んで見イ……と云ふうちに兼は白湯を汲んで来て、薬の袋と一緒に私の枕元へ並べました。私は兼の親切に涙がこぼれました。このアンバイでは俺が兼に十圓借りてゐたに違ひ無いと思ひ／＼薬の袋を破つてみますと、赤玉だといふのに青い徽が一パイに生えて居りまして、さし渡しが一寸近くもありましたらうか……それを一ツ宛白湯で丸呑みにしたんですがトテも骨が折れて、息が詰まりさうで、汗をビツシヨリかいてしまひました」

「……フーム。それで風邪は治つたか」

「へイ……今朝になりますとまだ些しフラ／＼しますが、熱は取れた様ですから景氣つけに一パイやつて居りますところへ、昨日兼からの言傳をきいたと云つて鰻取りの醫者が自轉車でやつて